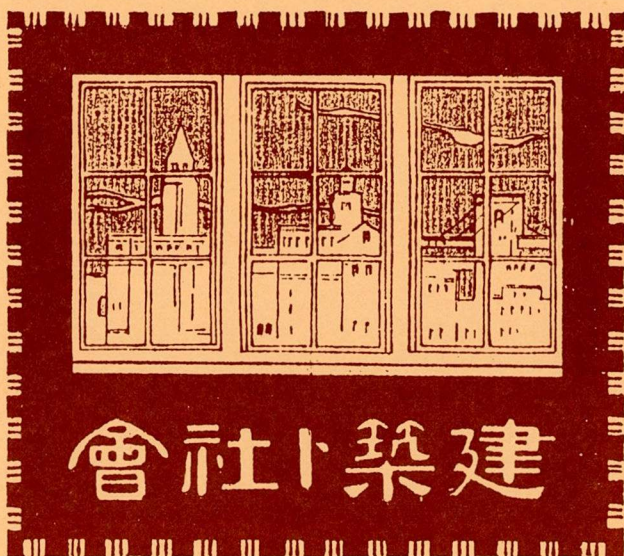


大正六年九月十四日（第三種郵便物認可）
大正十三年七月一日發行（每月一冊一日發行）

（第七輯第七號）

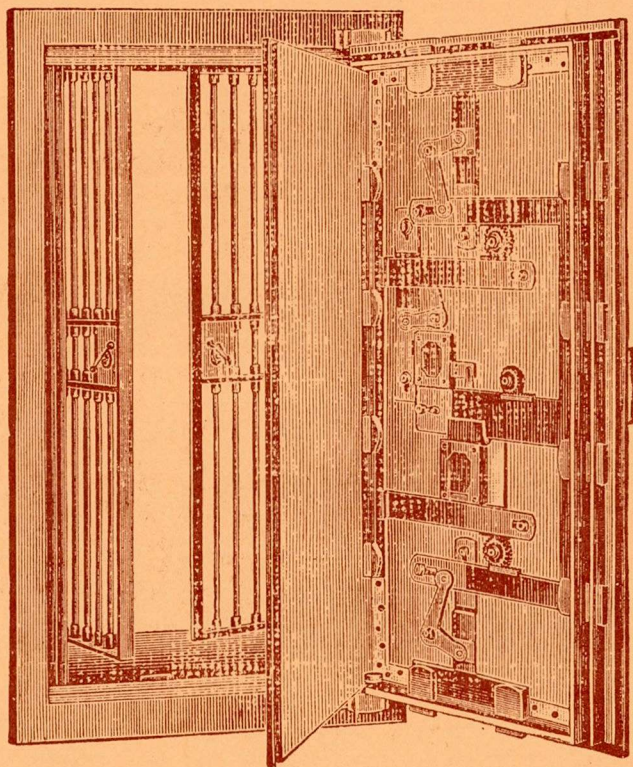


第七輯第七號

日本建築協會

大正三十三年七月一日

耐震 耐火 理想鐵扉の出現



金庫扉製造界の權威

工場
東京第一工場 東京市京橋區佃島壹丁目
全 第二工場 全 深川區東元町
京都分工場 京都市松原通り大宮西入

營業所
東京市京橋區岡崎町二丁目
京都市松原通東洞院東入
大阪市東區淀屋橋筋(道修町)
神戸市楠町六交叉點西

大谷金庫店

店主 大谷榮之介

顧問工學博士 細木松之介

獨逸人技師 ア・シューハルト

現在ノ最大建築ニ使用サレ!

高級昇降機 エー・ビー・シー

最近御採用先御報告

其ノ他	明治屋	内田ビルヂング	プラナモンド社	村井銀行神戸支店	浅野物産	明治海運ビルヂング	神戸商船ビルヂング	松竹キネマ座	大學病院	泉尾土地會社	阪急電鐵	特許局	中外商業新報社	日本興業銀行	日本郵船	丸ノ内ビルヂング十一臺
拾臺	二臺	三臺	二臺	一臺	一臺	四臺	四臺	二臺	二臺	二臺	一臺	一臺	一臺	四臺	八臺	一臺

A.B. See!

ELECTRIC ELEVATOR CO.

220 Broad Way New York

ESTABLISHED IN 1883

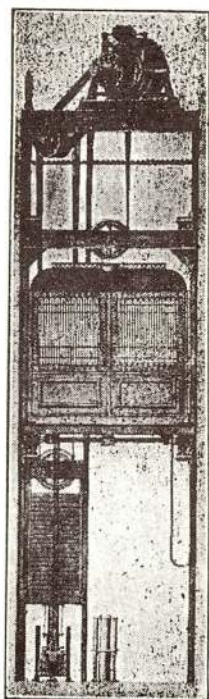
*Esteemed enquiries
solicited!*

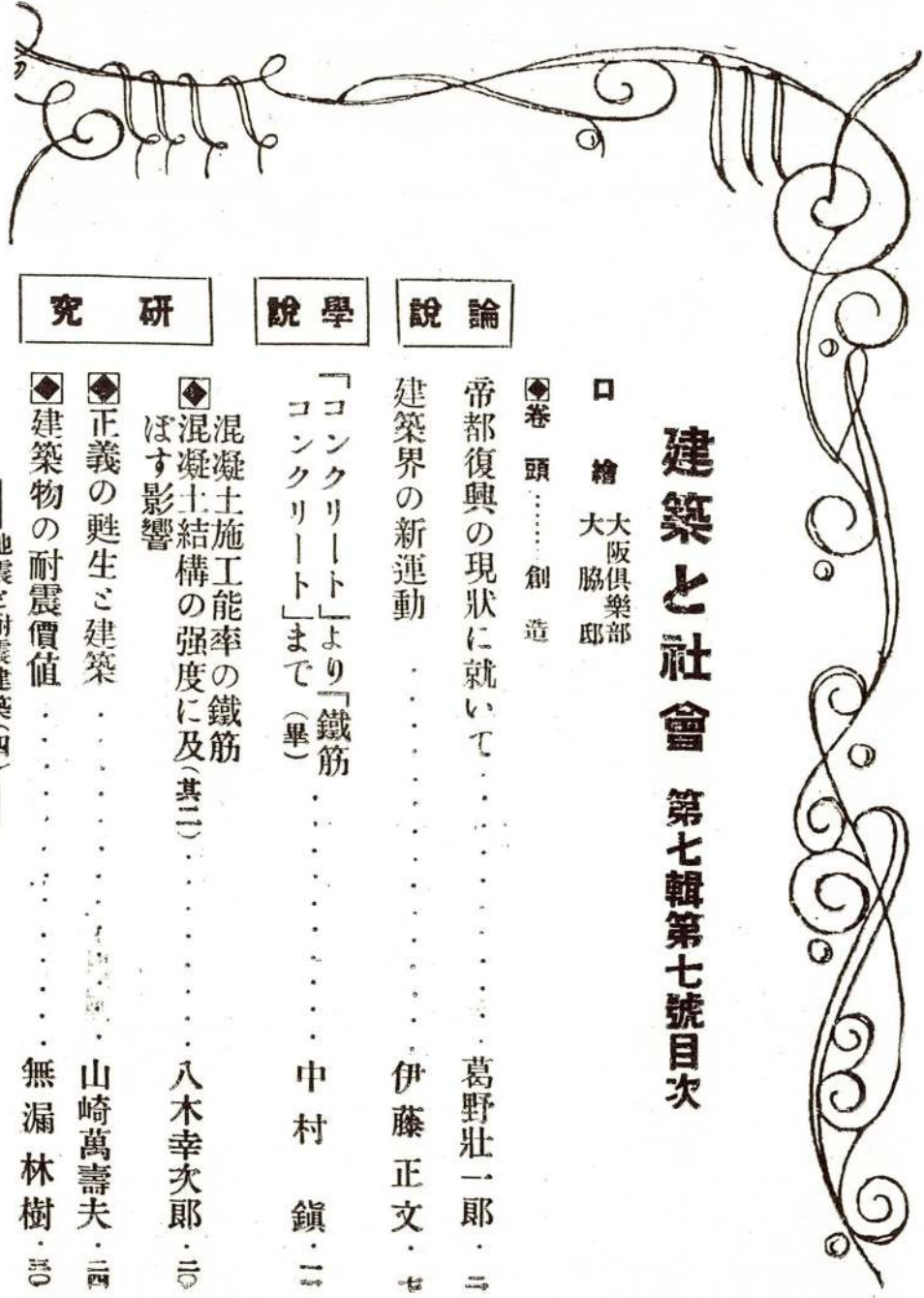
東洋總代理店

内田商事株式會社機械部

東京 神戸 大阪

今後ノ高層建築ニ採用サレントス!





建築と社會 第七輯第七號目次

口 繪 大阪俱樂部
大脇 邸

◆卷 頭……創造

帝都復興の現狀に就いて……………葛野壯一郎・二
建築界の新運動……………伊藤正文・七

「コンクリート」より「鐵筋
コンクリート」まで（畢）……………中村 鎮・二

◆混凝土施工能率の鐵筋
混凝土結構の強度に及（其二）……………八木幸次郎・三
ぼす影響

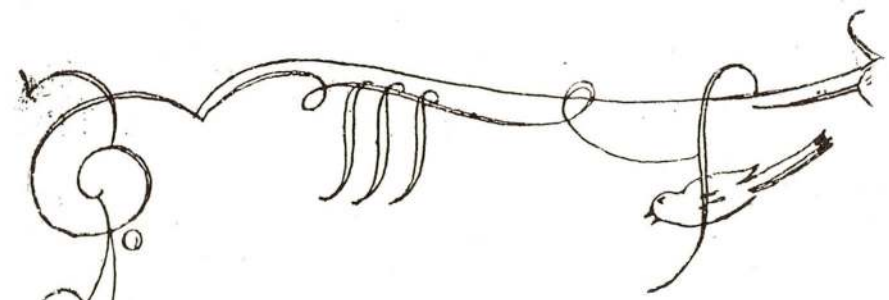
◆正義の甦生と建築……………山崎萬壽夫・四

◆建築物の耐震價值……………無漏林樹・三

究 研

說 學

說 論



住宅

資料

漫錄

報會

◆日本に於ける住宅の變遷と將來……………工學博士 武田 五一・著

◆住宅内部の線に就いて……………三島 淑虛・著

◆「國際市」の實現(四)……………太田 寬吾・著

◆テベス西岸の一日……………工學博士 天沼 俊一・著

——續埃及遊記(六)——

◆平面的模倣より立體創立へ——建築叙情篇(五)……………廣岡峰太郎・著

◆バラツクに光る初夏の東京……………楠原祖一郎・著

◆生命表現として建築の相……………別所 悌一・著

◆大日本建築協會六月中記事……………



GOOD

和洋家具の製作
室内裝飾の設工
其他一般木材加工

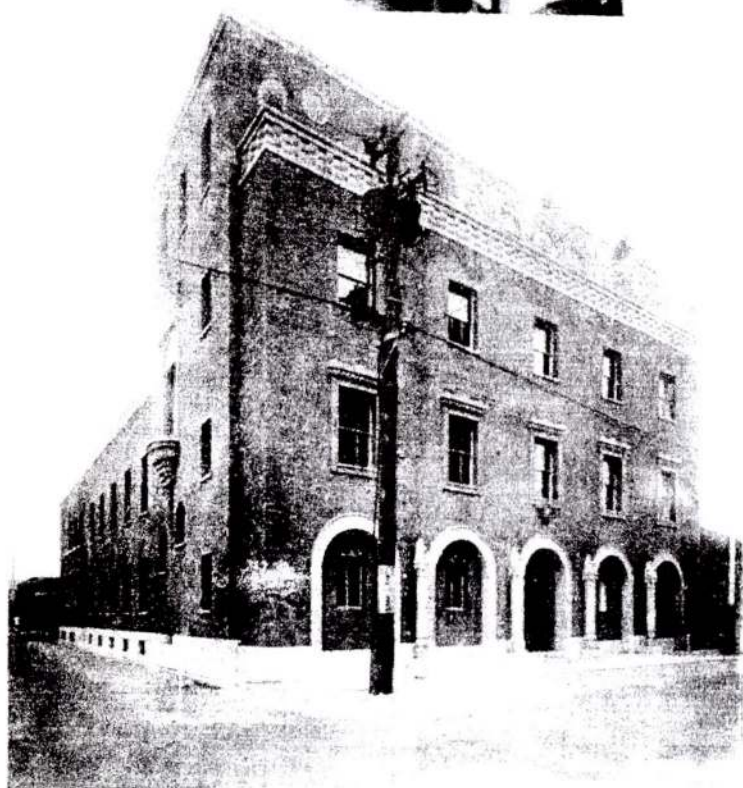
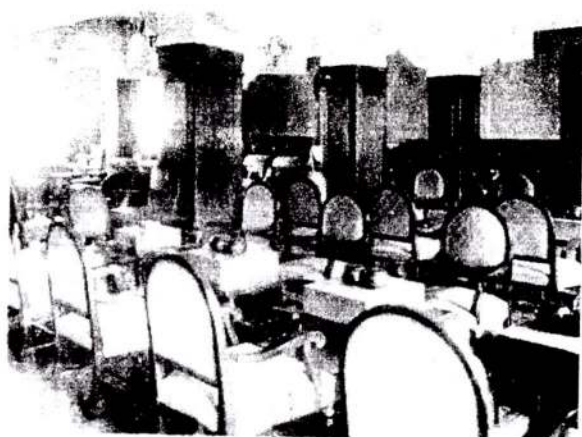
資 合 社

内 外 木 工 所

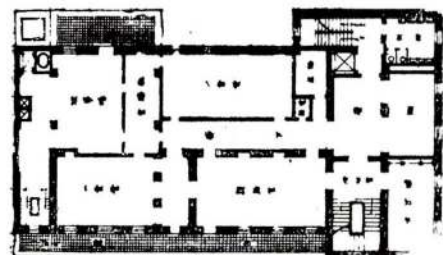
發售所
大塚市東區尾町四丁目心園樓
電話 國本 一七三六番
大塚市西區市岡町六七四
電話 國西 三〇六〇番
本所及
工務所

FURNITURE

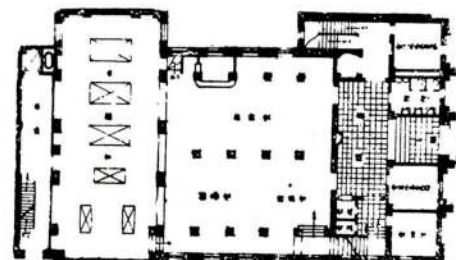
内部の一部
— 楽室 —



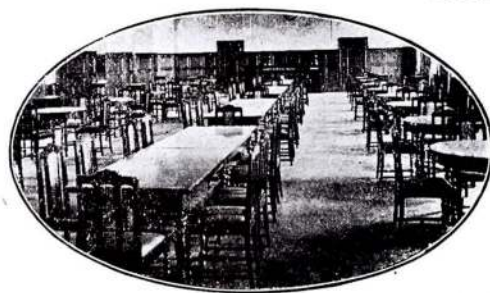
大阪俱樂部



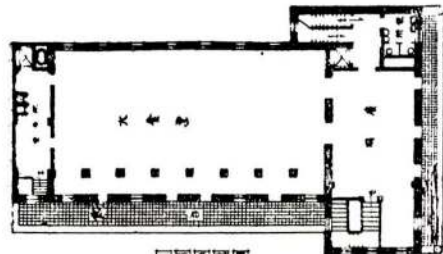
西圖不西圖



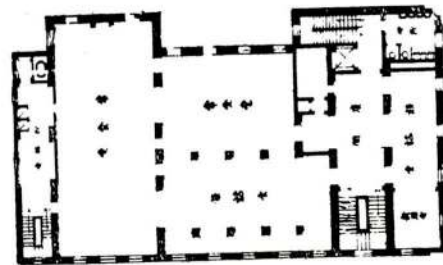
西圖不西圖



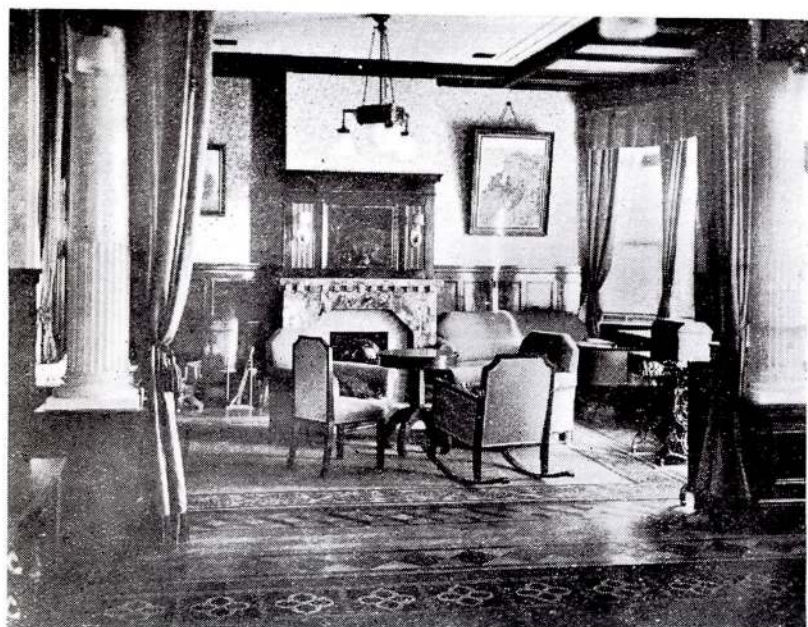
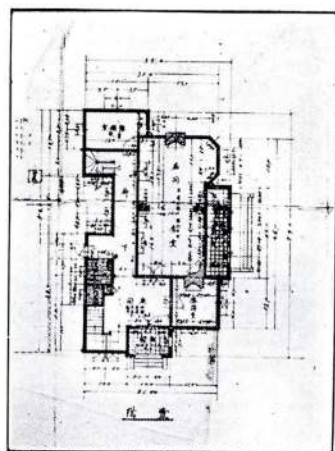
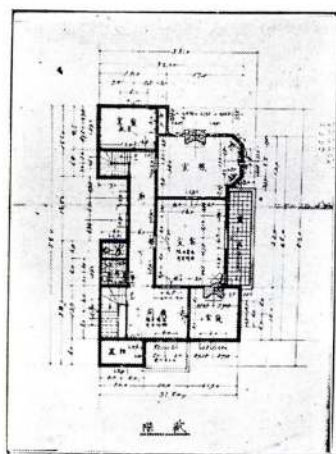
堂食大



西圖不西圖



西圖不西圖



二 の そ



大 脇 邸 (高 知 市)



創造……

遙かに一層深く融けこんだ或るもの、

その住まぬは落日の光であり、さり周る大海、
生ける空氣、碧の空、また人の心の中に——一の
運動、一の精靈、それは思惟する凡ゆる事物と
凡ゆる思惟の對象を刺戟し凡ゆる事物の中を
轉び行く。



説

論

帝都復興の現状に就いて

葛野壯一郎

全體吾々日本人、殊に政府の當局者が、何か新しい仕事を計畫し遂行する場合に、それが何時でも周圍の事情に後れて『後手』であり、當座の『間に合せ』であり、又多くの場合『片手落ち』に終る事を、私共は常に非常に遺憾に感じて居ります。是れは帝都復興の現状に觀ても、最も著しく觀察せらるゝ事實であります。

復興局が、帝都復興の唯一の理想であり、根本的國策であるとして、今や將に、全力をあげて實行期に入らんとして居るのは、市内災害地に於ける地區の區劃整理案と、一般耐火建築促進に資すべき官設建築會社案の二つの様に考へられます。單なる市區の改正、即ち街路や橋梁の新設擴築といふことに止めないで、不規則不整形を極めた在來の地區……殊に東京市は、全國孰れの都市に比べても此點に著しいものが有りますが……其ものを、進んで整理し劃一する事の利益は、改めて説明を要するまでもなく、何人にとつても、分り切つた緊要な事で有り、

市民の多數は、直ちに賛成し、協力し、當局と共に其促進完成に向つて、極力努力すべき筈の問題であります。然も其れが、事實は甚だ相異し、今や色々困難なる事情に遭遇して、なか／＼容易に實施出來さうにも考へられないのは、當局が、其計畫の初めに當つて『先手』を打たずして、遺憾ながら『後手』を打つたといふ事に起因するのでは有りますまいか……。當局者が、災害前から、かような根本的計畫を考へるといふ事は、其れは出來ない相談で有つたとしても、此千載一遇の好機に際會して、眼先の情實や一時的『間に合せ』の考へを捨てて、ほんの只一手だけ、市民に先んじて『先手』を打つて居つたとしたならば、其れは何の困難も無く、案外容易に實施出來る事であつたらうと想像せらるゝので有ります。其れが不幸にして、『先手』ではなく『後手』を打つた爲めに、當局は何んなに行き惱まなければならぬか……。今日、自ら自分の首をくびる様な、苦しい端目に立ち至るのも、亦止を得ない事で有ります。

よし其れは、全體として、觀るにも足らぬヤクザな、一時的バラツク建築で有るとしても、東京市が彼の一大災異の後、漸く數ヶ月にして現状の如く復活し得たのは、一つの驚異で有ると私は考へます。其建築の或物は、災害前のものに比べて敢て遜色無いばかりで無く、市街場末の或部分の如きは、全然面目を一新して、災害よりも寧ろ宜い『感じ』を與へらるゝ様な所も、間々見受けられるので有ります。是れは東京市民としては、異常な努力で有つたに相異ないので、彼等は漸くにして其れ／＼の土地に歸り、各自の家業に落ち付いたので有ります。かような現状のもとに、復興局か其區劃整理の實施の緒につかんとするは、其『理』に於ては何人にも異議は無いとしても、其『情』に於て忍ぶ可からざる事情の存することは、一見、誰れにも心附くところで、私共は此點に就いて、東京市民に對し、滿腔の同情を表せざるを得ないので有ります。

當局は、種々の方法を以て、市民の此事業に對する完全な了解を求めると共に、一面、極力與地の買収に務めて、其圓滿なる促進完成を期するが如く觀らるゝので有りますが、其實行に就ては、日一日を

經過する毎に、益々困難な事情の簇出する事は明らかな事實で、何んな事業に對しても、從來苦情の最も少くないと稱せられて居る日本橋京橋區内の如きですら、今日尙ほ容易に實施し難き事情にあるのを觀ても、此計畫が當局にとつて、將來異常な努力と陰忍を要する事を思はざるを得ないので有ります。

復興局が、區劃整理案と相並んで、最緊急の事業と認め、極力主張して居るものは、官設一大建築會社案であります。其資本を官民合同、即ち少なくとも政府の資本六分に民間の資本四分と云つたような割合で、資本金幾億といふ一大建築會社を新設し、一方區劃整理の實施と相待つて、涸渇せる市氏の財囊を資け、理想的市街建築の完成を期すといふので有ります。此事業が帝都の現狀に觀て、甚だ必要である事は、何人にも直ちに了解せられ、少しも異議のない事であるにもかゝらず、内務省では省議が決定したが、大藏省に行つては、今現に行き惱んで居るといふことで有ります。

いくら片方が區劃整理を宣傳し強行しようとしても、他の一面に、其新らしい敷地に於ける家屋建築に要する色んな便宜が得られない限りは、疲れ切つた東京市民が、其『理』に於ては何の異議は無くとも其『情』に於て、是れが速進に同意する事の出来ないのは當然で有ります。建築會社案の前途は、現在尙ほ未知數で有りますが、私共は其れが、整理案のみの強行で有つて、家屋新築に對する何等の便宜をも含まない、所謂『片手落ち』に終らない事を希望するので有ります。

大藏省當局の意見としては、政府自らが、個々の建築事業にまで立ち入るといふ事は宜しく無い、寧ろ其資金の調達に就いて、便宜の方法を以て貸附けるなり、又は保證の途を講ずる方が宜いと云ふので有とかの様に聞いて居りますが、果して如何で有りませうか。帝都復興の事業をして、積極的に意義あるものとするには、是非とも區劃整理の事業と相並んで、その個々の建築問題にまで突込んで行かなければ其大成の甚だ覺束ない事は、是を現狀から觀て、明らかなことゝ私共は考へるので有ります。……話は違ふが、政府が小住宅建設に對する低利資金の貸出しなり、又は住宅組合法を制定して置きながら

是れと密接の關係を有する住宅會社法を、依然として今日迄其儘放置して居るが如きも、『片手落ち』の最適例であると思ひます。

更らに東京市では、現在日比谷公園その他に、尙ほ居所の定まらない約十萬のバラック居住者が残つて居るといふ事で有ります。公園だから構はないといふかも知れないので有りますか、公園だから其れが甚だ宜敷ないど、私共は考へるので有ります。かような一大天災の後には、さなきだに荒み果てんとする市民の情想涵養の爲め、何はさて置いても、其高尙な娛樂場であり、また運動場である可き公園の如きを、一番先に復舊し整備す可きでは有りますまいか。然も此事は全然度外視されて、今日まで依然として不潔と亂雜より外に何にもない、バラック街の儘に放置せられて居るといふ事は、何んぞ云つても其れは非常な不用意で有ると考へるので有ります。

内務當局は、昨年の震災義金の剩餘金の内約一千萬圓を別途法人組織として、近々大凡壹萬家族を收容す可き、小住宅の建設を決定したといふ事で有ります。壹萬戸に對する土地購入費、土工建築費を合せて一千萬圓とすれば、每一戸當り壹千圓であります。當局は是れに對し、何んな内容の計畫を持つて居るか其れは判らないので有りますが、出來得るならば、耐火的のアパートメント風のものとしたいので、所謂『間に合せ』のバラックから再びバラックに移す様な愚を、くり返したくはないので有ります。其施工に就いては、全國有數の建築業者に懇談の上、全然義俠的の引受を、當局は希望するといふ事で有りますが、かような事が理想通り行くと考へられて居つたならば、其れは非常な間違ひで有る事を斷言せざるを得ないので有ります。

また本年度に於て、東京市及び其附近に於ける住宅組合に、政府が貸出しを決定して居る低利資金額は、約參百萬圓といふ事で有ります。從來此方面の貸出方が餘りに放漫で、事實此種の資金を必要とする側よりは、反つて、比較的餘裕のある中流、或は其に準ずる方面に重く、低利資金貸附本來の主意に

もどる嫌が多かつた事は、當局も略了解せるものゝ如く、本年度の貸出の如きも、努めて其急を要するものを先としたと云ふ事で有りますから、是は主として小口のもので有ると思像せられるので有ります。かりに一口約平均三千圓とすれば、千戸分に相當するので有りますが、復興第一年の貸附額としては、是亦『間に合せ』のそしりを免れないので、其れは餘りに僅少で有ると云ひ得るので有ります。

現在、東京では普通の貸家の建築費が、延一坪當り約百圓位で造り上げられると云ふ事で有ります。勿論、全然バラツク式の粗造で、問題にはならない低級建築であります。かりに延貳拾坪の家とし、其面積六割を貸附けられるといふ事は、驚かざるを得ないのであります。かりに延貳拾坪の家とし、其面積六割を疊敷とすれば、建築費貳千圓に對して、月家賃七拾貳圓といふ計算であります。其れであるから、地方の資本家が東京に入り込んで、ごし／＼貸家を建て、居るさうであります。地方では、月十圓よりこれない家が、東京ならば參拾圓もこれ様かといふ割でありますから、如才の無い地方の少資本家が、最も確實有利な仕事として、盛んに貸家經營を始めるのであります。是れは云ふまでも無く明らかな暴利で家はあつても、徒らに家賃が高く、多くの人がそれで苦しむようでは何にもならないのであります。當局は、適當な方法を以て、確實な貸家經營を奨励するゝもに、一面に於ては、何故、かような暴利取得者を、きびしく取締らないのでありませうか。私共はこゝにも著しい其『片手落ち』の例を認めるのであります。(完)(大正十三年六月二十二日)

建築界の新運動

伊藤 正文

歐州大戰が歐州に於ける藝術界に一線を劃し、動きつゝあつた美術思想の傾向上にエボクを明かに作つた如くに、昨秋の關東大震災は我國の藝術界に對して歐州のその様ではなかつたとしても、或る傾向を強調せしめる事に於て同じ様な影響を與へたと云ふことは事實である。

建築界に於ける最近の傾向による運動も亦斯の影響を受ける所が特に多大であつたと云ひ得よう。

歐州に於ける美術思想の急激な變化に就いて目を向けるならば、それが如何に華々しい結果を擧げつゝあるかと云ふとに驚かされるであらう。後期印象派の美術に於てさえ、可成り。自然主義を基調とした所があつたが、全く主觀表現を主とする立體派や未來派に進み、更に是等を含めて廣義の表現派運動として呼ばれる主觀主義藝術の流れを形作つたのであつた。(齋藤與里氏畫界に於ける新傾向參照)

現代獨逸の表現派、所謂エクスプレッショナルニスムの運動は廣義の表現派とは多少趣を異にする點があり、ダダイズムの傾向と似たものがある云はれてゐるが、主觀主義の強調と云ふ點に於ては總ての方面に通ずる傾向であり、先づ繪畫に現れた斯の精神が彫刻、裝飾美術、建築へと影響したとは異常なものであつた。

獨逸現代の建築界の巨星ブルノイ、タウト。ハンス、ペールチツヒ。エーリツヒ、メンデルゾーンの如き各自に於て、思想と多少の異にする點はあるとしても、同じ表現派の思想によりセセツション運動から既に様式化されたものまで全く捨て去つて、新しき時代の建築を創造しつゝあるものである。

タウトはマグデブルグに於て、特に驚くべき幻想的なデザインによつて多くのものを作つてゐる。ペ

ールチツヒはラインハルトを助けて彼の大民衆劇場の設計を大成せしめた事で有名である。

此等の人々は現代獨逸の表現派作家としての建築家と見られてゐる。かくて一般藝術界を風靡した新しい傾向によつて、永い間傳統的形式のなきがらの下にうづもれてしまひ、遂に藝術から離れて一の應用科學の一製造品にまで隨した建築に一脈の生氣を與へ、他の純正藝術と共に形象藝術界特に建築界をして同じ陽の光を仰ぐことが出来る様にしたことは喜ぶべきことであつた。

此表現派の運動が盛になつたのも大戰後に於てであつた。其間先驅者として戰つて來た畫家としてはカンデインスキーがある。彼の思想によつて斯の運動の精神を一層強めてゐる。のみならず、寧ろ、表現派運動の中心思想を築き上げた一人である、と云はれてゐる。

歐洲大戰後、その社會的變動によつて社會思想の急變と成り、藝術上の思想にも多大の影響を與へたその結果に於て表現主義の勝利となつたのであつた。それと因果的に或は相關的にさか云ふわけでなく昨年の大震火災が我帝都の舊家を破壊し去つた後に於て建築界に從來と全く異なる傾向が特に著しく現れ來るであらうとは豫期出來難いものでなかつた。勿論、災害の後に於て凡ゆる藝術の方面に新しい傾向が急に盛んになつたとは明であるとしても、我建築界の傾向が歐洲大戰後の表現派のそれと同日に考へ得られるものではあるまいけれども、之まで考へられてゐた建築の觀念をかなりに異つた方向に向け得られた。藝術としての建築の水準が高められ、主觀的藝術として建築の「フォーム」の純粹な創作にうつり行く傾向が強調されてゐる。

數年前から我建築界に起つた分離派建築會の運動を初めとして、最近に於ては『メテオール』『ラトール』『創宇社』、或は『マヴォー』の内の一部建築家等、いづれも態度の上に於ては多少づゝ似通つた傾向の許に、新しき建築界の運動が起りつゝあるのを見る。

震災後の日本の社會が、大戰後の歐洲の社會の何れかと、多少同じ様な狀態の下に思想的に似た點が

あり、藝術運動にも同じ傾向を生んだと考へるとは、簡単に過ぎた考へ方であるかも知れないが、世界を通じて可成共通な一つの思想の流が動きつゝあるとは明かであるし、何時の時代に於ても同じ結果が見られる。そして世界が近代文明の盛時に入つて益々時間的に近く結びつけられた結果から見ても、一般世界の思想がヨリ多く共通な點を有つことが當然でなければならぬ。

その意味からも行詰まつた、資本的文明の圏外へ進み出ようとする努力が世界的に藝術に於て現れ、主觀主義的傾向をとつて進まうとする色々な運動として起つて來たことは、偶然でなく當然のこととして認めないわけにゆかない。かうした運動が、繪畫や彫刻の分野に於てのみ起り、建築界に於て現れることを如何にも偶然に考へられるならば、建築家が思想的に無智であり、盲目であつたことを告白するに止るだけであらう。

たとへ現在に於て、分離派やタテオールやラトールの人々の作品がある場合に、歐洲の表現派作家の作品の追従であるかの様に見えることがあつたとしても、その運動の精神にまでも同じ眼を向けて考へることは間違ひであり、寧ろそれらの若い運動團體の思想や信條への理解を有つた上で、作品に對する個別的な觀賞と批評があつてよいのではあるまいかと思はれる。

理解出來にくい、一つの新しいものを打消し、最早見まいとする態度が取殘されつゝゆく建築家の態度かも知れないのだから。

日本で建築界に新運動を起して呉れたこと、その先鞭をつけてくれたことに於て分離派建築會を多としてゐい。その他多くの團體又は個人の同じ様な方向に進みつゝある人々も勿論、我建築界に一時代を劃しつゝあるもので、又純不純に關せず多數の追従者が現れつゝある傾向を示してゐる。

それは運動が進みつゝある時、活動しつゝある時にその運動の盛んであることを裏書する現象だ。けれども、一般の追従者が、たとへば繪畫に於て素描の研究を投うつて一舉にして所謂畫を作る態度を取ら

うとして熱中する性急さを謹んでもらい度いと切に思はれる。

最近に於て東京で開かれた帝都復興創案展覽會、及び大阪三越に於ける分離派建築會の關西第二回展覽會に於ても、此等の運動の進みゆく姿に接することが出來た。

これらの個別的作品に對する感想よりも、此等諸團體が枯死しつゝ行かんとする建築界に燈をかゝげ我建築界のエボクメーカーとなつて進み行くことを思ひ斯の稿を成す。(一九二四、六)

井戸端に浴び浴ぶる

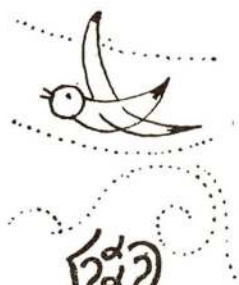
水の音水のたえまに

鯛 かたかな

き

こ

い



學子説



「コンクリートブロック」より**鐵筋**
「コンクリートブロック」まで (四)

—附 中村式鐵筋「コンクリート」に就いて—

中 村

鎮

一序 論

二 中空構造論(複構造論)

三 構造法の發達と其種類(綜合的構造法への道)

四 鐵筋「コンクリート」建築構造の得失

五 中空構造としての「コンクリートブロック」及び「ホロータイル」の發達

六 鐵筋「コンクリートブロック」(綜合的建築法)の出現

七 中村式「鐵筋コンクリートブロック」に就いて

鐵筋「コンクリート、ブロック」に就いて、私は數年來研究し又實驗した多少の意見を有つて居るので何等かの方法に於て、纏めて發表したいと思つて居た。嘗て雜誌「建築評論」や「建築世界」に其の一部を發表しかけたのであるが、途中から病氣になつて止めてしまつた。今此處に十分さは行かないけれ共、研究の概要を發表して見たいと思ふ。

中村式鐵筋「コンク

リート」構造に就いて

私が此の建築構造法を發明する迄に到つた、私の社會的理想は既に前章に於て一般的建築構造の理想として述べた。そして又鐵筋「コンクリート、ブロック」に依つて之を成すのが最も都合のよい事も、中空構造論や綜合的構造論に於て述べた。私は今此等の理想が私の發明の方法に依つてどれだけ確に成遂げられるかの實際の證明をすればよい段取となつた。

前章に於て擧げた十一項目は今日の建築に於ける要求（殊に建築構造法に於ける要求）の要約である。

此の十一項目を如何によく満足せしめ得るか、私の方法の證明となるのである。私は先づ實際的の形から説明して行く事としやう。

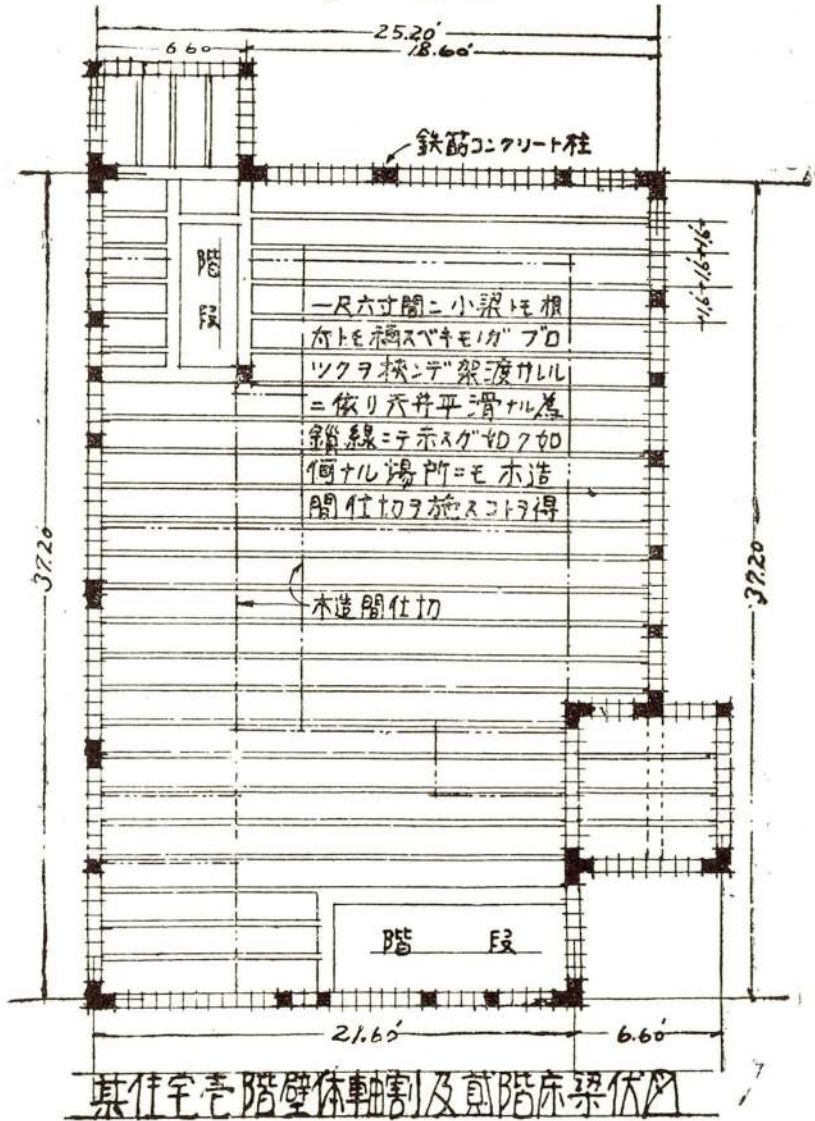
（一）『ブロック』の形態と其組合せ方

第二十八圖は中村式鐵筋「コンクリート、ブロック」の基本となす『ブロック』の形態と其基本的組

合せである。『ブロック』の形は「J」形の組合せ『ブロック』で腹部に凸起があつて他方の『ブロック』の短い足の端が之の中に入る様になつて互と云ふ字の其儘互に組合ふ様になつて居る。又『ブロック』の上下兩端には溝が設けてあつて其所にも小鐵線が繁く入れられる事になる。其上個々の『ブロック』自體の中にも小鐵筋が入れられて居るのである。之の大きさは小形で長一尺二寸巾六寸（目地共）從て壁の厚さは七寸となるのである。

之を圖の下方に示す様に組合せ積立るのである。積立てる時に目地毎に鐵線を兩側に挿入する。積上つた結果は少しも芋目地を生じない。茲に最も注意せらる可き三つの點がある。其各は嘗て前章に於て最も望ましき事として求めたものであつた。

（一）は『片手にて持ち得る大きさ』である事である。『ブロック』を片手で持ち、片手に鋺を持つて積み行く事は最も望ましい『ブロック』の積方である事を詳説して置いた。又それが設計の微細の變化に應じ得て如何に設計を自由ならしむるかに就ても



前に述べて置いた。之の事は非常に重大な事で『ブロック』の最も重要な點である。それが今日迄の多くの『ブロック』に於ては不可能であつた。然るに本式の『ブロック』では完全に之がなし得られる。其上この事は運搬や製作に當つても非常な利益がある。

(二)は『先に要所要所に完全に鐵筋柱を組立て後にて其周りに「コンクリート、ブロック」を積立て得る』と云ふ事である。之は多くの箱形『ブロック』に於てなし得なかつた所であり、又多くの組立『ブロック』は之れをなし得ても甚だ不完全であつた。處がこの方法に依ると完全にそれが出来る。其完全に出来る事は常に『ブロック』一升の中に於てのみでなく、實にL形T形等の柱を造り得る點に迄及んで、在來の『ブロック』に依る補強鐵筋「コンクリート」柱、又は梁の不完全を完全なるものとなして解決して居ると云ふ事である。(之は後に柱梁床等の場合に詳説する)

(三)は『單一の形で異形を要しない』と云ふ事である。單一の形で異形をなくする事、即ち煉瓦の

場合に於けるが如くする事が如何に必要な事如何に望ましい事であるかは前章に詳しく論じた。然し在來の方法では之は理想と云ふよりは殆ど空想として放擲せられて居たのであつた。處が本式に於ては此の問題は煉瓦と同様の程度に於て完全に解決せられたのである。更に其が煉瓦にもなし得ない事は同一形(今では多少の『モディファイ』をなし居るけれど)を以て常に壁のあらゆる部分のみでなく、床までも構造し得ると云ふ事である。上掲の諸點は單に壁のみを以てしても未だ類のない、又近い將來に於て及ぶ方法のないと考ふるものである。

此等の三點が如何に今日迄の鐵筋「コンクリート、ブロック」の難關であつたか、そして本式が此等を如何に巧に越えたかは、最も深い注意をはらつて觀察してもらふ價值があると思ふ。

『コンクリート、ブロック』は危険だとか「コンクリート、ブロック」は必しも安く行かないとか、「コンクリート、ブロック」は石割が面倒で、「ブロック」を以て建築をするのやら「ブロック」

の爲めに使はれて建築をするのやら解かない』など云ふ批難の源は皆之等の點の解決が出来て居ない事にあつたからである。

以下此等の事を圖の順を逐うて述べる事とする。

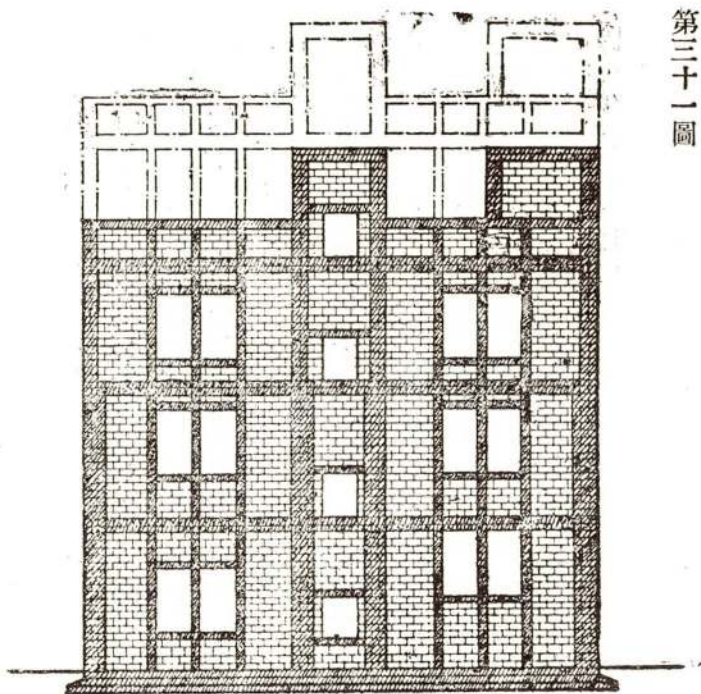
柱 と 基 礎

『ブロック』の一升の眞々が六寸になつて居るので（之は小形の場合である現今は主に小形を用ひて居る、メートル法を用ふる時には形を其に應ずるつもりである）十升は一間となつて今日の日本間單位の建築法に最も都合がよい。そして一間間又は三尺間等に或は其他必要に應じて六寸を單位として柱を置く時は、其中間に組合された『ブロック』は間柱となり、木摺や鐵網と同様になつて洋風木造の軸構造法と甚だよく似て居る。只筋違の代りに其の面一面が横に繁く鐵線のある『ブロック』壁で出来て居る事となるのである。

此の場合假に木造と同大の軸を筋ひたものとして（鐵筋「コンクリート」としての極度の小さい軸を用ひた場合）其強度を木造と比較して見ると木造

では重量軽く筋違があるので木造の方が有利さうであるが、此の方は他の特長でそれを十分補つて居る。それは木造は接手が自由に動いてゐて四角形は平行四邊形になるのであるが、之の方は鐵筋『コンクリート』の剛節架構になつて居るので遙に強い。又間壁は木造の場合には殆ど荷重を支ふるに足りないが、此の方法の場合には柱と共に死荷重を負うて居る寧ろ死荷重のみならば柱よりも此の幕壁の方が荷つて居ると云つた方が實際に近い位である（但し今日の計算法では之を認めて居ないから鐵筋『コンクリート』柱のみで支へて居るものとして計算しなければならぬ、此の事は少々變な事だと私は考へて居る）更に一段毎に兩側に入れた鐵線や、『ブロック』一個毎に其全體の中に入れた鐵線は、共に全體の力を強くし、或意味に於て斜張力に對抗するものと考へる事が出来る。之丈の比較でも木造のものよりは遙に強い。

それに加ふるに柱も梁も必要に應じてL形にT形に次第に形を増大して直壓力は勿論『モーメン



ト』にも十分對抗せしめ得るに於てをやである。
柱の斷面の遞増と共に依つて單に矩形のみでなく
L形T形乙形U形等の形を造り得るは又特筆し

中村式鉄筋コンクリートブロックに依ル軸制

てよい事と思ふ。今までの一般鐵筋『コンクリート』建築構造に於て其柱の斷面を鐵材の如くL形T形I形等に作つて其隨性率を大ならしむる事は非常に好ましい事と知れて居ながら成し得なかつたのは一に其假枠の面倒にあつた。此の事は鐵筋『コンクリート、ブロック』に於ても同様になし難い事とせられて居た。處が本式に依る時は矩形は勿論L形T形I形U形等必要に應じて自由に造り得る事實に第二十九圖の通である。更に此の事は後に示す高層建築（四五階以上の意味）用の複々構造杯や甲種防火線用の構造法を見らるれば其の軸としての柱が如何に都合よく力學的に其斷面を擴大し得るかを知られるであらう。（第三十圖、第三十一圖、第三十二圖、第三十六圖（參照）『ブロック』壁が力を十分負ひ得ると云ふ事とよ

しそれが十分負ひ得ないとしても柱が三四尺間乃至五六尺間にあると云ふ事は實際の柱の面から面迄の距離を四五尺以内に留める事が多い。(第三十圖、第三十一圖參照)さうすると、よし『ブロック』は全く力がないか又は『ブロック』は無くても入口になつて居る様な場合を想像しても十分逆丁形梁の布地形をなす事が出来る。第二十九圖の上方は即ち之の例を示したものである。

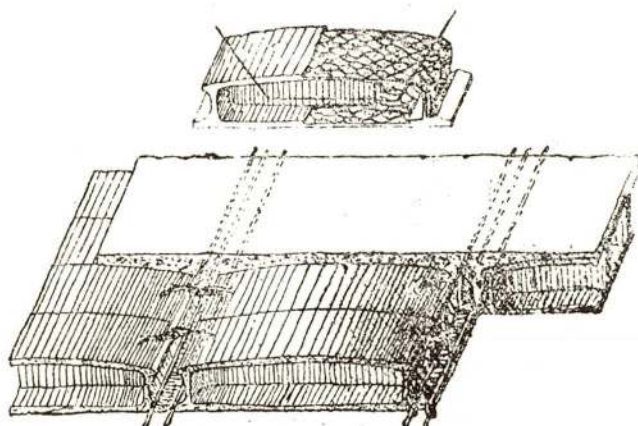
一般に壺堀の地形よりは布堀の地形の方が、力の分布が十分である意味に於て優つたものである事は論のない所だと思ふ。殊に今日の鐵筋『コンクリート』の様に接目なき弾性高き一本の石又は一枚の石の形になし得る構造法の存する場合に於て尙更である。

併し他方に今日迄の鐵筋『コンクリート』構造に依る建築の様に幕壁式になつて居て、柱は二間間乃至三間間と云ふ風に巾廣く置かるゝ場合に於ては、如何に逆丁形梁でも其の成が高くなるので不經濟になつて用ひ得なかつたのである。然るに本法に依る時は之が十分に出來た上、其の『ウエツ

ブ』の上は丁度『ブロック』を積むに都合がよいので、逆丁形梁の理想は完全に之に應用し得る事となるのである。

第三十三圖

造構床る依に成合のと「トーリクンコ」筋鐵と「クツロブトーリクンコ」



隅角、梁、楣及び窓入口廻りの取扱ひ
隅角は第二十八圖に示す様にも隅角も同一の『ブロック』を

巧に組合せる事に依つてなす事が出来る。一般の『ブロック』の様に別に異形を造る事を要しないのである。

此の事は窓入口側及び、楣入口楣等に於ても同様である。之等は何れも『ブロック』を半升七、五等に切つて用ひればよい事圖の示す通りである。

(第三十二圖)

又胴差に於ても同様に同形を『ブロック』を竪に積む事に依つて胴差迄の『ブロック』の堅穴を覆ひ同時に樋形の一部を作り、胴差の假枠を兼ね得る事第三十一圖の示す如くである。

床及び屋根の構造

床及び屋根が『ブロック』で出来る事は今日迄全く考へられて居ない所であつた。併し之は既にホロスタイルに依つて實施せられて居る事で別段驚く可き事ではない。第二十圖、第二十一圖、第二十二圖參照。それに佛蘭西では『ブロック』と鐵筋『コンクリート』との合成に依る床も既に用ひられて居る事第三十三圖に示すが如くである。併し本式の如く同一形 最近は少し異つた第三十四圖の

様な形のものを用ひて居る。のL形『ブロック』で出来る。と云ふ事は他に全く類のない事である。

先づ第三十四圖下方に圖示する様に床假枠を組立て、之に『ブロック』を積み並べ、鐵筋を縦横に配置して、而して後『コンクリート』を打込むのである。『ブロック』は上下其軽く斜の面がある。下方のは楔形(ダブテール)となつて『セメント』の膠着力と兩々相助けて『ブロック』を完全に保つ用をなし上面のは『フランジ』と『ウェップ』との連絡をよくしてT形梁としての働を完全ならしめて居る。

斯くして架けて行く。と約四間迄は梁を天井に表はす事なくして架渡する事が出来る。四間とは丁度普通學校の教室の中である。依つて學校類の建物は梁を見せないで架する事が出来る事となる。之は可也に經濟的な又美觀を保ち得る方法である其理由は(一)梁に要する樋形の假枠を要しない事(二)假枠の板は三分の一しか要しない事(三)天井の塗も平たく塗る故樂に出来る事(梁のあるものより)(四)天井を別に設くるに比すれば天井と床との間の懷になる部の壁の高さだけを利する事、

(五)『ブロック』の中空を別用して電燈電話等の配

線をなし得る事(六)天井は一面平である故梁の出たものより美しく又如何なる仕上をもなす事が出来る(七)小さい間仕切(木造等のライト、バーチション)をなす時にも梁に制限せられないので自由な間取をなし得る事、等の得點がある。

屋根の構造も亦床と同様にしてなす事が出来る事第三十五圖に示す通りである。屋根も亦床と同様の得點がある事は勿論として、更に重要な一得點がある。それは保溫の點である。冬は室内で暖房装置をして寒氣に對抗するので、燃料の多少の點しか氣がつかないので、案外注意されないが、夏は之が最もよく解るのである。普通の鐵筋『コンクリート』に依る四寸位の『スラップ』では到底耐へられない程熱が傳道されて来る。それで屋上に砂利や土を置いたり、又は更に木の屋根を架して之を防いで居る。之を本式で架すると普通の『スラップ』の約二倍半位の厚さに匹敵するので非常に熱の傳導を少からしめる。即ち冬暖かく夏涼しいと云ふ結果を得るのである。

保溫の防濕問題

屋根の保溫の事を述べたので次に保溫や防濕等の衛生の問題を論ずると、本式は組合せ『ブロック』であり且つ内面の分と外面の分とは各他方の表面迄表はれない様になつて居るので防水『モルタル』を用ひて積み上げれば完全に防濕的であり得る。現在では防水剤を用ひないが調合のよい『モルタル』で積んだ丈で(勿論表面は塗られるけれど)完全である。

保溫の優良も一般鐵筋『コンクリート』の『スラップ』のものに比すれば熱の傳導は約半倍にしか達しない。之等は共に一般『ブロック』の特長であつて特に本式のみの特長でないから力説する程の事ではないと思ふ。

× × × ×



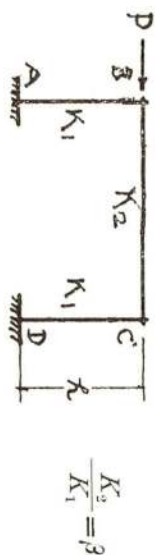
(111)

(4) 横力を受けたる場合

a 各部材の混凝土の弾性率一様なる場合

混凝土施工能率の鐵筋混凝土結構の強度に及ぼす影響

八木 幸次郎



$$M_{AB} = -\frac{Ph}{2} \frac{1+3\beta}{1+6\beta}$$

$$M_{BA} = -\frac{Ph}{2} \frac{3\beta}{1+6\beta}$$

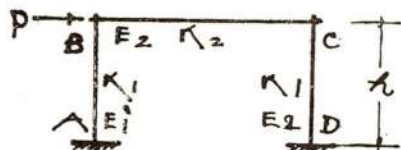
$$M_{BC} = -M_{BA}$$

b 梁の混凝土の素質低下せる場合

E_1 = 柱の混凝土の弾性率

E_2 = 素質低下せる梁の混凝土の弾性率

$$\phi = \frac{E_2}{E_1} \text{ 但し } \phi \text{ は } 1 \text{ より 小 である。}$$



$$\frac{K_2}{K_1} = \beta$$

$$M_{AB} = -\frac{Ph}{2} \frac{1+3\phi\beta}{1+6\phi\beta}$$

$$M_{BA} = -\frac{Ph}{2} \frac{3\phi\beta}{1+6\phi\beta}$$

$$M_{BC} = -M_{BA}$$

c 柱の混凝土の素質低下せる場合

E_1 = 素質低下せる左右柱の混凝土の弾性率

E_2 = 梁の混凝土の弾性率

$$\phi = \frac{E_2}{E_1} \text{ 但し } \phi \text{ は } 1 \text{ より 大 となる。}$$

$$M_{AB} = -\frac{Ph}{2} \frac{1+3\phi\beta}{1+6\phi\beta}$$

$$M_{BA} = -\frac{Ph}{2} \frac{3\phi\beta}{1+6\phi\beta}$$

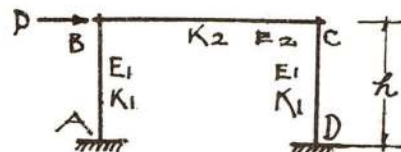
$$M_{BC} = -M_{BA}$$

d 一方の柱の混凝土の素質低下せる場合

E_1 = 素質低下せる一方の柱の混凝土の弾性率

E_2 = 素質低下せざる混凝土の弾性率

$$\phi = \frac{E_2}{E_1} \text{ 但し } \phi \text{ は } 1 \text{ より 大 なり。}$$



$$\frac{K_2}{K_1} = \beta$$

今 $2+2\beta+\phi(2+22\beta+6\beta^2+2\phi\beta+6\phi\beta^2) = \Delta$ とすれば

$$M_{AB} = -\frac{Ph}{2} \frac{4+4\beta+\phi(10\beta+6\beta^2)}{\Delta}$$

$$M_{BA} = -\frac{Ph}{2} \frac{\phi(12\beta+6\beta^2)}{1+6\phi\beta}$$

$$M_{BC} = -M_{BA}$$

$$M_{CB} = \frac{Ph}{2} \frac{\phi(12\beta+6\phi\beta^2)}{1+6\phi\beta}$$

$$M_{CD} = -M_{CB}$$

$$M_{DC} = -\frac{Ph}{2} \frac{\phi(4+10\beta+4\phi\beta+\phi 2\beta^2)}{1+6\phi\beta}$$

今以上の結果により β を1及0.5及0.1とし、弾性率の低下率を八割及五割と考へ表にて示せば次の如くなる。

	曲 能 率	$\beta = 1$		$\beta = 0.5$		$\beta = 0.1$	
a の 場 合	M_{AB}	$-0.571 \times \frac{Ph}{2}$		$-0.625 \times \frac{Ph}{2}$		$-0.813 \times \frac{Ph}{2}$	
	M_{BA}	$-0.429 \times \frac{Ph}{2}$		$-0.375 \times \frac{Ph}{2}$		$-0.188 \times \frac{Ph}{2}$	
	M_{BC}	$-M_{BA}$		$-M_{BA}$		$-M_{BA}$	
		$\phi = 0.8$	$\phi = 0.5$	$\phi = 0.8$	$\phi = 0.5$	$\phi = 0.8$	$\phi = 0.5$
b の 場 合	M_{AB}	$-0.586 \times \frac{Ph}{2}$	$-0.625 \times \frac{Ph}{2}$	$-0.647 \times \frac{Ph}{2}$	$-0.700 \times \frac{Ph}{2}$	$-0.838 \times \frac{Ph}{2}$	$-0.885 \times \frac{Ph}{2}$
	M_{BA}	$-0.414 \times \frac{Ph}{2}$	$-0.375 \times \frac{Ph}{2}$	$-0.353 \times \frac{Ph}{2}$	$-0.300 \times \frac{Ph}{2}$	$-0.162 \times \frac{Ph}{2}$	$-0.115 \times \frac{Ph}{2}$
	M_{BC}	$-M_{BA}$	$-M_{BA}$	$-M_{BA}$	$-M_{BA}$	$-M_{AB}$	$-M_{BA}$
		$\phi = 1.25$	$\phi = 2$	$\phi = 1.25$	$\phi = 2$	$\phi = 1.25$	$\phi = 2$

c の 場 合	M_{AB}	$-0.559 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.538 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.605 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.571 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.743 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.727 \times \frac{Pl}{2}$
	M_{BA}	$-0.441 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.462 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.395 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.429 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.203 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.273 \times \frac{Pl}{2}$
	M_{BC}	$-M_{BA}$	$-M_{BA}$	$-M_{BA}$	$-M_{BA}$	$-M_{BA}$	$-M_{BA}$
		$\phi = 1.25$	$\phi = 2$	$\phi = 1.25$	$\phi = 2$	$\phi = 1.25$	$\phi = 2$
d の 場 合	M_{AB}	$-0.519 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.417 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.592 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.452 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.722 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.554 \times \frac{Pl}{2}$
	M_{BA}	$-0.417 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.375 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.393 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.357 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.199 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.214 \times \frac{Pl}{2}$
	M_{BC}	$-M_{BA}$	$-M_{BA}$	$-M_{BA}$	$-M_{BA}$	$-M_{BA}$	$-M_{BA}$
	M_{CB}	$0.451 \times \frac{Pl}{2}$	$0.500 \times \frac{Pl}{2}$	$0.412 \times \frac{Pl}{2}$	$0.429 \times \frac{Pl}{2}$	$0.201 \times \frac{Pl}{2}$	$0.225 \times \frac{Pl}{2}$
	M_{CD}	$-M_{CB}$	$-M_{CB}$	$-M_{CB}$	$-M_{CB}$	$-M_{CB}$	$-M_{CB}$
	M_{DC}	$-0.491 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.708 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.700 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.762 \times \frac{Pl}{2}$	$-0.879 \times \frac{Pl}{2}$	$-1.007 \times \frac{Pl}{2}$

正義の甦生と建築

山崎 萬壽夫

生きた生命は不斷に統一の理想を追つて活動してゐる。それは吾々が意識する生命活動であり完全形相を追ふ必然的要求である。故にその生命活動は何時までも不活潑に不完全形相に停つては居ない。必ず生命は何時か其の不完全を突き破つては進み、又凝滞し凝滞しては又突き破つて自らの歩を進める。

謂ふところの甦生は即ちこの新しい生命の突破に名付くべき言葉である。

吾々は何時の時代にでも其の時代の生活に飽き足らなく、何かそれとは異つた生活様式を求める社會的憧憬が其の各の時代に生れてゐたことを知る。そしてその新しい社會的憧憬が少くとも來たるべき次の時代の文明を形成する一要素であつた。勿論このやうな關係は過去の歴史に表はれた事實ではあるけれど、尙現在に於て又未來に於て

も繰り返し繰り返さるべき根本的な歴史進展の要路でないかと思はれる。

ゴット式建築とスコラ哲學に榮えた中世の文化もそれが進まねばやまぬ生命全體の統一のイデアがより高い或るイデアに進まむがために、即ちより大なる統一を恢復するがために、折角完成された個々の文化をさへ活潑に振り捨て、ローズウィンドウを洩れる微かな光を離れて綠草に飾られた處女地に躍り出なければならなかつた。それは今迄許されなかつた輝く日光の幸福に浴したい切な希ひの實行であつた。

文藝復興の花は斯かる希ひに報ひられた大きな歡びのうちに爛漫と咲き出でた。

吾々の時代は其處から始まつた。

無限に長い生命流轉の作曲はまもなく自然科学の進行曲に移つていつた。

機械の發明があり交通の發達となり宇宙面積と時間とは爲めに著しく短縮された。未來派主義が謳歌する『二點間の最短距離』である直線の世界觀が實現されてゆく。山の曲線は次第に切り崩されて直線に化し野の道は整理されて直線となり直角に交はつて山を越え河に沿つた古への往還は山を貫通し川を横斷する唯一條の鐵道によつて時間空間ともに非常に短縮された。然るにこの自然科學と機械との嫡子——現代文明の非常な生命の擴大は更にそれを何れだけでも短縮しゆく自由を獲得したのである。まもなく工場に於ては悲慘なる機械の人間虐殺が行はれる。商業主義が其儘に人間の自由活動であると誤解されて、商品生産の廉價を目的とする爲に人間の生命を廉價ならしめてゐる。藝術は亡び生活の幸福は斯る文明の進歩と共に減退してゆく『藝術の泉はその源泉に於て毒され』て美に對する本能の喪失は一般藝術の滅亡に停まらず更らに吾々の慰安である自然の美をも破壊して省みない。しかし斯かる文明の社會も最早やその繁榮の絶頂を越え老朽の阪を降りつゝある。虐

げられた生命はこゝに今の社會の壓迫から必然的飛躍を試みむとし、より高い統一を求めてやまぬ民衆はその生命の權威を恢復せむが爲めに戦かはむとする。

『正義のために』とはこの民衆一同の合言葉である。伴はれる現代の正義は其假面を脱がねばならなくなつた。

□

『正義のために』とは『即ち各人をして自由なる人格的開展を遂げしめること』である。これを相對的に對立せる社會と個人との間について謂へば『社會の各員がその組織の體制上から自己に課せられたる職能を各其才能徳性に應じて自己の自由及權利の領域となし之を格守實行すると同時に互に決して他人の畛域を侵害せず以て社會をして健全なる生活をなさしめ其最高目的たる倫理的目標を成就せしめるやうにする』ところにある。故に各人の自己實現は最も能く調和されたる社會の開展完成中に於てのみ達成される。藤井博士 社會的正義に就て)

さて斯うした正義觀念を以て近代及現代を支配し來つた正義を観ればそれは當然其謬まりを曝露しなければならぬ不徳な觀念に基づいてゐた。眞の正義は此處に其のころを得て從來の謬まれる正義觀念に建設された現代の凡てを改造すべき使命を享けたのである。

自然主義的個人主義に立脚した處の正義は論理の究明にあつて理想主義的個人主義に立脚した正義の前に降伏を餘儀なくされた。眞の正義は理想主義によつて甫めて實現せられる。理想主義は個人を其本質に於て萬人平等とし其平等なる個人を人格——ベルゾーンと稱してゐる。カントの見解によれば『人格者とは認識に於ても實踐に於ても觀美に於ても人間は自分から自ら働きかけて其等を創るものであつて客觀の世界に如實に存在してゐる者を唯受身になつて取り容れて居るものではない。眞善美は我等自ら働きかけて創り出すところのものであるが其能動的要素がやがて切實なる意味に於て人格者の核髓である。その核髓はそれが實踐界に表はれて無上命法を體認しそれに據て

生を統一し主宰するものが人格者である』新らしく正義の統一を完成した社會の成員は此人格者でなければならぬ。

理想社會の憧憬は明澄した光に輝いて吾々を導きつゝある。そして若々しい民衆の生命力は健全に伸びむとして適切な實行を要求し、こゝに民衆の人格獲得運動が起こされたのである。知識無産階級に屬する吾々も歴史的任務が權力階級の擁護であり被壓制階級の欺瞞であつた過去を反省して被壓制階級であつた同胞のために融合一致して『正義のために』斯の誕生を促進せしめ圓滿なる文化の建設に協働しなければならない。

□

生命統一の純眞の姿は最も適切に藝術によつて見せつけられる。随つて今の分裂せる生活の乾燥無氣力を最初に意識して、彈性あり氣力ある文明の視野を吾々の前に明瞭に表はしてくるものは矢張り吾々の藝術の他に何もないであらう。靜穩な時代や靜穩な藝術はまことに望ましいものである。しかし其の時代が混亂せるときならば、其

混亂を解決して潑刺の力を與へ行くべき道を指示するのが其時代の藝術の使命である。藝術は其時代の要求——渴望と引き離され得ないものである故に吾々の希求する藝術は吾々と共に苦痛に堪えその希望を共有しその争ひを共にして吾々に生の凡てを與へるものでなければならぬ。でなければその藝術は過去の木乃伊か老朽せる藝術に過ぎない。如何様な美も如何様な偉大も若々しい潑刺とした生命に代ることが出来ない。まして藝術を社會の或る一部の獨占的享樂として藝術から遠ざけられてゐる最も多くの人々の生命にとつては、藝術が何の役にも立たず却つて生を害ふ危険をさへ含むと觀せられて竟には藝術を憎惡し破壊せむとするに到るのは洵に自然である。

そこで藝術は自ら健全なる生を取り返し自らの權威を護らむがためにする運動を促がさねばならなくなつた。藝術上の廣義にみるセクション運動は斯かる運動が暴風雨となつて過去と現代の藝術に反抗の第一陣を敷いたものである。

彼等は過去藝術の複雑な心理や精細な情緒や暗

示性等の煩雜と絶縁して、大きな線や大きな塊や荒い調子に強い生命其儘のリズム——魂の現はれを表現しやうとする。そして必要でない凡ゆるものを絶滅して唯必要なもののみを其儘に潤澤に美しく飾つて傷つけられた美を再び平明清純な姿に甦生せしめやうとするのである。然しながら甦生せる藝術が唯過去と現代に反抗する心の興奮の上に築づかれたのでは未だ偏局の譏りを免れることが出来ず一過渡期藝術として幾何もなく葬り去られることであらうと思はれる。然るに數多くみる様々のセクションニストの作品の中には時に斯かる反抗反逆の力の強調を見出すことがある。その線は斷崖の當に崩壊せむとして小椽を睥睨する如く、或は銳利なる兇器を力強く腕と共に見て戰慄を覺えるが如き類である。今少し立入つて言へば餘りに多く線の垂直的性質線の綜合による抗争性、塊の重壓性等によつて最高頂の均衡即ち間一髪を容れない危険性の表現を企てゝゐるよりうけとれぬ如き作品である。しかし吾々が現在希求する甦生された筈の藝術が斯のやうに危険性の

みの表現であつては、どうしてそれが唯一の慰安であり喜びであり得よう。反抗叛逆に美のあるないは今の問題ではない。要は吾々の心の希求を満たすか否かにある。吾々の心を重くし不満を充たし得ぬ斯のやうな藝術は、忽ち顧みられなくなるのは極めて自然である、甦生されたる藝術は歡喜と元氣と理知を條件として正義の統一を経た美しいものでなければならぬ。そこで吾々はこの新しい藝術を創るために其の出發點を原始の精神に置かうとする。そして其の歴史的發達の間に生じた種々の迷行と缺陷を認めて再び自由と平等と博愛即ち正義の大精神に行き着かうとする。新しい生命は斯かる出發點から其儘の姿を其儘に藝術に表現しやうとして、單純な力強いリズムの單純な感情、落着いた若い調子を根本的原則として要求する。そして斯かる技巧によつて表現される美が直接に正義の基本觀念に統一されて甫めて吾々に對して潑刺の生をえ平和に輝いて歡ばし慰め元氣づけることが出來ゆくりなく完成への不斷の開展に向ふことが出來るのである。

それでは甦生された社會にあつて最も重要な藝術は何であらうか。モリスに隨へばそれは先づ建築である。多くの藝術の部門の中にあつて最も大なる廣袤を有し最も多分の社會的意義をもち、尙ほ眼の感覺に訴へるすべての藝術を包含するものとして彼は建築を藝術の第一位に置いた。全く建築は視覺による大綜合藝術である、モリスは更に甦生されたる社會に於ては建築は藝術の首位を占めその傾向は大建築であるべく明らかに公共的建築物であらうと言つた。そして彫刻は過去に於けるが如く美しい建築物の一部と看做され繪畫は壁畫となつて其實用的建築物を一つの大藝術創作品——最高の美の表現を完成するであらうと結んでゐるのには吾々も同感である。斯くて現實に藝術論が生活論と同じくなつて眞の甦生の凱歌がある。近代の大藝術家ワグネルは『若し吾々が生を持つたら藝術などは要らなくなる。藝術は丁度生の終るところで始まる。生が吾々に何も與へなくなつたときに吾々は藝術によつて私は斯くの如く望むと叫ぶのだ。本當に幸福な人がどうして藝

術をやらうなどと云ふ考へを持つ事が出来るのか私には判らない。藝術は吾々の無力の告白である。藝術は一つの渴望に過ぎない」と云ひモリスは『藝術とは人間の労働に於ける喜悅の表現である。故に労働の喜悅の存する處には必ず藝術がある』と斷言してゐる。洵に斯かる時代こそ吾々の生活の環境を形成する凡てのものが美しく凡ての人が藝術家である眞の民衆藝術の時代と稱すべき時代であらう。吾々が常に求めてやまない生命發展のイデアは今そこに到着點を見出す吾々の生は正にその殻を破らうとし甦生の凱歌をあぐべき視野は麗るはしく開かれたのである。(丁)

汝が願をつぎつぎに成さむとせば
只かしこなる光を望め。

汝は輕らかに閉ぢ籠められたり。

眠りは殻なり。剝ぎ棄てよ。

「ファウスト」

(丁)

痛まし。痛まし。

強き拳もて美しき世界を汝毀ちぬ。

世界は倒れ崩れぬ。

半ば神なる人毀ちぬ。

その屑を無のうちへ我等負ひゆきつつ

失はれし美しさを歎く。

下界の子のうちの力強き

汝先より美しくそを再び建立せよ。

汝が胸のうちにそを建立せよ。

爽やかなる目もて耳もて

新なる生の歩みを始めよ。

さらば新らしき歌聞えむ。

建築物の耐震價值

—地震と耐震建築 (四)—

無漏林樹

總説
震度
掲

建築物の自己振動

木造建築の耐震構造について

既記三回に亘つた研究は、地震の理論的方面についてその大體を述べて見た譯である。次に昨年の關東大地震のために蒙つた建造物の被害について順を追ふて調べて見やう。先づ住家の大部分を占めて居る木造建築についてその被害を見ると比較的震度の小さかつた山の手方面に於けるものでも大低の家の家屋瓦が役を亂して雨露を凌ぐことが出来なくなつてしまつて居た、少し横道に這入るが當時是の如く家根に破損を來した爲めに即座

の手當てとして『ラバロイド』や『アスファルトフェルト』の如き建築用紙を便利瓦といふ様な名稱で盛んに使用されて居た、然も一卷七圓位のを十圓以上にも賣つて居た有様であつた、下町の焼失しない場所では勿論家根瓦の移動は非常のもので便利瓦のお蔭を蒙ること多大であつた譯である。

一體日本の從來の住宅や商店建築に重い日本瓦を使用して來たことは地震に對しては餘り好ましいことではない。即ち木造家屋の受ける地震横力は主としてこの瓦から生ずるもので然もこの横力は家屋の最上部にあるため仕の下部は非常に大なる應力を受けることになるからである、今後日本の木造家屋の改良はその材料の繼手や基礎に注意

を拂ふところにあると共に又この家根葺材料にも相當研究の餘地があると思ふ。

この屋根瓦のことについて面白い話がある、それは慶安二年の江戸大地震（六月二日午前三時江戸建府以來始めて蒙つた大地震であつて市内に於ける死者の數は千人内外であつたといふこと家の瓦葺のものは皆損じたけれども之に反して柿板葺のものは茅葺のものはその被害が輕少であつたことが記録にある）に於ては瓦葺の家根が大部分破損を蒙つたので其後幕府は瓦葺屋根を禁止した、その當時瓦葺を禁じたからには之に代る可き屋根葺材料としては自然茅葺或は板葺のみである。

然しこの茅葺板葺はその後火災のある毎に之を擴大ならしめたので遂に又その禁を解いて又元の瓦葺でなくてはならぬことになつた、武家政治らしい呑氣な姑息的の處置で實に馬鹿氣た話である。

江戸の如き家屋稠密の市内では茅葺が一端火災の突發したる場合之を大ならしめる第一原因である位のことでは當時とても夫れまでの經驗で判つて居たであらうに瓦葺が重いからとて瓦を改良するこ

となしに危険の茅葺にせよとは餘りに早計であつた譯である。

今度の地震では鐵筋コンクリート或は鐵骨構造の大建築物が相當に被害を蒙つて多くの研究者は之等の方面にのみ頭を入れて居る爲に日本家屋の家根瓦の改良の方は餘り問題にされては居ない様であるが、實際今度の地震に遭遇して瓦葺が前述の如く最も目立つて損害を蒙つて居ること、又此瓦葺が主要構材を破壊する原因であることは明らかになつたのであるから我々は之を只一つの出來事として看過する譯には行かぬ、慶安の昔はいざ知らず、大正の今日——宛然私には建築材料の世の中にも思へる今日——宜しく改良を攻究して益々木造家屋を耐震的ならしめる必要がある。

次に木造耐震家屋構造として必要のものは種々あるであらうが最も重要なことは各材の繼手である、柱と梁の繼手を從來の如くに納繼栓止め位では重力のためにも地震横力のためにも好ましい手法ではない、下町邊で地震で倒れた家は多く柱と梁との繼手が乾燥して緩んで居たものや、柱の下

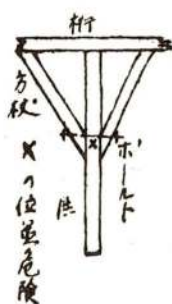
部や土臺が腐つて居てその杓が役に立たなかつたもの、貫や楔が緩んで居たといふ様な古いものが多い。之を改良するにはボールド、板鐵物、逆目釘等を適當に使用して架構を剛強ならしめ且つ繼手を丈夫にするにある、然しこの際注意すべきは木材が乾燥するに従つてボールドは緩むが故に建築後時機を見て更に締め附ける必要がある。又今度の様な大地震のあつた後にもボールドや栓、楔等の出来る所は検査した方が好い。

又家屋を耐震的ならしむるに大切なことは柱間や土臺隅に筋違や、方杖、火打材等を用ふることである、これらの材は主として洋式建築に於て専ら用ひられて來たもので日本造りには餘り使用されて來なかつたものであるが今後は成可く之を利用する様にし度いものである。

家屋構造に於ける垂直材と水平材とに依つて出來る矩形は水平動のために平行四邊形になり易いもので之が一度矩形の形狀を脱れる時は家屋の上下の各部は別々に反對の方向に動搖することとなり遂に破壊して平らに潰れてしまふものである、

若し筋違や方杖を使用する時は之と垂直水平材となす三角形は不變の状態となるので家屋は剛強にある譯である。今迄の杓繼手に於ては單に斷面小なる柱の杓に依つてのみ抵抗されて居た譯であるが、この抵抗力は實に僅少のもので、もし此抵抗力に越ゆる力を生ぜしめる地震横力に遇ふ時は忽ちこの杓は曲折し家屋は倒潰するのである。之に反して筋違材を適當に使用する時は建物は全體として一つの剛體に近くなり之れが倒れるに建物全體の轉倒 (over turning) を起す可き能率が生ずるまで傾斜しなくてはならぬから滅多に倒れる様なことはない、殊に是の如き剛強なる構造にして高さの低い間口の大なる家は絶対に安全の譯である、然し又こゝに注意しなくてはならぬことがある、夫れは上述の如く筋違を使用する場合には、横力に依つて筋違或は方杖は柱材を非常な力で踏張ることになるから柱が細い弱いもので太いボールドを使用して居る様な場合には反つてこゝから折れる憂れがある、故に柱は相當太いものを使用するか或はボールド締めや杓繼の所に板鐵物を當てる

様なことにするとこの恐れを除去することが出来ると思ふ。川崎の海岸にある某工場の薪炭置場の柱と梁の継手に方杖を兩方に出して圖の如くボルト締めにしたものが大多數このボルトの位置から折れて薪炭置場は全潰であつたものなどはこの例である。



木造建築が倒潰すると必ず火災を伴ふを常とするものであるから建築材料は勿論家財まで焼失してしまはなればならぬ。

今度の大地震に於ても其の損害の大部分は火災のためである、木造家を絶対に耐火的にすることは不可能なことであるが木造建築の永久に絶えない我國に於ては只之を如何に耐震耐火的に進歩せしむるか問題である、殊に大地震に際して同時に多數の家屋の倒潰することのない様、即木造家を耐震的構造にさへして置けば地震に遭遇しても數十箇所に火災を發する様なことはない譯で

ある。不燃焼材料の家屋は單にその災害が一家屋に止る場合が多いが木造家屋の倒潰はその災害を他に及ぼし或は一大火災を起さしめる原因ともなることが往々ある、武田博士も斯様な意味のことを最も力強く説いて居る。

今その言を借りて摘記して見ると『假りに東京の全體を耐火耐震構造にするとが經濟上容さないとしたならば當然其の間に木造建築なるものを挿んで行かなければならない木造建築を挿んで行くとすれば其の建築は從來の如き因習的な構造を避けて學術の示めす方針に従つて充分耐震構造にして行き度いものである、元來木造家屋は石造煉瓦造若くは『コンクリート』造より耐震的構造とするに容易のものである、若し木造家屋が火に耐えられ得可きものであるならば是程我國情に適した建築構造はない、然し惜しむ可きことは木造建築は火事に耐しては極めて抵抗力の無いものであるから、其木造建築をして火災の損害から脱れしむるためには防火線路と云ふものを縦横に設けて火災に依て生ずる損害を出來得可き限り輕減して行か

なければならぬ。』と云ふて木造建築が必ずしも耐震構造に適する事が困難でないこと、寧ろ今後大いにこの點を研究して木造建築をして我國に適當したるものたらしめなくてはならぬことを示めて居る。

今度の地震で東京市内に於ける發火場所は一時に九十六箇所もあつたと云ふが之等はその大部分が木造家屋の倒壊や引火性藥品の爆發に依るものらしい。

警視廳消防部の發表したものに地震に依つて起つた火災の報告がある、參考までに次に掲げてみよう。

『發火場所一時に多數に上り地震後三十分以内に消防隊にて知り得たるものにも市内七十六件に達して居るが電話不通のため尙他にも有りたる可く全市隨所に火を發し一火災に消防單位たる一消防署全部を當たらしむるゝ能はず且少數の消防隊其の總てに手配し能はざりしこと、(東京市内には三十九臺の唧筒の設備あり)發火箇所の多かりしは思ふに偶々午食時にて家庭に

火氣の使用多かりしと藥品其他發火性物品の地震に由る顛倒、工場、飲食店等より火を發せるものゝ如し』と、即藥品置場、飲食店 住家の臺所等丈でも耐震耐火的にしてあつたならば災害は大いに減せられたと思ふ。この意味で木造耐震構造は是非とも實行されなくてはならぬ。

木造の耐震構造とても大して六つかしいとは無い、即ち上述の如く屋根葺材料を輕減せしむることや、繼手を注意すること筋違、方杖を使用すること基礎を丈夫にすることなどで大して經費に關係することではないと思ふ、要は◎實施するにあるのである、有効の妙藥と雖も見て居るばかりでは効めがない、チブスやコレラの流行する時は否やでも應でも料金を拂つて豫防注射を施して貰はなければならぬ、もし之に應じない時は一市民として都市内に住んで居ることは出来なくなる、左様するのが市民としての義務である、震災、火災を防がんぞせば出来る丈け先づ人事を盡して之に耐える設備と用意がなくては都市の建築物たる資格がない、之等のとに對しては當局が適當の

條令を定め勵行せしむる様にしなくてはならぬ、現今の建築條例には地震に對して餘り詳しい規則を定めてゐない様である、我國と同様に地震地帯にあるフィリッピン、イタリー、イスキア等に於ては地震に對する設備の條例があるばかりでなく又、遭遇する地震の經驗に依て之を改良しつゝありと云ふ位である、

或る文學者の書いたものの中に『斯様に破壊されては又昔の通りのものを建て又破壊されて仕舞ふのである、斯様の文明が我國の文明である、之が我國の國民性である』と云ふ一句があつたことを記憶して居るが確に日本の文明は低回文明であ

る、進歩して居る様で餘り進歩して居ないのである、又これは上の言葉通り國民性に依るものであるかも知れない、その時は大騒ぎをするか七十日も経たないうちに又昔の様な心持になつて仕舞ふそして又今迄通りのことをして一時凌ぎをやつて居る、熱し易く冷め易い國民とはこんなことをつかまへて外國人が批評した言葉に違ひない、話は大變横道に反れたが兎も角今後は何等かの見る可き改良が無くては夫れこそ世界の笑ひの的となるであらう、我々建築技術者は勿論社會の先覺者もこの點に大いに留意する所が有つて欲しい。

蟬 し ぐ る 、

森 よ り 池 の 蓮 見 ゆ る

日本に於ける住宅の變遷と其將來

工學博士 武田五一

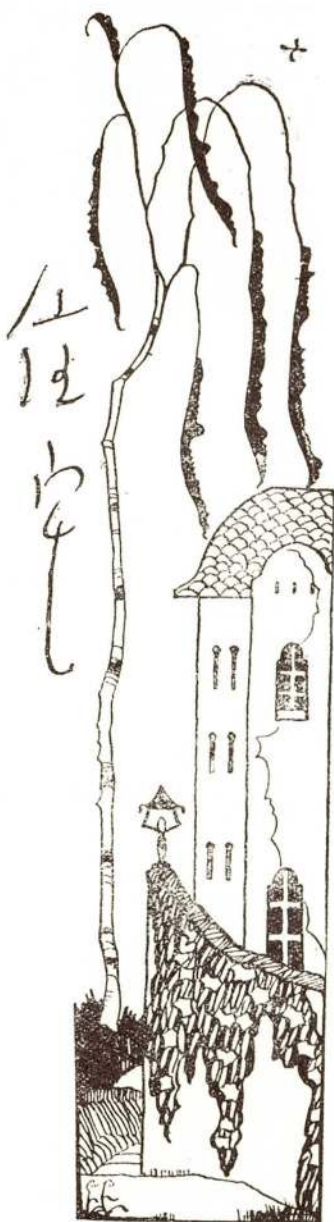
趣味と實益

..... 國民性の反映

一體豫言など云ふことは昔の豫言者のやつたことで、此頃の新しい人間がそんな馬鹿げたことをなすべきものではない。又實際出来るものでもない。是から先き、日本の住宅建築がどんな風に變遷すべきか、と云ふやうなことを言ふのは甚だ

潜越なことで、到底我々凡人の言へることではない。併し、所謂一家言として、自分自身の考としては斯うでもあらうかと云ふことを述べるのも、別に差支の無いことであらうと思ふから、唯自分の考として、日本の住宅は將來どう云ふ傾向を取つて行くべきものか、と云ふことを簡單に述べてみようと思ふ。

元來日本の住宅なるものは他の國の住宅と異つ



て、特殊なる變遷をして來て居る。是は何時も言ふことであるが、外國人が日本に來て、何時も眞先に放つ所の質問は、日本のやうに斯の如き特殊なる様式を有つた立派な建築を有つて居ながら、此の頃の若い所謂新しい建築家は何を好んで他邦の糟粕を旨め、外國の模倣をするか、と云ふことである。併し、それは所謂旅行者として簡單なる考からさう云ふことを言ふのであつて、實際に、我々としては、それに對して相當な申譯があるのである。と云ふのは、一般の所謂専門家以外の人から云ふと、何でも彼でも家でさへあれば建築である、と云ふ風に考へて居る人が多い。西洋人でも、所謂住宅と、住宅以外の建築を混同して考へて居る傾向がある。殊に、我國では、特殊なる變遷を遂げて居るものであるから、住宅は住宅としての考を以て總てを觀察し、又その趣味なら趣味を見て行かなければならぬものだらうと思ふ。

それで近代の建築の見方と云ふものは、所謂實用的方面と、趣味的方面の二つの方向から見て行くのであつて、斯の二つは、恰度車の兩輪の如く

共に肝要なものである。實用的にのみ走つた所の建築は完全なものでなく、趣味に偏した建築、所謂美術的にのみ發達して、其の強さであるとか、其の用途と云ふやうなものを全然閑却した所の建築も、是亦完全なものでない。兩々相俟ち、初めて完全なものになるのであるが、其の中でも殊に住宅建築は、所謂二六時中其の中に住んで居て、我々の生活に最も密接な關係を有するものであるから、特に實用、趣味兩方面の能く調和したものでなければならぬ。さう云ふ意味に於て、住宅と云ふものは、如何なる時代でも、其の時代々々の風俗、習慣、其の他國民性を、極めて能く反映するものである。

横穴生活から

……文化生活まで

我國で、一番初に住宅として現れて來たものは所謂穴居である。是は、色々の本などに書いてあつて、御承知のことであらうと思ふ。所謂横穴、縦穴と云ふやうなものに住つて居つたのであるが

段々疊のやうなものも出來て、寢殿造から武家造書院造と云ふやうに變遷し來り、今日では、所謂明治大正の様式——即ち文化住宅とか云つて、此の頃阪神の間などに能く出來る所の、純日本式でもなければ、西洋式でもない、一種の新しい様式が出來かゝつて居る、斯う云ふ風な變遷は實に能く社會の状態を現して居るものであつて、所謂寢殿造の時代は、お公家様の世の中で、當時の風俗が詩歌管絃の樂みに耽り、歌を唄ひ、音樂を奏して、極めて暢氣な生活をやつて居つたので、あれでも可かつたのであるが、戰國時代の如く群雄割據の物騒な世の中になつては、そんなものではない。即ち、武家造と稱する處の、防禦一方の何時敵が攻めて來ても差支ないやうな住宅が出來た。又、天下が泰平になつた彼の徳川三百年の儀式一天張の世の中では、もうさう云ふ武家造の必要が無いから、所謂大名屋敷と稱する書院造なるものが出來た。それは、威儀一方で、廣い玄關を付け、大きな廣間を造り、又謁見の間であるとか上段、中段と云ふやうなものを造り、極めて裝飾

的な、内容は甚だ空虚なものであるけれども、其の形式は堂々たるものがあつた。所が、此頃では日本にも、所謂世界的風潮が段々這入つて來て、世の中が頗る民衆的になつて來ると、さう云ふ形式はつた、内容の空虚な住宅では逆も我慢が出來なくなつた。又、昔のやうに、堂々たる玄關を拵え、大きな扉や門を構へて、其の中に這入つて居る必要も無く、大きな料理屋や公會堂も出來て、婚禮や葬式でも、皆な家の中でやる必要もないと云ふ所から、さう大きな座敷を造る必要もない。斯う云つたやうな世の中の變遷に依つて、所謂家族本位の文化住宅と云ふものが出來つゝある。仍で、斯う云ふ風なことになつて參ると同時に、所謂生活の様式が大分變つて來た。昔は先祖代々、お父さんは勿論、お祖父さんも、曾祖父さんも、其の又大ぢいさんも住んだ家に親も子も孫も一緒に住んで居たのであるが、是から先の若い者は親父の住んで居つた家に必ずしも住まなくてはならぬと云ふことはない、それ／＼思ふ所に行つて、新しい巢を造らうと思へば、さうして可いと云ふ

極めて自由な世の中になつた。従つて、徒に大きな住宅を拵えて、塙所塞ぎをして居るよりも、もつと都合の好いものを造つた方が可いと思ふやうな關係から、次第に住宅は小さくなつて來て居るが、所謂文化住宅と思ふものは其の現れの一つであらうと思ふ。

日本の將來の住宅

世界的の趣味

儲てさうなつて來ると、將來の住宅はどうかと思へば、自から解決が着いて來るのであつて、住宅の廣さと云ふものは、次第に減じて來るに相違ない。仍で住宅のことを考へるには、どうしても其の實用的方面と、趣味的方面より考へなければならぬが、先づ趣味的方面より考へると、第一に様式の事である。どう云ふ様式になるのが、本當であるか、今までは、先きに述べた如く寢殿造、武家造、書院造と云ふやうに變遷して來たが、是から後の様式は、どうしても世界的の様式にならなければならぬ傾向にならうと思ふ。それには日

本式を中心に、所謂大和魂と云ふやうなものも必要であらうが、併し其の大和魂なるものも、所謂昔の大和魂と今日の大和魂は大分に物が異つて居る。約り、世界的であつて、大和魂を有つと同時に、世界中の人間に共通なる一つの魂、一つの趣味の下に立つて行かなければならない傾向になつて居るから、所謂日本獨得の様式と云ふものは、次第に亡くなることだらうと思へる。是は殘念なことかも知れないが、又止むを得ないことだらうと思ふ。尙ほ、此の趣味的方面から云へば、色々な内部の裝飾或は設備と云ふやうなものも、外國の家具を用ひ、『ベッド』を備へ、敷物を使ひ『サンドリヤ』を用ひると云ふやうな風に、どうしても、亦世界的風潮を免れることは出來ない。是は單に我國ばかりでなく、歡羅巴でも、支那でも、朝鮮でも、何處でも、世界的に一つの大きな流の中に捲き込まれつゝある状態であつて、我國のみが頑張て昔の習慣を守らなければならぬと云ふ譯は決してない。であるから、此の趣味的方面はどうしても其の世界的自然の風潮に隨つて行くのが

至當だらうと思ふ。又、其の自然の風潮に敢て逆ふ必要はない。其の風潮に従ひつゝ順當に進んで行きさへすればそれで可いことだらうと思ふ。

二つの潮流と

……………木造建築の權威

又其の實用的方面から云へば、之にも色々の見方があるけれども、先づ以て間取である。所が、此の住宅の間取と云ふものは、どうしても生活の様式に關係するものであるが、現今我國の生活様式には二つの大きな流があつて、其の何れかに決らない以上は、間取と云ふものは決着が付かないそれは何であるかと云ふと、所謂坐る生活(坐式)と腰掛ける生活(椅子式)である。此の坐る様式が果して何時まで續くものであるかと云ふことを考へると、これは、さう長く續きさうもない。

我々如き年配のものになると、冬などは坐つて居る方が場合に依て都合の好いともあるが、若い人々の様子を見ると、どうしても坐つて居るよりは腰かけて居る方が都合が好いと言ふ人が多い。是

れは多く服裝即ち洋服と和服に關係があるので、若し何時までも和服を着て居れば、どうしても坐る習慣が残るし、又洋服が段々盛んになつて來れば、自然椅子式になるのは止むを得ないことである。所が、此の服裝の關係を見ると、日一日と洋服を着る人が殖えて來るから、どうしても、日本の住宅は餘り長くない將來に於て椅子式になるものと思ふ。従つて、其の間取は、どうしても西洋流の間取にしなければならぬ。さうなれば、何を苦んで昔の所謂徳川時代の間取に執着する必要があるか、決してそんな必要は無い。又實用的方面の第二の問題としては、構造法である。即ち家の造り方なるものは實用的方面からも最も必要なのであるが、是は、無論、材料に關係することが非常に多い。之に就いては、其の國に於て最も得易い材料を、最も經濟的に使用する所の構造法がどうしても其の國の一般の構造法にならなければならぬ。所が、我國の材料としては、何が一等多いか、と云ふと、それは木材である。是は、我國の山林が甚だ廣いから木材の供給が非常に多い、

従つて、建築材料としては木材を以てするのが一番手取早いのである。即ち、從來、我國の住宅建築に於て、木材建築が多いと云ふのは、一つはそれが爲もある。所が、此の木造建築の缺點は何であるかと云ふと、火に焼けると云ふことである。若し木造建築にして火に焼けないものならば、是程理想的のものはない。で、今回の東京の大地震で以て木材建築は非常な慘害を蒙つて、悉く焼けてしまつた。それが爲に失つた財産は非常なものである。然るに、此の木造建築なるものは、火に對して頗る弱いけれども他に色々良い點がある。第一、之を耐震的に考へると、木造建築は餘程耐震構造が樂であり、仕事も亦極めて容易である。仕事が容易であると同時に、その模様變へであるとか、其の他の扱ひ方が大變樂であるから、若し木材にして火に焼けないやうなことになるならば、我國では木材の使用を決して却ける必要はない。所が、之に就き、近來種々と研究が出来て、木材を火に焼けないやうにする研究が餘程其の緒に付て居る。幸にして、木材が焼けないやうな方

法に處理し得らるゝものならば、木材を以て住宅を造ると云ふことは、何時までも廢めたくないと思ふ。無論、都市の眞中に於けるやうな家屋の密集した所に建てる住宅は、都市の安全の上から考へ、どうしても焼けるものでは困るのであるが、少くとも、都市を少し離れた郊外住宅で、左程密集して居ない所であるならば、木造建築の方が經濟的方面から考へても、總てが餘程都合の好いものでないかと考へる。それで、近來は、東京の大地震以來建築材料は悉く『コンクリート』と鐵を用ひなければならぬと云ふ風な一般の傾向になつて居るが、少くとも、住宅だけは左程に鐵或は『コンクリート』を用ひなければならぬと云ふ風に限つて考へず、木材と雖、用ひべき餘地がある云ふことを考へて、所謂木材建築としての我日本住宅の特色を何處までも失ひたくないものと思ふ。又、我國の住宅は、主にも木造建築として發達し來つたもので、所謂外國人が日本の住宅を歡ぶ所以も、木造建築なるが爲であるから、將來に於て我木造建築を益々發達させ、我國の豊富なる材料

を無駄にしないやうにしたいものである。而も此の木材をして不燃質物たらしむることも、そんなに難かしいものではない。尙ほ、木材の第二の缺點としては、腐朽し易いと云ふことであるが、是は其の防腐の處置と云ふものが、近來大分考へられて居て、さう難かしいものではないやうである。

それで、私は、將來の住宅として——住宅以外

の他の建築は別であるが、少くとも住宅だけは、木造建築として、我國の特色を何處までも残して行きたいと切に希望するのであつて、將來に於ける日本住宅の變遷如何、と云ふ風な豫言の一部として、どうも、木造建築と云ふものが其の跡を止める餘地が無いことはなからう、と云ふことを申上げることは決して獨斷的の考ではないと思ふ。

(文責在記者)

金 魚 浮 く

眞 晝 八 ツ 手 を 雨 打 て り

海 を 見 る

眼 新 た な り 更 衣

住宅内部の線に就いて

三 島 沒 虚

藝術上の線は、言ふまでもなく、幾何學上の線と同一である筈はありませぬ。線は終始固停してゐるこの考へ方は藝術上の線への充分なる正しい理解ではありません。全らゆる形態あるものゝ一切の表現や内質の評価を決定するには、勿論、線は實に想像外に緊要なる意義を有つてをります。多分、色彩や光で充される前に、空間は先づ線で一杯にされたのではなかつたらうかと考へられる程であります。線の配置の如何が一切のものゝ存在の評価を恣に左右してゐることは實に驚くべきものです。従つて、線は全らゆるものゝ單なる表装であるのみではなく、すぐその内質であることまで考へられ勝ちであります。線はそれらのものを縛定し固着させるものでは決してなく、絶えず自ら動き生きてをります。生命の動脈を寫し得ない線は畢竟藝術としての線ではありません。

藝術の本源は美よりも生命であります。線を不具にしたり死なせたりして、健全なる美の創生を要望してはなりません。藝術の神秘は線の神秘であります。線の生命はまた藝術の生命であります。全らゆる象形藝術は私達が好愛した影の輪廓を保存することから始まります。象形藝術に於いてその美を構成するものは第一に線です。線の種々な投影がその複雑化された美を構成するのです。正しき線と線とに依つて醸し出される雰圍氣の感觸が、その藝術の有つ美の感觸であります。線は充分に理解され、検討されなければなりません。充分適當なる布置が望まれなければなりません。歪められた線は生れ出づべき美を誤り傷けます。誤用された線はその美の形態を破り崩します。線一本が全らゆる表現を左右します。線の重要さはその表現の一切の重要さと同じものです。従つて

建築に於けるその美の探究は先づその線への探究から始められなければならぬ。言ふまでもなく、藝術の自由性には嚴めしい境線があつてはならぬが、藝術としての自らなる約束と領域とを有つてをります。建築がその線によつて生き、傷き、また輝き、汚れるのは當然です。線への敏感な理解は建築への正しき愛撫となりまゝ。建築の様式はまた一つに線の様式であります。建築のもつ美の情調は線のもつ美の情調であります。建築の感觸はまた線の感觸であります。

建築に於いて先づ求めらるべきはその藝術としての美でありますし、またその美に對しての厭えるやうな欲求を有たないで建築に對してはならぬいものではあります。その美はまた建築の實用上の効果を削ぐものであつてはならぬ。求めらるべきは美と實用の矛盾なき調和であります。全らゆる藝術の美はいづれもその藝術の描現する感情の道德的の純正と威嚴との指針であることを早くジョンラスキンも言つてをります。建築に於いては、その美の指針がまた實用の指針である

ことが必要です。こゝには妥當なる見解が要望されなければならぬ。美が傲頑にも實用から分離し去つては、建築はその性格を破ります。従つて、用ゐらるべき線は厭くまで純正でなければならぬ。線は美への理解と認識との錯亂を表はしてはならぬが、また實用を無視して自らの亂用に走ることは危険です。建築の根蒂が線の紛糾した複雑化のうねにのみ求められてはならぬ。線の錯綜はすぐ内質の豊富を確證しませぬ。建築に於いては、その表現の高渾なる調子は多く單純簡明なる線の正しく適當なる施驅のうちにあります。多くの場合、實用は美より單純簡明であります。實用を飾ることが美を醸成する所以ではありませぬ。直截なる實用はそのまゝ純正なる美となり得ます。實用に生きた線を美に生きた線へまで生長させなければならぬ。美の線と實用の線とが明確に區別されてゐることは、建築を充分に美しくし、また充分に實用化する所以ではないであります。

従つて、住宅内部に於いて先づ求めらるべき線

は、能き得る限り流暢で單純な線です。流暢は清楚です。單純は明快です。多くの場合、部室の線が單純すぎて美を削ぐといふとはあり得ませぬ。部室は明るい程いゝとされてゐます。多彩であること多線であることは、多くの場合、その計畫當時の豫期に叛いて、美から遠くなり暗らくなり汚れに近づきます。俗惡な華麗や、卑淫な纖細に圍繞されては、住宅は住宅として正しく健やかに生きませぬ。裝飾的意匠の立派な精妙さは、勿論、求めなければなりませぬが、私達は私達の住宅を裝飾の爲に裝飾し、金のために裝飾してはなりませぬ。眞に美を愛し、生活を生かすためにこそすべきでありませう。裝飾の亂用は、疑ふまでも、本然の美と生命とを死へ追ひやります。線は少い程、單純である程、明確に美と生命とを表現します。過裝飾の罪はその裝飾自らを歪め、その價值を勞費し、その一切を無駄にし去ることになります。俗惡は過裝飾について廻り易いものです。線を用ゐすぎることはその藝術家の幼稚さと卑しさを現はします。線を如何にレオナルドが愛した

かを知るのは喜びではありませんが、彼がその線を如何に適當に制御したかを知るのは一層の喜びです。線がありすぎることは、やがて、退屈な線や疲勞した線を作り出すことになります。生活の美と生命との表現としてののみ、それらの喜びの表現としてののみ、線は適當に施驅されなければなりませぬ。純正なる單調こそ、先づ求めらるべき線の重大なる効果であります。

近代の生活の種々相には、云ふまでもなく近代の表現様式が必要です。近代の建築は近代藝術の香氣に充されなければなりませぬ。今日の住宅には今日の線が求められなければならない譯です。建築はその本質上他の藝術に於けるよりも、一入古典につき傳統に即しますが、古典の線への頑迷な復歸は充分なる線への愛執とはなり得ませぬ。傳統と習慣とに低く執つてゐては線は生きて自由に働きません。自由なる飛躍と新しい出發とが必要です。追蹤は藝術にとつては墮落です。今日の敏感をもつて今日の住宅を理解し創生しなければなりませぬ。表現は能き得る限り直截であること

を要します。過去の廢滅すべき線はその廢滅期へ來てをります。新しい線は新しい美の旋律を生みます。新しい生命は當然新しい線に表現されなければなりません。私達の情操は不斷に明日の完成への道へ歩きつづけます。住宅に用ゐらるべき一切の線が、必ず、明日への藝術的良心をもつて生かされ動かされなければならない所以です。

住宅内部にもりあげらるべき一切は、勿論、すぎる程豊かであることが必要です。與へらるべき線も、當然、その内質に於いて能き得る限り一杯に豊かであることが必要です。藝術味の豊かな選ばれ精練されたる線は、その四周を鮮かな美と生命とで浮きあがらせます。が、その表装描現は厭くまで豪華であるよりは、むしろ清楚であらなければなりません。こゝには、激情を求めるよりは快い昂奮を求めなければなりません。一見所謂派手な線は、必ず、本質上は卑しく低い線です。線は單なる生活意慾の軽い表現であつたり、藝術意識の低い記述であつてはなりません。一見達者な技巧は、多くの場合、輕佻氣障な跳躍を招きます。

虚偽や汚穢は當然輕蔑されなければなりません。錯覺は内質の貧しさから招來されます。秩序を愛する感情は私達の生得的な本能でありますが、こゝに求めらるべきは、やはり、線と線との有つ重く正しい秩序です。互に間隔ある深重なる線の配列は、住宅内部の秩序を完全に保有するに役立つであります。精確緊密な線は正純なる雰圍氣を必然的に醸成します。精確はまた美です。緊密はまた生命です。典雅、纖麗、雄勁等は、これらの美と生命とに依つて醸し出されます。幽深微妙の境地はこゝに遺憾なく展開されるであります。従つて、住宅内部に於ける線の施驅は、必ず、最後まで精到慎密であることを必要とします。

窓には窓に相應はしい線、扉には扉に適當した線が當然與へられなければなりません。が、室内には、先づ家具の有つ種々な線と住宅そのものゝ有つ線の注意深い巧な配分がなければなりません。床板や腰羽目等の感じよき線に沿うて、全らゆる選ばれたる家具が各々その適當な位置に何氣なく並んでゐることは、疑ひもなく、住宅の全體を正

純な親密なものごします。書棚、卓子、椅子、或はカーテン、衝立等、又はそこに置かれたる陶磁器、玻璃器、織物、額等の全らゆるものゝ線の、おろそかならざる考量がこゝに必要です。曲線、直線のそれらの流れは、互に傷け合つてその住宅の雰圍氣を賤しくしてはなりません。家具の一切の輪廓は室内の外線を決定します。家具の有つ線は室内を落ち着かせ、揺り動かし、又、溫くし、冷たくします。震災後は日本在來の家具にも一種の改變期が來たらしくありますから、將來は金屬製の家具も相當用ゐられるらしく、室内の感じも幾分在來とは相違あるものとなるでせう。勿論色彩にも夏期に愛さるべき色、冬期に求められて適當な色、或は鋭い感觸の色、隠かな氣分の色等がある如くに、線にも種々雑多な感情があるべきは當然です。籐製または柳製等の家具のもつ輕快な線、カットガラスの爽澄な線等は、必ず、夏期に於いては最も好愛さるべきものでありませう。居間には居間としての充分重さのある家具、意味深い意匠が要求され、應接室にはまたこの部室に適

當なる輕やかなさりげない家具や意匠が與へられなければなりません。一體に豫想を裏切つて直線は人を似かしませず、曲線は反つて人を疲れさせる傾向を有つてをります。一見單調で興味の淺く思はれ勝ちな線ほど、人を厭かしませず、苛立たせず和やかに落ち着かせます。類似線は一見單調に見えても整調の美を生みます。生きた線は幻を生みます。完き線は光を生みます。働き得る線は光の線となり得ます。強激なる線は過剰なる意匠と同じやうに、必ず、住宅からは遠ざけられなければなりません。不整調なる曲折、繁粗なる凸凹は線の墮落です。一言で言へば、住宅内部に於いては全らゆる線をその本來位置すべきところに、破綻なくさりげなく位置させることが必要なのであります。

従つて、住宅内部に於ける線の藝術的完成は、先づ、全らゆる線を能き得る限りその本然の相にかへし、極めて單純簡潔にすることにその基調をもちます。一切の單純化は一切の美化への最も正しき道であります。單純なる線のもつ豊かな内質

は繁雜なる線のもつ内質以上であることを普通とします。單純は亂れませぬ。重さと深さは亂れのうちにはありませぬ。單純の美は復雜の美と同等以上の藝術的價值をもちます。不當に贅澤に用ゐられたる線は、過剰な色彩や光が與へる不快な錯覺惑感と同じものを私達に與へます。従つて過去に用ゐられたる不用な線や、誤用されたる贅線を襲用する愚かさを繰り返へしてはなりません。他より附加されたる多くの裝飾も、多分、その本然の美と生命とを傷けるに役立つのみであるでせう。錯覺は決して美ではないこと、直截は美であることに充分考慮されなければなりません。多分全らゆる象形藝術に於いて、線はごく深く愛好されまた病的に用ゐられたがるものはないでせうが、全らゆるところ全らゆる表現描寫に、唯、一本の

生ける線があるこそ、この藝術の本然の理想です、單一の美なる綜合の美の先驅です。一本の線が住宅内部に於ける全らゆる情調、一切の興趣を養て育みます。調和はこゝから與へられます。生命はこゝから芽生えます。一切をそのあるべき筈の相にかへし、その独自の個性を素直に生かし思ひのまゝに伸ばさなければなりません。加へられたる技巧粉飾等の全ては躊躇ひなく剥ぎ去られなければなりません。強ゐられたる復雜多彩の一切は直ちに棄て去られなければなりません。單一はまだ、一切を條件なく復歸させるのです。單一は美です。又、生命です。かくて、一切は生くべきまゝに素直に生きるでせう。住宅は明るい住宅となり、部室は輝きの部室となり、生活は喜びの生活となるであります。出發はこゝからです。

柿 咲 い て 井 水 つ め た く な り に け り

『國際市の實現』(二)

太田 寛 吾



三

國際市の建設について、
アンデルゼン氏の計畫してゐるものの中に、今二三の見通してなら

ぬものがある。

■その一つは『學問中心』と『藝術中心』との中間に世界各國の數だけの各國館 (Palaces of Nations) を設けることである。これは從來頻々と開催される世界博覽會は、一時的のお祭り騒ぎに終つて永續的でないのを遺憾とし、國際市では世界商工業の發達及國際關係の融和に資するために、各國から建物及陳列品を出品して、常設博覽會を開設し

たいといふ希望である。

その二はアンデルゼン氏の最も重きを描いて是非これを國際市の事業として、遂行したいとの切望を抱懷してゐるもので、即ち、國際教育と國際新聞とである。現在各國の競つて教育を盛んにし、學問を獎勵してゐるものは、各國それらの國民教育であつて、自國本位に傾いてゐることは争はれない。そこで、人類全體の協力又は世界恒久の平和といふ方面の教育に力をいたすために、國際的教育及國際的研究の中心として、別に『國際大學』(International University)を設け、各國からの學者の分擔協力によつて、世界を全體としてその過去、現在及將來を學問的に研究しやうといふ企てである。

しかしながら、教育はひとり學校のみでなされ

るものではない。現代における教育上の一大勢力は、何んといつても新聞を等閑視することは出来ない。然るに、現在の各國新聞は、あまりに自國本位に過ぎて、無責任、無謹慎な議論報道を敢てし、ために國際間の諒解を阻み、融和を害するこゝどが少くない。よつて國際市には『國際新聞』(International Press World Press)を發行し、單に世界的報道の中心とするばかりでなく、眞に不偏不黨の態度を以て、世界的正義と世界的利益とを主張し、『世界輿論』(World Voice)を造り出したいといふのである。

國際市の事業は、概要以上の設備によつて、推測することが出来るであらう。最後に、この計畫について、最も重要な問題として殘された、三つの事項すなはち位置、費用、管理について、アンデルセン氏の説を述べて置かう。

第一は位置、すなはち、國際市を何處に建設すべきかといふ問題である。これに對して、ア氏は精密な調査を遂げた結果、數多の候補地を算へた

上、その場所へこの都市を如何に當嵌めるかといふことまで、一々地圖を書いてゐる。その第一候補地はアゼルベムで、これは世界大戰における同國の犠牲的態度に對する賞讃と、同情とによるものらしく、第二候補地はギリシャであつて、同國はかつて世界文明の中心たりし歴史に鑑み且つ東方諸國にも遠からず、地理的に大體世界の中心といひ得るとの理由からである。

第二の問題たる建設費は、これを約五億弗と計上してゐる。これは如何なる見積りによつたものであるか、アンデルセン氏は判然と記してゐないが、唯この五億弗は、今回の戦争の一週間分の戦費にも足らぬと附記してゐるところから推測すると、よし建設費は幾許を要するとも、諸國がその國力を傾けて、戦争といふ大破壊を行ふを思へば、極めて低廉なものであるといふものらしい。

第三の問題は國際市に對する法律上の性質である。建築上精密を極めた設計を行つたアンデルセン氏も、流石に法律家でないだけに、この點は頗る粗雑で、殆んど執るに足るものがない。しかし

その敷地を各國共有の中心地とすることは、根本的に決定されてゐるところであり、その管理は國際管理にしてもよし、又はその敷地を提供した國の委任管理にしてもよいといつてゐる。

四

アンデルセン氏の『國際市建設』計畫の跡を見る時、何人もそのあまりに理想的に、あまりに空想的に、すべて整頓してゐることに驚くと共に、どうしてこれが實現されやうと思ふに違ひない。從來、これを以て夢想的の大計畫として、冷評されたことも決して無理からぬことである。然るにこの同じ國際市が、愈よ實現されると聞くに至つては、更に何人も一驚せざるを得ないであらう。然らば、この國際市を實現させやうとする、一九三〇年ブラツセルに開催される萬國博覽會は如何なる内容を有つものであるか、その國際都市に押進めんとする大計畫は、如何に設計されてゐるかポール・オートレー氏の報告書から、特に國際市に係してゐる部分のみ、更に其概要を摘録しやう。

一九一九年十一月以來、バレー、デグモンにおいて開かれた國際都市同盟會總會では、ブラツセ

ルに開設される萬國博覽會について、熟慮審議してゐる多數の學者、國際協會同盟會、國際都市同盟會等から、一の新らしい都市を創設したいとの希望決議を提出したのであつた。その理由書の前文は規模廣大なる萬國博覽會を開くに當つて、自らその全部の設計構造を國際市の體裁となし得るのである。勿論、その材料等は永久的のものにせすとも、かなりの耐久力を備へしむることは不可能のことではないであらう。(その一例は倫敦のホワイト、シテイーにおいて見ることを得)加之、該國際市を以て、永久的の一大規模の博覽會となし、以て諸多の新規なる意匠や發明品、其他あらゆる種類の社會の創意物を展覧し、又國際的大會議の議事堂にあてるることも出来るであらう』と記されてゐる。そして、この博覽會は『單に商業的限界に止めること、従つて不完全なる粗雑なる一時的間に合せとなすことを止め、秩序整然たる内容の充實したるものとなし、科學、藝術、社會的組織、經濟生活等に互つて各種のものを網羅し、文明の進歩に應せしめんとするに至つたのであるかゝる建物には、必ず永續的とか、永久的といふ

觀念がその事業の根本とならねばならないし、又白耳義がこの事業を完成し、以てこの國が國際生活中における一の名所の中心たらんことを期する『といふのである。

この中に『一時的間に合せとなすことを止め云々』は、アンデルゼン氏の所謂『各國館』(Palaces of Nation)における『從來の世界博覽會の一時的のお祭り騒ぎをやめ、永續的のものとする』といふ趣旨と合致するもので、畏くも注意すべきものである。更にオトレー氏の報告書第四項の中に、極めて具體的に記述されてゐることがある。

すなはち『一の大なる博覽會とは、畢竟一の都市、一の大都市であつて、從來はかゝる大都市を單に數ヶ月の間ためにのみ建設したのであつた。すべて吾人が都市において見るところのものは、博覽會においても見るのであつて、唯その規模の差違があるのみである勿論、博覽會内には住民といふべきものは一人もゐないけれど、これに反して、規模宏大なる公的建物にして、或は道路係用とか、建築係用とか、衛生係用とか、掃除係用とか、保安係用とか、裝飾係用とかの使用にかゝる

ものが非常に多い。この故に博覽會運動と都市計畫運動とを關連して考へ、博覽會を計畫するに當つて、すべての都市的設備の完成の問題をも考慮して、以て模範的都市の建設々計を作ることが適當と考へるのである。(中略)所謂博覽會なる觀念と、吾人の新しい都市の觀念とを密接に結びつけて、今度催さるべき世界市場において、一の模範的都市を建設することゝして、この世界市場中の一大部分をこれが敷地に當てゝ、永久に使用の出来るものとするので、一番當を得たことゝ思はれる』と。

また、その第五項中の終りには『從來の因襲を打破して、博覽會なるものを人類が現在において見得るところの偉大なる記念物、又は目標たらしめたらどうか。人類の大事件なるものは、そのすべてゼノアの洪水以來、この大地を血染めた最も恐るべき戦争のみが大事件たるの特色ではない』とあり、これアンデルゼン氏の現代文明の代表的記念物として『一大都市を建設したい』といつたのと、言葉においてこそ多少の相違こそあれ、趣意において相似通つてゐるのも、興味あるコントラストではないか。(つゞく)

テベス西岸の一日

—續埃及遊記 (六)—

天 沼 俊 一

十月二十八日 (土曜、好晴)

七時四十五分に宿を出た、勿論このためには前夜から七時に朝食と同時に辨當を用意する様に命じておいたのであつた。今はまだ季節以前だから宿はがら明きで、客はたつた三人きりであつた、こんな有様だから、朝少し早く食事をする、食堂はいふ迄もなく私一人である。

私の食卓附の給仕人は、こんな時を狙つてゐたものと見え、料理を運んだ序にあたり人の居ぬのをみすまし、氣味の悪い笑ひ方をして『毎日中々御勉強ですな、昨日の辨當には不都合のところはありませんでしたか、今日も入念に作つておきました、どうかあなたの辨當を作つた給仕人を忘れないでください』と揉手こそしなかつたが人の顔を覗く様にして臭い息を吹きかけ乍らいふ、

丁度此時給仕頭が食堂へ出て來たので、彼は急に澄して知らん顔をして往つてしまつた、いやな奴だが憎氣のない男だ。開路の牧羊館の給仕より稚氣を帯びてゐる丈け可愛らしい。

辨當籠は此男の手から案内人に手渡された、案内人は夫れを後生大事に抱へ、昨日みたルクソル堂の裏手から川邊へ行く、そこに小船が待つてゐたのでつたら、僅に五分で對岸へ着、上陸すると驢馬が待つてゐたから夫れへのつた、今日のは籠があつて上等であつた、玉蜀黍畑の間を駈ること暫時にしてクルナに於けるセトス一世堂の前に出た。渡船や驢馬は前以て案内人が手配をしておいたのか、或はタクシーや辻車の様に客待をしてゐたのか、其邊は聞き洩らしたが、大分連絡の工合がよかつた。



ナルグに於けるセトス一世堂

當堂はセトス一

世が父のラムセス

一世紀念の爲めの

建立したもので、

其子ラムセス二世

此を完成して、更

に父なるセトス一

世即ち創始者に奉

献したものである

だから此堂は言は

ス Cenotaph だ、

一の紀念堂に過ぎ

ぬのである。大門

や中庭は既に破壊

されて了ひ、今残つてゐるのは正面十本の柱の内

九本だが、何れも紙草の集合柱である。

現在の正面中央の入口を入ると、直ぐそこが列

柱堂で六本の柱が立ち、其左右に小室が澤山に配

置せられてあるが、こゝで一つ面白いことは、此

堂の工合がある點に於いて、アバイドスのセスト

一世堂によく似てゐるといふことから、恐らく同

一の美術家が計劃をしたのであらうといふ説があ

る、かゝることも亦到る處ありがちで、殊に昔し

技術者の少ない時代にはさうであつたのである。

たゞ其名が傳はらなかつたから、確言が出来ぬと

いふ迄である。其經過の年代に於いては比較にな

らぬが、大和の靈山寺本堂と薬師寺東院堂とは、

弘安六年と同八年とに、同じ大工棟梁の未清と人

夫頭の國重とが建てたと同じで、甚だ面白いこと

と思ふ。

一通見物をしてから裏へぬけ、こゝから北へ進

む Dr. Abu'l Neggah の墓地の脇を通る、こゝは

テベスに於ける最古の墓地の一であるが、大部分

は破壊されて了ひ、今丘の斜面にある窟墓は新帝

國時代以降のものだといふ。こゝから先きは岩石

嶺々、往々にして絶壁をなせるリビア破漠の山脈

の間の狭い溪を大きく迂回すること約一里にして

所謂『王陵』(Bibān el-Mulūk) に出るが、此間烈日

に直射せられて驢馬へのつての旅行は、決して樂

な仕事ではなかつた。緑色のものといつては一つ

もなく、總てが褐色で一滴の水もなく、上の方には青空が帯の如く見えてゐる乾び切つた所に、どういふものか *Nymphalidae* の蝶が一つゐたのには全く驚かされた、こんなところでも食物があるのか、夫れども紛れ込んだのか、或は驢馬の糞が目的か、兎に角クルナの堂を出てから『王陵』迄の間で、動物では此蝶をみたばかり、澄み渡つた空には生憎鳥一羽飛んでゐなかつた。

「王陵」に於ける *Anenophis* 3、陵への道(午前十時頃の光景)黒衣の人物は墓番で、白衣は私の案内人 *Mustapha*.



漸く王陵に着いたので 番小屋の下で驢馬を下り、澤山の墓の内第九(ラムセ)第十一(同三)、第十

七(セトス一世)及第三十五(アメンホフ)の四つ丈けをみてあとは割愛して了つた、此等孰れ劣らぬ大したものゝで、残念ながら我國の古墳なんな到底傍へもよりつけない。孰れも横穴で入口を入つてから自然に下降して玄室に達する様になつてゐる、だから丁度我國のに比較してみると、おそろしく美道の長い古墳と思へばいゝのである、而も柱や壁等には一面に極彩色の繪があるのだから、愈以て我國のは規模に於いても裝飾に於いても、將又經過の年月に於いても、百歩位譲らなければならぬ有様である。茲には參考に資せんが爲め、セトス一世陵の平面及斷面を圖示しておくから、其内部が如何に複雑であるかと判ると同時に、如何に地團太を踏んで悔しがつても、我は到底彼に及ばぬと諦めるにも都合がいゝであらう。

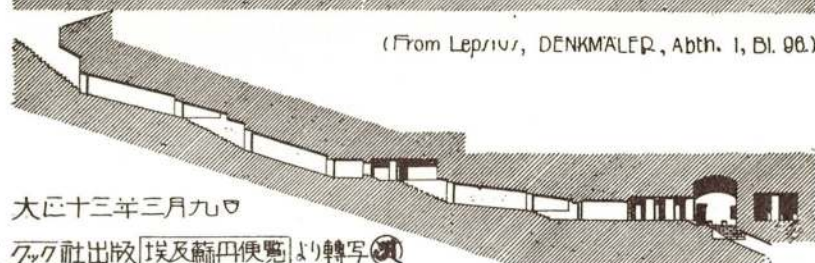
其主要なる窟墓内は何れも電燈の設備があつて觀覽に便ならしめてある、殊に第三十五即ち *Anenophis II* 陵の玄室には、今尙埋葬當時のまゝの状態に於ける此王の木乃伊が置いてある、案内人は得意になつて其説明をする。此王の崩御は前四

エトス一世陵平面及断面圖(前1306年)

(大正十一年十月二十八日觀覽)



(From Lepsius, DENKMALER, Abth. I, Bl. 96.)



大正十三年三月九日

エトス一世陵 埃及蘇丹使節より轉写

二〇年
だから
木乃伊
は今を
距る約
三千三
百四十
餘年前
のもの
である
私は
British
Museum
に於
いて M
en-ka
-Rä
推定さ
れてゐ
る木乃

伊及其他をみた、開路の Egyptian Museum にて Seti I. & Rameses II. (the Great) の夫れをみた。如何に保存並に學術研究に資する爲めとは言ひながら、苟も古代の帝王であつた人々の尊き遺骸を硝子箱に入れて曝しものにするとは怪しからぬ事である、正に人道上の大問題である、必要ならばナポリ博物館の特別室の様にして、相當の研究家のみを入れる事とし、有象無象には見せぬ様にした方がよからう、いつ迄もあんな暴戾なことをしてゐると、廻る因果といふことがあるから、いつか我身の上に及んで來ると覺悟せねばならぬ。實際、あの硝子箱に入れてある乾びた人間のひもの而も夫れが古代の帝王であるのだから、かうなつては the Great も糸瓜もあつちのものではない、到底正視するに忍びずして、いゝ加減に瞥見しておいたが、今日の此の尊骸も同様にろくにはみずして、せめてもと思つて心からの敬禮を一つしておいたのであつた。

尙もう一つ此王墓に就いて記さねばならぬことがある。丁度私共が初めてこゝへ着いて驢馬を下

りた所、即ち道路から番人小屋へ上らうとする邊に於いて Lord Carnarvon や Howard Carter などが豫てから土穿をやつてゐたが、遂に其勞空しからず、此時から約一ヶ月後、即ち十一月下旬に於いて、世界を震撼させた大発見をしたのであつた、夫れはツタンカーメン王 (Tutankhamen, Tut-en-kh-Anun) の陵を掘りあてたので、此陵からは種々なる珍寶家具の類が澤山に出て、學術上にも多大の貢獻をしたと同時にうんと金も儲かつたのである。私は孟買市へ上陸して間もなく新聞紙で大発見の輪廓を承知し、こんな事ならせめて入口の様子でもみて來たのに、今更何とも致し方がないと思ひあきらめて了つたが、昨年三月號の Scientific American で稍々詳細なる発見の記事をみ、再び思ひ出して一寸行つてみたい様な氣がしなくもなかつたが、更に本年三月八日の大阪毎日新聞——朝日も同じく、其他のは見ぬから知らぬ——は『牡羊をにえに埃及の發掘式』と題し、ルクソル六日發の電報を載せてあつた、文に曰く

(埃及ルクソル六日發國際) 世間を騒がした古代エジプトのツ

タンカーメン王の墳墓は本日午後埃及政府で發掘の式を擧げ金色燦爛たる柩を内覽に供した、埃及駐在英國代表アレクシ元帥を始め顯官約二百名は特別列車で式場に臨席した、式は善美を盡し古代王朝時代の慣習に隨ひルクソル市の中央で二頭の牡羊を犠牲にあげ市中は各戸國旗を掲げ夜は盛宴を張り煙花を擧げた、併し墳墓の眞の発見者ホワード、カーター氏及び其の隨行者は一人も臨席しなかつた。

こゝに於いて私は二度思ひ出して愈も一度行き度くなつた、ルクソル滞在の三日間の出來事の一つ残らず思ひ出し、地圖と日記とをひろげて、開路市から特別列車で英國代表者が着した時の光景を想像したり、夜の盛宴は屹度川に面した特等旅館の Winter Palace Hotel であつたらうと思つて見たり、引いては歐米列強の埃及に於ける發掘事業を羨しく思つてもみたり、夫れから夫れと際限もなくいろいろ考へさせられた。

序ながら、この Tutankhamen はツタンカーメンと訓むのでなく、ほんとは綴り通りに切つて Tutankh-amen ツート、アंक、アメンださうなさうかも知らぬが、これでは何だか管原道眞をスガハラノミチザネと發音しないで、スガワ、ラノ

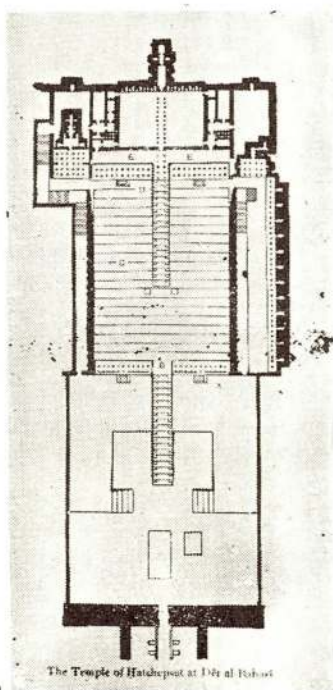
ミ、チザネといふ様で、少しく變に聞こえなくもない、併し私は私の尊敬する自爲亭主人から聞いたから、一説として掲げておく。

こゝから山一つ越すと有名な Deir el-Bahri (Ij-Dar al-Bahari) へ出るのであるが、山を登りきる迄は歩く方が樂だ、そこで登り詰めてから驢馬へ乗つたが、頗る危険な絶壁上の凸凹の劇しい道を行くので大分にあぶない、やがて右側直下に目的の堂が見えたが、真直に下りることは出來ず、大迂回をして山の尾に沿ふて降らねばならぬ。

降り道が曲り曲つて急轉面で、大分に際どいところへ來たので復び馬を下り、徒歩して漸く降り右を向いたら、正面絶壁の下に堂の正面全景が見えた、夫れと並んだ Mentu-heh-ep 堂は、こゝからより反つて先刻の絶壁上から見下ろした方がよく様子が判る。

此堂は今日 Temple of Deir el-Bahri (北僧庵堂) として知られてゐる、Deir el-Bahri——デイル、

所謂北僧庵堂平面圖



エル、バハリとは暴夜語 Northern Convent——北僧庵の意で、名の起原は其昔耶蘇教傳來の際、僧團が此堂を占領して僧庵としたかちであつて、當時亂暴にも壁面にあつた幾多の貴重なる彫刻を削りとつて了つたのであつた。随分怪しからぬ行爲であるが、めつたに人のことは言へぬ、我國にだつた神佛分離の際、神社に保存してあつた梵鐘に一面に細字で刻みつけてあつた銘文を、全然削つたので、其神宮寺たりし寺の沿革が判らなくなつて了つた例等はいくらもあるから。

そして此堂は Queen Hathor——此他に此女王

はまた Hatesut, H
atshepsut, H
t, Makewire
等の名で呼
ばれてゐる
が、Hatasu
が一番短く
て始末がい
ゝ、案内人
はハテシユ

と發音した——が建てたので 主としてアモン神
を祭り、尙女神ハンソール及び死の神なるアヌビス
をも合祀し、其上に種々の目的に用ひられたる各
種の室もあつたのである、其規模は平面圖に示す
が如し。

話は少し脇道へ入るが、私は豫てからAnubisを
大變面白く思つてゐた、といふのは、此神は頭が
Jackal(豺の類)で身體は人間である、そして左手
に杖をついて立つてゐる、重ねて記すが死の神で

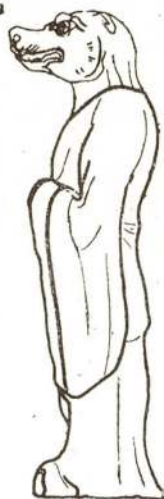


Queen Hatshepsut.
女王 Hatasu の像

そしてOsirisの子と考へられてゐる。我國に於ける
奈良佐保山の所謂隼人石なるものは獸頭人身で
兩手を杖にのせて立つてゐる、其三種は『好古小
錄』に、拓本を縮圖したのが『集古十種』に出てゐ
るのは、大概の人は知つてゐらるゝであらう。此
れはいふ迄もなく奈保山東陵即ち元明陵から掘出
したもので『大和志料』には犬石いぬいしとし、頭部は狗で
肢體は人だから『即ち隼人の犬人に象れるものなり』と説明してあるが、其の上部には『北』字が
かいてあるし(挿照圖)『海東金石苑』所載の十二神畫
像や、支那朝鮮の陵墓等から考へてみても、これ
は多分『子』即ち鼠であらうが、どうも其本家はこ
のアヌビスで、十二神は分家ぢやあるまいか、其
他唐代三彩陶俑(十二支のうち戌像)(能勢丑三氏舊藏)(挿照圖)等から想像し
て、兎に角此際、埃及、西域、支那、朝鮮、日本
といふ様な事を一寸考へてみ度い様な氣がしなく
もない。

Hatasu 女王の誕生に就いても面白い神話があ
る。造化の神なるKhnumはアモン神の命を受け
て、粘土を以て最も美なる容貌の人形を造り、生

唐代三彩陶俑 戌像 側面



大正十三年四月二十四日能勢五三氏蔵圖

大和國本良佐保山碑の一・大正十三年三月十日高田十



即任所藏の拓本より縮写(好古叢録の所謂「集人石」)

アヌビス立像



大正十三年四月二十六日能勢五三氏蔵圖

命の神なる Heket が此の土人形に魂を吹き込み、かくして埃及否世界一の美女は埃及の朝廷に生れたのである。うだが (Myth and Legends of Ancient Egypt) が、實は第十八王朝初期に於ける男勝りの女王でカーナツクのアモン堂とこゝに立派な記念物を遺したのである。

所謂北僧庵堂の全景は、埃及に於ける私の最も好きなものの一つである、砂は灰色に、背景なる「ピア」の絶壁は赤褐色に光り輝き、溶み渡つた青空は、唯さへ青いところに赤褐の餘色の關係上一層濃藍色に見え、絶壁の麓なる段形の壇上に配置されたる僧庵の列柱は白色に光り、各列柱間は深き陰影の爲めに際立ちて黒色に見えた、此時あたりに人なく、正午に近き太陽は直上より照りつけてゐるだけで、風もなく雲もなく萬籟聞として聲なく、全く静まり反つてゐたから、遺憾なく前千五百年迄時代の逆行を試み得たのであつた。

此と並び建てる Menthu-hehеп堂は、周圍に列柱があり、堂内に入ると大柱三列に並び、其中央に寶形塔のある大分變つた堂で、仔細に調べると頗

る興味あるものであるが、時間の關係上止むなく遠方より眺めておいて、あとは案内記を読むこととし、ラメセウム迄行つて、其壞れて一部だけ残つてゐる列柱堂の影で辨當を開いた

Ramesseum は

ラムセス二世の建立する所で、例のアモン神に捧げたのであるが、大分ひどくなつてゐて今は全體の半分丈けが漸く建つてゐる有様である。正面の大門は裏側の方こそ相當に残つてゐるが、表側はまるで石切場同然である、第一中庭は跡形なく、そこにあつたラムセス二世の大像も亦無慘の最後を遂げてゐるけれども、僅に胸、腕、脚の殘闕か



北僧庵廳堂全景

ら當初の大きさを想像し得る、例へば腕の直径四尺八寸、食指長三尺三寸で、當初の總高五丈七尺餘と見積られてゐる。我が奈良の大佛は座像で約五丈三尺あるから、立



北僧庵廳堂柱何れも六十面柱

なもので、殊に蕾の方はアバイドスのセトス一世堂のものと同じく、所謂 Patut Coneであつた。

堂外西北に當る小高い所に、所謂 Sheikhの墓が

てばラムセス二世を眼下に見下し得るのであるが、座つたまゝでは四尺負けになる。第二中座には○^{52.5}の像が澤山あるが、何れも肝心の頭が闕けてゐる、そしてその柱は紙草の蕾、大列柱のは夫れの開花せる柱頭をもつてゐるが、何れも大した裝飾なく簡單

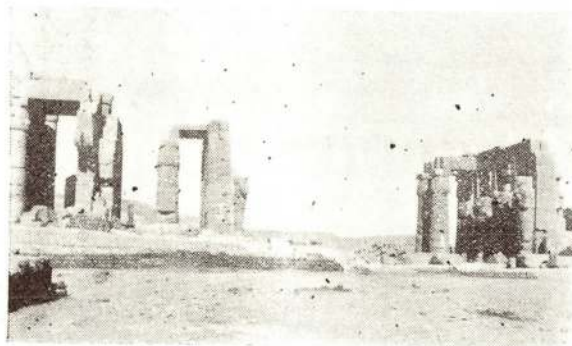


北の波に穿たれた廟堂に於ける犠牲室天井の筒
波の穿たれた廟堂に於ける犠牲室天井の筒

大分に残つてゐるが、これ等は總て割愛して遠方から敬意を表し、これ以上詰め込むのは少し無理だから、今日はこれ丈けにして、また驢馬に跨り渡船場に向つた。

川を渡る時上流遙に土人船一艘、笛と太鼓と鐘とで節面白く囃しながら下つて來るのを認めた、其調子が如何にも我國のに似てゐたから、お祭りでもあるのかと尋ねてみたら、何のこと葬式だといふ、併し私には、どうしても村の鎮守の祭禮とはか思へなかつた。

此時よりすつと後、即ち昨大正十二年一月十九日、南印度のMadura—Mathura (Mutra) ではない



セメセウの部

——市の郊外約一里餘なるTeppa Kulamをみに行つたことがあつた。我國なら襟巻に外套で震へてゐる様な時分だが、常夏の國では恰も盛夏の如くこげつく様な暑さだつたから、淨水を湛へた大神聖池の附近は、廣びろとして静かでも言へぬいゝ氣持であつたが、こゝで休んで少しく眠氣を

催したとき、突然此池の裏手に當り同じ様な調子の笛太鼓、鐘の囃子が初まつた、此時私は一番先きに我國の祭禮を思ひ出したに此ナイルの葬禮船を思ひ浮べたのであつた。

こんな風で私には、元來音楽を聞き分ける様な微妙な高等な耳は持合

せて居らぬから、甚だ以て怪しいが、埃及や印度の蠅子はどうも我國のによく似て居り、殊に其太鼓は西洋の Drum と異なり、所謂東洋風の音を出すから、私共には一種の懷みを感じると同様に、歐米人には東洋式氣分が横溢してゐて野蠻音に聞こえるのだらう、そして氣候の加減で赤い圓筒形の厨子の内から浮かれ出した歡喜天の拙い踊の様な、淫靡な踊を踊る時に伴奏する、ピー／＼／＼／＼を以て最上の佳調だと考へてゐるだらう、近時我國でも此歡喜天踊に憂身を簞してゐる連中があるやに聞いてゐるが、あんな亡國踊は宜しく排斥して、もつと剛健の氣風を養成せぬといかんだらう、さうしないと踊に夢中になつてゐる間に夫れこそほんんの『Grave Consequence』が起り、揚句の果ては位置も名譽も何も彼も失はねばならぬ様になり勝ちである、恐るべく慎むべきである。

歸宿したのは四時半であつたが、室内はもう薄暗かつた、日が永ければ暑いし、暑い時には屹度日が永いと昔しから決まつてゐて、此場合は逆は必ず眞であつたのに、こゝでは日が短くて暑い

だから、隨分に勝手が違ひ様子が變である、旅行をするといろ／＼な目にあふから自然種々のことを覺えるものだ。

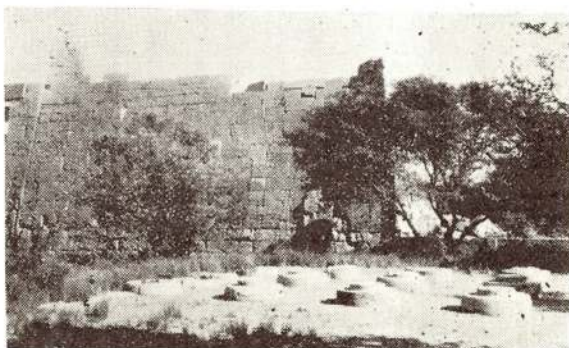
十 十 十 十

セトス一世堂では十人許りの物賣が、出口の兩側に一列横隊に並び、偽物の首飾やスカラップや乃至拂子——此れは蠅を拂ふ爲めの——を賣りつけやうとした。デイル・エル・バハリでは一人、ラメセウムでも一人、隨分根氣よく附き纏つた、まるで蠅と同じ事で、三度や四度では到底追ひ拂ふ事は出来ぬ。實際ルクソルの蠅は大變なものであつて、蠅が一寸でも止まつたところを捨てゝゐては、まるで何にも食へることが出来ぬ有様である。顔頭手足の區別なく群をなして止るのだからやり切れない、我國ではうるさいを『五月蠅』とかくが、埃及では『年中蠅』とかゝねば事實と一致しない。

蠅は虫として、其うるさい物賣であるが、こんなに大勢ゐて而もこんなに執拗いのは、猶且需用供給の原則に従つてゐるので、即ち買手も相當に

ある事を物語つてゐるのである。嘗て西班牙國は愚樂難なる聖ニコラス寺に近きある畫室で、一美術家がアルハンブラの寫生畫を賣つてゐたのをみたが、孰れも入念に拙い水彩畫で、學校で習つた以來唯一枚の畫すらかいた事のない私にも、あの位のならいつでも描けさうに思つたが、彼は夫れを賣つて口を糊してゐるのであつた、同

國セビーアのアルカザアの庭でも、水彩畫の即席販賣人がゐたが、その時はこんな畫でも買手があるとは、世の中は廣いものだ、何をしても食へるものだと思ひしたのであつたが、今になつてみると彼等は最上等の部であるので、こゝら邊では、あんな偽物賣がうちやつこい程ゐて、夫れで各々が相當に食つて行くのだから、全く以て



メ方末礎
ラに見りよ
セ見りよ
ムゆ奈似
大礎良居
門礎代ス
右中渡門
翼に翼
内線柱
側出廣
りあ用礎
見りひさ
るてら間
。飛た茂
前。鳥れ

驚かざるを得ぬ。

十
+
+
+
+

挿圖の内アヌビス及び大頭人身の『戌』立像の二つは、能勢丑三氏が特に私のために、前者は寫真銅版より後者は高さ約九寸の實物より寫生して寄贈されたものである。記して其厚意を謝する次第である。

(大正十三年四月三十日稿了)





漫 録

平面的模倣より立體的創造

—建築情叙篇(五)—

廣岡峰太郎

虚空を翔る鳳凰！地核に燃ゆる却火！人類への

建築は、天國と、地獄との象徴の中間に觀照される。尖塔、蒼空を指し、害は大地に潜む。

象徴と寫實への、核心への距離は、究極に於て一致する。

建築美は、詩哥、音樂、繪畫、彫刻等と同様に象徴と、寫實の究極に於て、海洋の調の如き、不

斷の脉搏つであらう。

建築家は、詩哥、音樂を立體的にする。詩哥、音樂に現るる、廣さ、深さ、繪畫、彫刻に現はるる、線條、色彩——旋律は、マツスとしての建築美に表現されるであらう。

建築に、表現さるる、豊かな情調と、強烈な、感覺とは、觀照者をして、詩哥、音樂の形象を、

まのあたりに、觀照せしめるであらう。

ボオドレエル、ロオデンバツハにゆき、マズネー、ワグネルにゆき、さては芭蕉、良寛の、感覺と形式 マツスとしての建築は、建築美は、この境地に迄で滲透してゆくであらう。

建築家は、詩哥、音樂の心を知る可きである。

建築家は、詩哥、音樂の本質と、建築の本質との、究極に於て、其通なる事を知るのであらう。

建築も、詩哥音樂、繪畫、彫刻も、その動機に於て、その目的に於て、その結果に於て、人生への善き饒別ならぬはない筈である。

建築に於ける、象徴と寫實との道は、構造と、情緒との二つの道では無いか？

構造と、美的なる情緒とは、渾然としてマツスとしての、建築美への表現をなさしむるであらう。美は、美の對照としての、質や量に、比例するものではない、建築の質量に依りて、建築美の定まらない事は言ふ迄でも無からう。

無機物の、綜合をして、有機的ならしむる建築家の睿智！建築物の靈性！感覺のイルミネーショ

ン！

不斷に拂はるゝ、建築家の忍苦！それに伴ふ、

藝術的エクスターシーの境地！

建築界新人の、我等をして遂に、彼の埃及、希臘、羅馬等の古代建築の、傀儡師たるに、終らしむる事勿れど、叫ばしむるは、美術史上不滅なる古代建築への、讃頌に、素ならざるが故えであらう。愛するが故えに、愛するものへの冒瀆を、許さぬ譯ではないか？愛するものゝ冒瀆は、自他共に、忍び耐へ難き行爲ではないか？

星霜、幾百、幾千年、日月は、恵み、溢れ、潛へ、哀しむ。

不二なるもの、日月！古往今來の、建築物の中にあつて、光り、澄み、こゝろ熱く、人生への、良き饒別たるものは、建築に表現されたる建築家の内的生命の流露！より醸さるゝ雰圍氣。

繪畫彫刻、詩哥音樂の、中なる美の立體化、建築化。否より廣汎に亘る、形而上、形而下の中なる美の、立體化、建築化の上に、君臨する建築美！それは、真なる建築の、本質を知る建築家にの

み知らるゝ、建築美至上世界への創造であらう。

『藝術家、宗教家は、乞食の如く無一物たれ』とは、その本質に於ては、眞の乞食は、餓えたる食を求め、藝術家の美。宗教家の信を求める理であるが、そのスタートに於ては一である。

若くして餘りにも恵まるる事篤き、否恵まれざるに馴れて懶怠なる、藝術家——建築家の前途や思ふべしである。この言葉が我が爲めの箴言である。

貧窮の底の歡善！

無一物の俯仰！

建築家は出發する。

無一物なるが故えに、自他へ共に敬虔であらう無一物なるが故えに、建築家は常に、精進、攝取の道を忘れないであらう。『身を捨てゝこそ浮かむ瀬もある』ことは、建築の上にあつても考へ得られようと思ふ。捨身の上の、攝取心光であるともいひ得よう。

繪畫、彫刻に於ける、素描を究めると同様の意味に於て、建築家の平面的模倣より、立體的創造

へ、劃期的の進歩をなさしむる方法に、建築模型に依る有機的建築——マッスとしての建築美への想像が、我々に、より親しみ深くあらしめ得まいであらうか？

岡田信一郎氏嘗つて『建築意匠の方法』と題して建築模型に論及し、『立體的建築の研究は、平面的、繪畫的であるより、寧立體的、彫刻的である可きである、建築家は先づ暫く、紙と鉛筆とを捨てて、土と篋とを持つべきであらう』と論斷されては、氏にしてこの言ありと、首肯せらるゝであらう。

眞の建築家は、あらゆる意味の、美の立體的要素より來るところの、豫想を心眼の上に、映像するであらう。然して、平面的なる、製圖的な方法によるところの、その平面的なる、製圖は、立體的豫想より——効果を充分に、發揮、表現せしめるであらう。乍然、之は常人の容易ならぬ道ではなからうか？

塑形的、彫刻的に研究せられし結果より、來る處の、建築美は、自他共に、想像が許さるゝ處の

否より以上の、至上世界を彷彿たらしむるものがあるであらう。

製圖のより塑形的へ、平面的より立體的へ！

建築模型の製作による、建築のスタデーは、建築美の、象徴への道を行くべきであらう。

寫實は、アカンザスや、ゾオリュームや、モールドディングや、コンストラクションへの道を行くべきではないか。

建築模型の製作を以て、只單なる、好奇の眼を注ぐべき時代ではなからう。又只單に、一部の、建築家の、ジレットタンシズムの満足にのみ、許される可き問題でなき事は、いふ迄でも無からう。

建築模型の始めて、建築家の手によりて、製作されし年代に就ては、いま此處に審になし後る機會を持たないが、いまこゝに述ぶる處の、建築模型の、製作の心に遠くとも、わが日本建築に於ても、建築物の雛形として、可成り古代より、製作され、存せしを、認める事の想像に難くはなからう。

然らば近代建築に於て、塑形的、彫刻的なる、

建築模型による、マッスとしての、建築美へのスタデーは、全然に、顧り見られないかといへば、否、否左様にあらず、問題の論議の餘地なく、思惟さるゝが如き、建築家の多數なるが如く、考ふれども、實行上の問題として、尙ほ遑遠の感あるは如何？此處に於て、考慮を拂ふ事の、建築家としての、當然の責務を、思ふべきであらう。

現代、こゝに求むる、建築模型とは、過去に於て稱へられし、建築雛形でもなく、又近代人の、兎角、陥り易いジレットタンシズムへの建築模型でもさらさらなり。

繪畫、彫刻の上にも見られない、獨特の、建築美の表現への模型！

建築模型、それから、繪畫、彫刻の持つ美的情緒、以上の獨特なる、美的情緒の世界を創造せしめるであらう。こゝに、建築模型の持つ藝術的價值は肯定せらるゝに至るであらう。

建築模型に表現されし、美はやがては、マッスとしての、建築美——への世界を展開せしめるであらう。

建築模型の觀照者に迫る、感覺、情調とは、構造美と、美的情緒との、旋律、憧憬を伴ふであらう。

塑土より、美への展開と、同時に、美の塑土への展開であるとも考へ得られよう。

塑土への美の思慕！建築の美への讃仰！

塑土への、彫心鏤骨は、建築を、建築模型を、藝術價值上、愈々深め、建築美への、地上禮讃の聲は四方に起り、建築家の個性の藝術家としての最高に列して、確固たらしむるものがあるであらう。

建築模型は、實在の建築を對照としての、意義深きスタデーとなると同時に、他面、建築模型としての、獨特の世界が展開されよう。

建築模型の、彫刻的タツチのため、建築美への冒瀆は、寒心すべき事であらう。彫刻的タツチは建築美への、テクニクである。

繪畫的タツチより、彫刻的タツチより、より感覺的、より情調的なる世界に、建築模型の自由なる境地があるであらう。

建築美への、建築模型による、スタデーは、詩歌、音樂、繪畫、彫刻的より、より建築的でないければならぬ。否、藝道に於ては、凡てが、建築的であるべきであらう。

建築模型への提唱は、建築家として、自他共に考究より、實行に移るべき時ではないか。

凡そ建築家として、不世の中の人として、あらゆる意味に於ける、平面的模倣より、立體的創造へ……推移すべき現代ではないか？

建築美至上世界への、本願は、自他共に、精進獲得すべきであらう。十三年三月二十三日

七 灯を行きて祈れる

汀の草の葉にさへ、露も宿れば、霜も結ぶ。ましてや、春になれば、蝶も休めば、小雀も、ほど近い葎の中で、他愛ないピクニクでもするといふ事だ。

曉は、霞む。眞菰の果より、ゆら／＼と、昇る太陽を禮拜し、晚歸の小舟に、水郷の哀愁を、旅人は、しみじみと、味はふといふ事だ。

汀の——もつと廣い意味の、水の相のあらゆる意味に於ける千變萬化を、多くの人達は、知るであらう。

水の心の、優しさ。強さ。汀の對照としての、建築美！自然の中に、ひたすら、敬虔なる、建築家の篤信！

汀なる、茅屋一軒、楊柳一本、湖心のあたりは深い深い、靄で、影を落す、滲ます、片割月の趣は、水墨の如である。

往くさ！歸るさ！身を託す輕舟の上、望見す、水村の小屋、水路は、はるばるとして、心は恰も悠久に、似るであらう。

水の姿の、朗かに、搖曳する水村漁家の、一構だに、建築の中なる、詩歌、音樂の心を知る人達に、不斷の波打つ、美の戰慄を觀取されようといふものだ。

水の姿の、水の心の、永久に變らぬ如く、建築を通じて現る、建築家の精神氣魄も、永久に建築美を、對照としての、創造への一念に、變る事はなからう。

滾々として、湧き出る、深山の奥の、泉のほとり、幽寂は苔の花に溢れ、天臺、眞言の、密教建築は、空彌高く、大氣澄む、山獄に、輪奐の美を極め、松籟之を唱し、溪流相和すといふ。

水ぐるまやまずめぐるも人あらぬ夕は霧のこゝだ流れる。

峽を行きて、親しきは、水車小屋。

永遠への美の旋律は、物憂い春の、片山影に、醸されようといふものだ。

春の思ひは、崖にさく、山吹の花にも、宿らうといふもの！

偏へに、汀の建築美を讀へよう。

水都、ヴェニス、の、夕べ、ゴンドラをかりて、倦くことを知らぬ建築郡の、眺望に。或は、ロンドン市中を、貫く、テムス河畔に、佇みて、ウエストミンスター寺院の邊り、夕霧深き回想に、或は又、天涯知れぬ、曠野を、流るゝ、ゾオルガの、流域に、仰ぐ古城趾への、思慕！

極まるどころに必ず、道相通じ、水は、生に流轉の、諸相を通じて、さゝやくものがあるであら

う。

河川、沼澤、海濱の附近への、建築物は、我國に於ては、殊に、建築家の豊かなる、調々々感覺——深遠なる理論との上に、俟つべきものが多からうといふ。

水莊、海濱ホテル、艇庫——漁家、見張小屋、或は又、水村計畫！

汀に映る、建築物に、さゝやきかける、さゞ波！碧澤に影澄む白き、バルコニー。

奔流に、逆巻く影を落す、水門の迫持！或は又高原の湖岸なる、艇庫の影に、ヒヤシンノの、花の爽かさうなものも、讃へ、調高く合唱しよう。

誰か。姿淨く、調高き汀の、さゞ波の、奏での神秘さを、開き得よう？

將又、『春里のたゞしごとくこれにけり』の哀婉！さては『五月雨をあつめて早し最上川』の、豪宕！の對照としての、建築美への、夢想？を科め得ようぞ。

野を超へて、或時は、衢に出でて、降りしきる初夏晩春の、雨夜の視野に、醜汚固陋なる建築郡

を眺望する時に、マチス、書くところの『ノート
ルダム寺院』藝術覺書に於ける、羅馬『聖ピエ
ロ』或は、ロダンの『ランスの本寺』を通じて、想
起する事ども！

雨降る汀を行きて、孤獨なる者の、祈禱の、度
ましさに徹するがいふ。

我が、乗る舟は、波のまにまに、水村を過ぎて
或は、水莊の汀に、或は、海濱ホテルの、華かな
る、燈光ゆらぐ、夕の、ワルツの曲をも、聞かう
といふものだ。

十三年四月三日神武天皇祭

一 莖 に

巨 花 一 輪 や

閑 古 鳥

バラックに光る初夏の東京

在京東 楠原祖一 郎

一

私は四五五年の大阪生活から、以前の東京へ舞ひ戻つて、震災後の東京に住んで居ります。今の東京は將に生れ代らむとする爲めの憫みを續けてゐるのです。復興の努力とも云ふ事が出来ませんが、それよりも適切な言葉は『新生への努力』と云つた方がよいかも知れません。それはごに今、東京は人々の努力が其の方面に集中されてゐます。私は未だ震災後の東京生活は、一ヶ月に過ぎませんから全東京を隅なく視察した譯ではありませぬから部分部分に對しただけ、私の感じた事を申し上げるに止まるであらうと思ひますが、各方面に亘つてざつと一亘り眺めて見ましよう。

二

さて今の東京で、何んと云つても、新參者の東

京觀は、バラックの東京と云ふ事です。廢墟の跡に醜い姿をして所狭きまで、初夏のミツデル、ライトに浮き出されてゐる状態は、中に住んでゐる人々の苦しみもさる事ながら、只だ毒々しい刺戟を、吾々の平和な胸に刻みつけると云ふより、外に何んの感じも起りませぬ。試みに東京驛から中野行きの省線に乗つて右側の窓から、向ふを見渡すと、見渡す限りバラックの、亜鉛板屋根ならざるはなしです。よくもまあ此んなに立てならべられたものだ』と感じさせられる程に、空いた所なしに塞がれてゐます。其の間には震災前の様うな線もなければ、潤もありません。只だ其の見苦しい俄か建築に之を、架ける様うな思ひを起させるのは、毒々しい色で塗りたてた看板の刺戟です。此の刺戟は私の新東京生活を不愉快にも又しつゝあるものはありませぬ。其の中でも一等不愉快

に思ふのは、チープ、レストランの赤看板です。亜鉛板特有の色彩で、可成不愉快な刺戟を與へるのに、それに末だ、見ても腦が浮きそうな輕々しい意味で『復興食堂』とか『新生軒』とか『文化食堂』とか其他曰く何、と色々な題を掲げて人の注意をそゝろうとしてゐます。看板を架ける方では、目に止まつて其の存在が明になれば目的が達せらるゝ譯だから、非藝術的であらうが、非文化的であらうが、一向問題とも思つて居らぬでしょう。併し吾々にして見ると如何にも落ちつきのない、上品さの同しい、極めて輕々しいものと思へませぬから、まさかそうした所で食事をして見やうとも思ひませぬ。そうすればやはり其の目的とする看板の設置が無意味にはならぬでしょうか。之は東京の人々は考へてよい事だと思ひます。

話は横路へそれましたが、此の潤のないバラック東京は、盛夏の熱光を受ける様うになれば、焼け出されて、太く心を傷めてゐる人々なり、其の人々に抱かれて、佛の心に抱かれてゐる様に美しい、をさなごを思ひ出すと、其のあへきが偲

ばれて、泪なくして此の文章を書く事が出来ませぬ。私等は外へ出て『街頭への働き』を他の社會事業家の様うになし得ない人間ですから、家に居て心を碎くだけでは何にもなりません、せめて此の心を持つて下さる人を多くする爲めに、此の文章を書いたのです。私は茲で住宅問題を専門的に評論する目的はありませんが、強いて申し上げる事が一つあります。それは、只だ一つの氣領の問題であります。今は何れも佗びしい假寢の住ひですから、採光、通風、音熱等の事は全然問題にはなりません、然し如何にバラックとは云へ氣領の事だけは考へて欲しかつたと思ひます。

たとひ衛生學上の定説に依はなくとも、それに依準して欲かつたと思ひます。普通一人宛の氣領の所へ今は三人位住んでゐます。是れは寢室が眞晝の熱光で燦されて、夜更けても尙其の退ない時そこに幾多の不衛生の原因が醸されると思ひます。私は此の状態を想ふと、じつとして居れない様うな、焦燥を感じます。氣領のない其他何一つとして條件の備つてゐない、今のバラックの此の夏の

状態は、焦熱地獄となり終るのでないかを思ひま

すと、一日の疲れをさへ、完全に與へ得られない公の力の無力なのに今更驚かざるを得ませぬ。是れは最初の政策を誤まつたからです。最初に營利業者のバラツク建築を充分に、當局の監視しなかつた爲め、今日の惨めさが起つて來るのです、當時は『天空く地冷へたり』と云ふモットーが震災直後のそれでありましたか、今は將に『炎帝大地を燒き、人を焦す』と云ふのが、其のモットーとなろうと思ひます。今度警視廳では、此の困苦を幾分にも緩和する爲めに、各バラツクの屋根に、色々の草花類を葡はせる事にしたそうです。みどりの葉で、さし當りバラツクを埋めるつもりなのでしよう。之は時節柄よい思ひつきで、涼しさで潤しさと、美しさで、此の夏は越せるかも知れませぬ。不徹底な様うですが這ふでもしなければ、到底此の夏は超せないでしょう。

『バラツクに光る初夏の東京』と云ふ語は實に云ひ盡し得ない、物なやましき幾多の問題を含んでゐるのです。私は更に他の問題に就いて一通所觀

を書いて見ましょう。

三

次ぎに書きたいと思ふ事は『帝都の文化は今いぞれにありや』と云ふ事です。帝都の文化と云へば、誰れしも、先づ銀座を想像します。又それに違ひなかつたのです。所がそれは惨めにも灰燼となつたのですが、然し今は早やくも復興の輝を並べて道行く人の足を留めさせます。然し以前の面影は今はいづこにもありません。震災以前の『銀座のそゞろ歩き』は大東京人の夜の慰めの最大なるもの、一つとして、凡ゆる人の心を浮きたしめたものですが、今はその心の浮きたしめも素より無い様に見受けられます。只だ何者かを追ふて歩く、若き思ひを胸に秘めた男、さては乙女の群が、極だつてケバケバしく、私共の目に映りますが、それ以外には、夜の銀座を照らすアーク燈の光にも、以前の光もなく、淋しく新生の夜の銀座を、透かしてゐる位の感をしか與へませぬ、今は市ヶ谷見附から、神樂坂へかけて、それが第二

の銀座たらんとして居ります。前の堀には、みどりの葉に浮び、若き人々によつて、しきりにボートが走つて居ります。神樂阪の狭き通りは、夕ぐれて電燈の光も眩ゆく、恰も大阪の心齋橋から、戎橋へかけての、あの眩しい通りを縫ふて行く人々のそれを思はしめます。夫程に神樂阪は銀座のお株を奪はんとして居ります。這ふした事が、若し『文化』と云ふ(亂用され易い意味を持つ言葉によつて)名によつて呼びうるものならば、將しく都帝の文化は『銀座文化』から『神樂阪文化』たらんとして居ります。榮え得る所は榮は、亡ろび逝く所は滅ろぶと云ふ様な、馬鹿々々しい命題が若し許され得るならば、『滅ろび逝く銀座』に對しては無限の哀愁がなければなりません。然し是れも一時的の現象で、聽て新東京の文化はやはり銀座に返る事にならうと思ひます。

東京には、是よりも更に有名な歡樂郷があります。それは淺草の民衆藝術です。私は淺草の本願寺へ所用の序でに、淺草と本願寺の方と歩いて見ました。私は以前の東京生活の可なりの長い間に

只の一度も淺草を訪ねた事はありませんでした。震災後始めて淺草の觀音様に參りました。然し觀音様の焼け残つたのは當然新聞紙で見て承知して居ますが、併し全部焼き拂はれたであらうこの淺草の巷は、實に人の目も眩ゆく復興して居ります。併し甚だ不愉快な表言をいたしますが、淺草の私に與へた第一印象は、只だ『恐ろしく毒々しい』と云ふ以外に、他の言葉を以て私は云ひ現すべき術を知りませぬ。私は以前の淺草は知りませぬから、今のそれと比較して所感を述べる事が出来ませんが、只だ人の話に聞く以前の淺草の印象は私には茲に云ひ現はすべくあまりに慘酷な印象を與へて居ります。そうした印象を今の淺草に比較して見て、どう考へたかと云ふ事は私にはやうし得ない事です。今のも知りませぬ。そうした以外の意味に於て、道行く人の姿に、極めて自駄落な引きしまりのないものがある様うに見えました。たとへば銀座を歩く人、神樂阪を歩く人淺草を歩く人、と云ふ風に三階級にも分ち得るかと思ひます。這ふした分ち方は讀む人を不愉快に

導くであらうと思ひますが、私は他の吡喩的な言葉を用ひて表言し得る、文學的の氣を弄し得る能力がありませぬから、御辛捧を願ひたいと思ひます。

私の眼に映つた東京の人々の、服裝に就いて、矢張東京文化と云ふ事の序でに、論じて見たいと思ひます。東京に流行する凡べてのものが、一年も経たないと、大阪へ移入されないから、大阪はそれだけ東京より、文化が遅れて居るのだと云つて、或る人が、新東京人の私に、自慢して聞かせましたが、その東京人の此頃の服裝を見ますと、私には異様の觀を與へました。殊に道行く乙女の服裝となると、實にごきまでも藝術的な感を與へます。燃ゆる様うな想を、兩つの隆起に秘めて、若き衣に包んだ豊麗な肉體を、想像せしむるであらう服裝は、現代美術展の繪が、抜けだして歩いてゐる様にさへ思はれました。之はたしかに劃時代的な服裝ださへ思ひました。然し之は賞め言葉だと、早合點してはなりません。『日本の娘』には、日本娘の型があります。男も及ばぬ大股に歩

く乙女を見ると、いかに姿の美が目立つても私はそれを不愉快としか見ませぬ。現代風の服裝は固より私も好きです。然し『日本の娘』としての『しこやかさ』と『上品さ』と『重々しさ』を持つてゐなければなりません。背の赤茶化した學生服に、曲つた角帽の下から見苦しくも、首根つこに被さつた毛を見せて、破靴をはいて、ズボンのポケットに手を入れて歩く男と、眼鏡をかけたちぢれ氣の美人の——額だけの——薄よごれた白足袋とが大道を我者顔に横行してゐるのは、とても見られ様ではありませぬ。贅澤をするのなら思ひ切つてやるがよろしい。下へ二足三文のものを着こんで、上着ばかり着かざつたのでは、額の白粉が泣くでしょう。薄よごれた下着の下から、下關節以下を露き出して道行く様は『日本の娘』の本來の姿ではありますまい。網を被つたちぢれ毛の何んとか云ふ髪の卷方は、いかにも上品らしいが、着物の襟が汚れてゐては興が醒めます。貧いものでも、それが貧いなりに引きしまつて居れば、上品なものです。それを忘れて、現代式の美人を氣取

つても、姿の美は繪から抜け出した様でも、その美しさには、人を引きつけ得る『氣高さ』と云ふものでありませぬ。まだ／＼私の鈍い眼の光から、映じ出された面影を今少しく——私には出来ぬ事です——皮肉つた書き方を私の遅氣に託する事が出来ます。けれどもそれはもうやめて置きましょう。あまり娘さん達の悪口を云つては、獨身者の私には、よい結果が齎されませぬから。

それから云ひ残した事があります。復興の東京の演劇とか活動寫真とか云ふものは、民衆藝術即ちフアーマース、リユクレーション、或るは市民藝術シユニシバル、アートと云ふものを履き違へてゐる様に思ひます。民衆藝術とか市民藝術とか云ふものは、本來の定義を私はここに、かつぎ出そうとする程の野暮な事はしませぬが、ざつと申しますなら『其の民衆、其の市民の生きてゐる魂を掘んで、其の向いてゐる方向に従つて、それと合致する事の出来る。意圖と力が相共に働き合ふ』藝術が民衆藝術であり、市民藝術と云ふのです。今東京での——日本はどこでもそうですが——此

の種の事は何れも營利業者が毒々しい華客集中の奸手段を以て民衆藝術だと云ふ勝手な熱を吹いてゐます。見ても嘔吐を催す様なペンキ畫が、眼界を避け得ない迄に貼りめぐらされ、それで以て民衆藝術だとは、それは民衆藝術の方では逃げ出すことでしょう。是れは東京だけではない。大阪の人々も少し耳が痛い事と思ひます。此の悪口はこれ位にして置きましょう。

四

次ぎに公園の退廢を書いて見ましよう。日比谷のつゝじが私の東京入りの時花盛りでした。春ゆく夕日の泪ぐましまでに赤く空に燃ゆる頃、日比谷のつゝじ山のぐるりはアーケ燈にて光り出されます。その時、若き男女の甘き戀の囁きと、苦しみそのものゝ失戀の惱みと、淫らな男女の不純なキッスとに依つて織り成されたであらうと思はれる公園のつゝじ山は、花の色は少しも褪せて居りませぬ。みどりの森も私の目には同じ色に映つります。然しどうしても同じ色に映つらないのは

公園内のバラック住宅です。公園の樹木と、バラック住宅の屋根とに竿を渡して、ぶしつけな洗ひものを乾してゐるのを見ると、『あゝ日比谷は逝けり』と私の胸を波打たせました。私は決して貴族的の趣味を謳歌するものではありません。只だぶしつけは私に不愉快を與へますから、それを考へて欲しいと思ひます。公園に見苦しい家を建てる、それも場合によれば仕方がありませぬ。然しお互に遠慮があつて欲しいと思ひます。此の住宅でない。『人の目に不愉快を與へる事はお互ひに慎しみましょう』と云ふ考へがあつて欲しいと思ひます。

今は昔、ローマの盛榮の埋れしローマの場末、石より石に繩を渡して、淫らな風を恥ぢない主婦が、見苦しい乾物をしてゐる有様を想像して、彼我をコントラストある事の當否は別問題として、最後の人間の度胸の見苦しくも定まるのを見ては泪ぐましく物憂さを感じざるを得ませぬ。

私は或る月明の晩でした。或る事情で痛める心を胸に秘めて、日比谷の高臺に立つて、丸の内の

お濠に浮いてゐる月を眺めて一人物思ひに耽つてゐる時、ふと足下に眠つてゐる公園のバラック住宅を、ちつと見つめました。その時の私の心は、人間のさもしさの、限りを思はせました。千切れた草路の抜き棄てたもの、女の淫らさ、慎しみのなさゝを思はしむる、色の褪せた、其の常用する洗濯物を竿にふりかけた儘なの、食ひ散らかした残りものを無難作に棄た臭臭依願心になれ切つたそのさもしい囁き、たしなみもなく投げ棄てた紙屑、それ等の凡べてを月は變らざる平和の光でつゝむで居る。比高の光と、最低の俗悪さと、そのコントラストの中に私は轉かに物思ひに耽つたが果ては此の人々の上に、『やり場の無き自暴心』が斯くまでに人の心を随すものかと思つて、しばし月の光に泪を吞みました。是れは獨り日比谷公園のみの問題ではありません。上野、淺草、芝等其他にも未だ澤山ありますが、何れも此の例に漏れないのを確しかめました。私は思ふ。腹だゝしさ云ふものは起し得ませぬが、『生きんが爲めの疲れ』が凡べてかくせしむるのだらうと思ひま

すと、その人々の素の爲めに、隨された運命を呪ひたくもなります。東京の大災害を未だ約半分で喰ひ止めたのは、正しく此公園が要所々々にあつたからです。その公園が遊び場所もなき迄にバラック住宅によつて埋もれてゐるのを見ては『噫日比谷は逝けり』と云ふのも無理のない事と思ひます。上野の森を照らす月には、今も昔も變りはありません。只變り果てたのは公園の持つ色です。

五

私はバラックを見、東京文化を觀じ、公園の滅び行く面影を悲しみました。さて今一つ書き残して居るのを氣づきます、それは此夏の恐ろしい傳染病の事です。

今警視廳の調査したものと見ると、震災後一番流行してゐるのはチブスだそうですが、其のチブスが震災直後から秋風過ぎ十一月の末頃までの間には、一日平均四十二人づゝであつたそうです。そして震災以前の約三倍の數で、患者が発生してゐるのだそうですが、今年一月以降現在までの中

同患者三千餘名の中約五分の一は死亡してゐるのだそうです。私は此れを聞いて悲しみました、それはそうした事に整備を缺いてゐる今の東京の公共の機關は、今の所全く機能を發揮する事が出来ないであらうと思ひましたからです。若し此の調子で患者が発生して行くのなら、今年梅雨期を控へて、患者の發生率が、非常に増大するであらうと思ひます。是れは今の中に徹底的の防止策を講じなければ實に人の心を不安に導くものです。此れに對しては當局も色々と考へて居る様うですが、吾々の様な門外漢の彼れ是れ出しやばる所ではありませぬが、是れは各人が相愼んで、ぶしつけな振舞ひをしない事にしなければならぬと思ひます。

まだ震災其儘で手の入れてない所は澤山あります。そうした所は色々なものを棄てる爲め塵の山が見ても怖ろしい程築かれてゐます爲め、そこから發生する蠅の類等は蓋し恐るべきものと思ひます。之等が此夏の東京で、流行病を起す爲めに大いに活動するのだらうと思ひますと、自然の數と

は云ひ乍ら之は亦あまりに當局も無關心に打ち棄て過ぎた責任はあると思ひます。

そうして到る所で先づ復興するものは、飲食物からですから、家の中といはず、街頭の四つ辻と云はず、飲食物が盛り場になればなる程充滿つて居る。その間をボロ自働車は煙の様に砂ボコリを立て、是等に浴びせかけて行く。然かも其の中で、弗々出初めたアイスクリームの立賣りを、平氣で立ち食ひをしてゐる人々を見かけます。這ふした人々は、必ずや流行病に、かゝるのだらうと思ひますと、私は其の人々の横顔を見て通りますと、其の人はそんな事は一向お構ひなしと云つた風に、大きな手に、アイスクリームを無難作に掴んで黄色い齒を働かしてゐる。之は實に私は情けなく思つた事である。這ふまでしなくとも、もつと落ちついてやり得る方法があると思ふが、やつぱり地震の爲めにそんな事に一向頓着して居る様子に見へません。流行病が先これから生れるのだと思ふと、その人を呪つてやりたい位の不愉快を私は感じました。流行病は我身一つの苦しみであ

りませぬ。近隣の迷惑となるものです。一人の自制はそれを、未然に防ぐ事が出来ます。今の東京の人が凡べてが之だとは申しませぬが、這ふした事に都合よく出来て居るのですから、それだけ入りこみ易い譯です。兎に角此の夏は私共に非常に不安を與へずには置かないでしよう。

六

私は地震後の東京が今どうなつて居るかに就いて人情、風俗を主として書いて見たが未だ書きたいと思ふ事は澤山ありますが、然しそれは専門に亘りますので這ふした隨筆で取扱ふべきものではないと考へましたから、それは茲處では書きませぬ。それは他日改めて系統的なものに書いて見たいと思つてゐます。(完)

×
×
×
×

生命表現としての建築の相

別 所 悌 一

藝術の藝術價值は、一言で言へば、生命の生活價值と同じものである。正しき本然の生活としての藝術の深い基調は、こゝに指示するまでもなく唯單に効果的な浅い陶醉と蟲惑との浮動の世界にはあらぬ。陶醉は揺れ動く逃避である。蟲惑は根柢なき消極世界のものである。藝術の藝術としての眞の重い効果はその自ら醸成すべき雰圍氣の安易な感觸の快さや輕淺な共鳴の喜びにはない。單なる昂奮のための昂奮や感激のための感激は、多分、藝術のもつ本然の感覺の昂揚流動ではないであらう。深さのない感覺は生活なき感覺は生活なき感覺である。生活なき感覺は藝術感覺ではない。何等の生命基調の確立もなき感覺衝動が危く誤認されて、藝術の生命衝動の價值を無下に汚してはならぬ。藝術感覺は、決して、遊戲感覺と同一ではない。藝術の深い眞情は、斷じて、汚れた

る自己充足の虚幻に追蹤する慾執ではあらぬ。生活は手段ではない。生活は卑しき自己充足以上である筈である。藝術への道は遊戲への逃避の道ではない。遊戲には深さはない。逃避には生活の確立もあらぬ。藝術の世界は蕩逸への安住の消極世界ではない。生活は蕩逸ではない。消極世界は生活以下の世界でしかあらぬ。藝術の別名は生命である。生命の別名は肯定である。肯定の別名は生活である。生活なき藝術は、すでに、風に散らされたる塵芥でしかあらぬ。

従つて、藝術の表現は單に藝術に纏はれたる衣裝ではない。藝術は常に裸體である。藝術には藝術以外の何物に依つても自らを装はれる要はない。衣裝は生命の内質から遠く離れて、常に冷たい。藝術に燃えあがる永劫の火である。生命なき一切の死灰は最後まで藝術とは縁なき異邦人でしかない。

い。象牙の塔は激しく揺れて、卽座に落ち、崩れつくした生命なく生活なき藝術の一切は、決して生命の大地に高く確く立ち生長し得なかつたからである。生命は生命にのみに根を下ろして健やかに存生する。灰火を生命に接植することは能きない。冷たく派手に磨かれたる石と生活なき衣装の粉輩とは、遂に自らの生命を自ら創生し得ないであらう。生命なきものゝ一切の努力は、必ず、徒勞である。生命は、今、美しく蒼白き藝術の牢獄より逃れ、冷たく生活なき石の殿堂より出で去らなければならぬ。生命のゆくべき道は沈潜への道である。生命は深く沈む衣装は巧みに塗染されたる華麗な圓熟も卽座に、内質生命の豊饒を偽證する暴力は有ち得ない。表皮の効果を卑しく企圖されたる唆感、必ず藝術の眞の生命感覺とは別個のものではかあらぬ。豫期さるべき健全なる藝術の雰圍氣はこゝにはない。藝術表現は何等かの解説ではなく、宣言でもあらぬ。衣装の技巧に生活の夢はなく、衣装の奇智に藝術の神秘もない。衣装は衣装だけの淺さを有ち深さを有つ。眞實の表

現が僞瞞の衣装であつてはならぬ。内質は衣装にはない。生命は衣装以下に深く沈潜する。生命は自らを誇示して現出しない。波浪は表面でのみ激しく揺流する。藝術表現は波浪の如きものではあらぬ。従つて、藝術表現をとり卷く問題は、決して藝術の本質に觸れたる根底的の問題ではない。藝術の問題は衣装の問題では、決してない。衣装の重視は生命と俱にその眞の表現をも殺す。

藝術は、疑ひもなく、生活である。生活は卽座に生命の表現である。従つて藝術は全らゆる人間生活の種々相の、他に如何なる遁れ道もなき、直接端的なる生命の全的表現である。根強き感能と執念き情意との他心なく本然のまゝなる人格的燃焼である。制し得ざる激しき生命の生長の單直なる表現であり、必至的な示現であり、また宿命的なる發露でのみある。その焔は天へ向つての激しき焰である。その流れは淨流の如く到底中途に停め得ざる素早き流れである。熾え切るだ焰え、流れつくすだけ流れる生命である。眞摯にして一途なる絶對の意慾である。その感覺は生命直接か

ら將來さるべき筈である。その刺戟は生命直即の刺戟であるべき筈である。その選はるべき表現は厭くまで生の躍動としての高潮されたる切つ端つまつた唯一無二表現であることを要する。眞實は即し過ぎるといふことはない。生命は生きすぎるといふことはない。止むに止め得せる本然の眞實こそ生命である。藝術は生命の衣装ではない。裝飾にもつ興味を關心さに依つて藝術が左右に論議されてはならぬ。藝術は生活の傀儡ではない。藝術は藝術以外の何物にも屬しない。藝術への愛執は僞瞞なき藝術家にとつては本能以上に生得的な生能である。物象の最眞相への直面は藝術家にとつては自らの生命への死にもの狂ひの直面である。その生活は生命への致命的なる愛執の生活である。新しき藝術への出發は眞實の人間生活の確立のうえにのみあり得る。厭くまで透徹した生命への愛執を以つてされたる眞實への躊躇なき迫進突入がこそ、藝術への生きた生活である。全らゆる積極世界に於いて最後まで積極的な生活活動は藝術活動である。藝術の神祕は生命なき表皮に

はない。白晝の激しき生命の高潮にこそ眞の神祕はある。神祕は生命の脈動に共鳴し、生活の高き空間に廣く觸合和調して浮動し生活する。反映さるべき感興は生命あるものであることを要する。霄回氣は強ゐられず歪められずして、生れるべくして釀生されたる必至のものあることを要する。その表現は描破よりも溢出である。生命の力づよき把握ををいて、藝術の生活はない。藝術の生長とは生命の生長である。生命の停滯は藝術の墮落である。藝術への理解は他の何物に依つてもされず、唯、生命に依つてされる。生命の創見への道は藝術の完成への道である。生命は神の實存である如く確實なる實存である。神の永劫の如く藝術の水劫の世界のものである。落術が遂に宗教でないのは僞嘘である。

勿論、藝術は藝術のためのものではなく、またよく安易に解釋づけられるやうに人生のためのものでもない。而も、人生は人生のためのものであり、藝術は藝術のためのものであり、一切は些の意味づけもなき純粹人生の人生である。従つて藝

術は安易なる思ひあがつた自己肯定ではなく、むしろ自らなる主觀の確立である。藝術は派手やかなる客觀である前に、先づ、質實なる主觀である。藝術は他と雷同すべく強調されたる宣傳の具ではない。雷同は無反省沒内質と同意義でしかあらぬ。外方への安易な所謂理想化は藝術化の謂ではない。藝術は外方へ對つて多辯饒舌ではなく、むしろ内方へ深く沈思し默考する。藝術は外方への意味なき立證を求めない。藝術は厭くまで自己の生命に建つ。故に、常にありふれて客觀的に所謂美醜を論議されたる評價は藝術の眞の評價とはなり得ぬかゝる意味での所謂美は藝術の最後のものではない。藝術の價値は生命の價値である。藝術とは必須のものとの謂である。必須のものとは二つなき絶對の主觀の謂である。藝術の純粹表現は、必ず主觀の端的極至の表出でなければならぬ。深き藝術表現は主觀の痛感の公白である。主觀は生命の脈動であり、その呼吸である。従つて、藝術は些の例外なしに深刻痛烈なる生命の體驗からのみ出發する。藝術の深さは體驗の深さである。藝術

の價値は體驗の價値である。曾ての全らきる偉大深刻なる藝術は、必ず、偉大眞摯なる人生の體驗者からのみ生れて來た。従つて、藝術はこの意味でその體驗者の死にもの狂ひの苦惱の直截なる象徴であり、果てもなく哀しく流されたる汗と血との露出である。ゴッホの向日葵は彼の強激なる主觀の當然の表現であり、自らなる溢出である。最後はミナルオの明るき生活の頂點に於いて、哀しくオオベルで自らを殺し果てなければならなかつた彼の尋常ならざる、あまりにも激越なる人生への苦惱がこそ、彼の峻感慄情なる繪を生んだのである。ゴッホの宿命的なる主觀は彼の汗と血とを彼の繪に溢出させたのである。この意味に於いて、藝術は現實である。現實すぎる程現實である。科學よりも現實的である。またこの同じ意味に於いて夢幻である。夢幻的すぎる程夢幻である。空無よりも夢幻的である。主觀なきパベルの塔を建てる者は、必ず、危い。かの立體派はその表現内質を問題とせる藝術時代を超えて、むしろ表現形式を問題とする時代に到達したと自ら公告してゐ

るが、その主張の深かゝるべき根底に於いて、主観が本質を萬一にも確實に把握してゐないなら、立體派の道は暗い。主観なき一切は躊躇なく省略され破棄されなければならぬ。藝術の新しき曙光はこゝにこそあるであらう。

従つて、建築は單なる形體の遊戲ではない。建築の問題は目に對つての視覺の問題ではない。單なる感覺の問題でもあらぬ。建築の生命は形體にその重心を有たぬ。形體のみの所謂藝術化は建築の卑醜化でしかない。形體は建築そのものではない。作られたる形體はすでに藝術ではなく死骸である。形體のための建築構造はすでに建築の藝術としての安易な墮落である建築は、斷じて、虚構の藝術であつてはならぬ。表現派が過去の一直の生活なき形體を去つて、生命ある未來への内質に即することは、正しい。眞實の藝術ならざる形體派に依つて解體されたことは深い喜びである。建築構造は、言ふまでもなく、生活を停止化させるため、生命を概念化させるためのものではない。藝術表現は藝術家自らの生活意慾の表現であつて

その構造は彼自らの生命の構造であることを要する。建築は生命の體積であつて、決して、技巧の集塊ではあらぬ。或は他の立體なるものへの意識なき卑しき模倣でもない。建築は安易に言つて、立體に生命を與へ構造を生活化させる藝術である従つて、その形體の全てはその内質の生命の必至的な湧出溢派としての形體でこそなければならぬ。生命の表装としての建築では決してなく、内質のための構造でのみあるべきである。生命は極めて深い。エエリツヒ、メンデルゾオンが形體のための構造に媚びて彼のアインシュタイン塔を建劃したとすれば、彼の藝術生命は、多分、單なる技巧の死灰でしかないであらう。藝術の内質は徹頭徹尾生命である。建築の相はまた生命の相である。生命は藝術である。

×
×
×
×

副會頭	理事	池田實安
理事長	理事	中澤誠太郎
主記	理事	今林彦太郎
同計	理事	中村琢治郎
主事	理事	松本禹象
編輯	理事	佐藤彰美
同編	理事	木多二郎
同司	理事	伊藤正文
同司	理事	田中綱
同理	理事	谷口廉兒

編輯係

江村郊邨
鷹取陽

庶務係

西谷節
鷹取陽

會計係

大和榮衛
田村春松

合 計	會 員	名譽贊助員	特別贊助員
(六月二十日現在)	三五六	八四	三三
	會員(地方)	終身贊助員	普通贊助員
	一四三	五七	五二四
			一九六

本誌及廣告料定價表

誌	本		
十二冊	一冊	冊數	
九圓	七拾五錢	定價	
貳拾四錢	貳錢	郵稅	
料 告 廣			
度シ	一頁	半頁	種別金額
特別頁モ料金一定	拾五圓	八圓	
シアリ御照會アリ			

大正十三年六月廿八日印刷
大正十三年七月一日發行

（每月壹回
一日發行）

大阪市外中津町下三番一九八番地ノ一

發行兼編輯人
兼印刷人
江村恒一

印刷所 大阪活版所

大阪市北區堂島濱通一丁目一番地
堂島ビルヂング

發行所 日本建築協會

電話 北四二九一番
振替口座大阪三九、九七五
大阪市西區京町堀羽子板橋北

特約販賣店
柳々堂書店

電話(土佐堀二四四〇番)
振替口座二〇八四番

日本建築協會々報



會 報

一、本協會會則及細則の一部變更に付五月の例會に於て諮りましたが出席者定數に満たざるも通信決議を致しました結果大多數の賛成を得まして原案可決直に實施することに決定致しました原案左の通りあります

一、會則一部變更の

A、第四條第三項中「會員五名以上」を「會員貳名以上」に及「理事會に於て議決す」を「理事會之を議決す」に改むること

B、第六條第四項中「會員の紹介」を「會員壹名以上の紹介」に改むること
C、第二十條第四項中「特別贊助費年額金九圓」を「特別贊助費年額金拾貳圓」に改むること

二、細則一部變更の件

1、第十四條「例會の議決は會員數（地方會員の數を除く）の八分の一以上出席するを要す」の條項中「八分の一」を「十分の一」に改むること

2、第十七條「會則の變更は會員數（地方會員の數を除く）の四分の一以上の出席せる例會に於て議決す」の條項中「四分の一」を「五分の一」に改むること

一、五月例會に於て役員補缺選舉により當

選したる新理事の事務分掌は左の通決定致しました

主記 今林彦太郎氏

編輯 谷口 謙兒氏

一、堺市主催都市計畫資料展覽會が同市大濱公會堂に於て六月二十二日より同二十五日迄四日間開催されましたに付本協會よりは改良住宅設計圖案及同模型を出陳致しました

一、今回大阪市に於て大江橋及淀屋橋架換に付該橋梁の意匠設計圖案を懸賞募集致して居ります要項左の通
尙募集 件詳細は同市役所に付て照合せられたし

大阪市都市計畫廣路に架すべき
大江橋及淀屋橋兩橋意匠設計圖案懸賞募集

一、懸賞募集發表期

約一週間以内の豫定

二、募集圖案提出期

本年九月十五日限

三、審査の結果發表期

同十月三十一日（天長節祝日當日）

四、賞金

當選者には左の等級別に依り賞金を交付す

- | | | |
|-----|----|-----|
| 一等賞 | 一名 | 壹千圓 |
| 二等賞 | 一名 | 五百圓 |
| 三等賞 | 一名 | 參百圓 |
- 外に選外佳作若干を採る

五、審查員

宗兵藏 大澤三之助 片岡安
武田五一 古宇田實

六、意匠設計圖案

一、橋梁側面圖
一、同 平面圖
一、同 正面圖
一、同 主要部詳細圖
一、二橋連續側面及平面圖
一、配景圖

七、當選せざる圖案は提出者の希望に依り之を還付す

八、應募意匠圖案は審査終り後全部公衆の展覽に供す但し當選したる圖案に對しては其の當選者の氏名を公表す

一、京都帝國大學に於て左記の通來る八月一日より九月九日間夏期講演會を開催する趣へ申請ありたしこのことでありませう尙時間割は同大學へ御請求なさるか或は本協會事務所に一部備付けてありますから御覽下さい

本學に於て來る八月一日より第十五回講演會を開く聽講志望者は左記要項參照七月二十一日限り申込まるべし

大正十三年六月 京都帝國大學

要項

一、本會は各種學科の知識を普及するを以て目的とす

一、聽講者の資格は別に之を定めずとも本學に於て不適當と認むる者は之を謝絶することあるべし

一、講演終了後聽講日數其他を査定し證明書を授與す

一、聽講志望者は聽講料として一科目に付金貳圓を添へ申込まるべし但し申込書には聽講科目現住所年齢及業務を記載し宛名は京都帝國大學講演會とすること

一、期限内に雖も満員の節は申込を謝絶することあるべし

一、宿泊所に就て申出あるとき成るべく便宜を與ふべし

一、講演科目、講師等左の如し
刑法學上の基本問題

顯微鏡 醫學部教授 瀧川 幸辰
藥の作用と疾病治療との關係 醫學部教授 舟岡 省五
物理化學的生命現象 醫學部教授 尾崎 真純

合金學概要並に其研究方法 醫學部教授 正路倫之助
近代歐洲建築の概観(千九百年を中心として) 工學部助教授 西村 秀雄
日本文化史 工學部助教授 森田 慶一
認識論と現象學 文學部助教授 西田直二郎
化學と熱力學 理學部教授 堀場 信吉
數學解析に於ける基礎的概念並に定理 理學部教授 河合十太郎
宇宙進化論 理學部教授 新城 新藏

物理光學 理學部教授 木村 正路
經濟組織、特に貨幣交通 經濟學部助教授 作田 莊一
植物疾病の原因並に植物治病論大意(實驗を含む) 農學部教授 逸見 武雄
生活現象と化學變化 農學部教授 鈴木 文助

右の外會期中左の科外(夜間)講演を開く(聽講料を要せず)
八月一日午後七時 現時の財政經濟問題 經濟學部教授 神戶 正雄
八月二日 同 活動寫眞の話 工學部教授 宮田 道雄
八月四日 同 ワイツマンの人生觀 文學部講師 石田 憲次
八月五日 同 株式會社の病理 法學部助教授 小堀 國道
八月六日 同 愛情の起源 文學部助教授 村多 實二
八月七日 同 萬葉を歌人について 文學部助教授 澤田 久孝
八月八日 同 登山鐵道に就て 工學部教授 瀧山 與

一、今回岐阜縣主催を以て農村住宅改善の爲左記要項に依り住宅設計懸賞募集する趣であります舊て懸賞を御勧め致します

住宅設計懸賞募集
住宅は生活の容器にして其の適否如何は住民の生活に影響する所少からずされば之が建築に際しては何れも深甚の注意を拂ふべきは勿論なるも多くは舊來構造並慣行を墨守して建築するが爲め産業の經

營、保險衛生、子弟の教養、生活の慰安、其の他日常の居住に幾多支障を有し殊に輓近農業就中本縣の如きは養蠶業經營の進歩發達に伴ひ現在に於ける農村住宅にては不利不便あるのみならず農業經營方法改良の機運盛なりと共に其の改善の必要も亦愈々感ずること大なり其の他耐震耐風防風保温通風採光等に關し諸種の缺陷を示しつつあり仍て如上の缺陷を補ひ文化生活に適する中堅農家の住宅を而も經濟的に建設し得る模範設計を左記各項により募集せむとす

大正十三年五月二十日 岐阜縣

記

一、懸賞募集提出書類

イ、農家住宅及附屬建造物の平面圖、正面圖、側面圖及斷面圖。但し縮尺は壹百分の壹とす

ロ、宅地平面圖

但し菜蔬園、果樹、庭木、竹林等を設くるものは之を圖示すること、又縮尺は貳百分の壹とす

ハ、工事設計の大要及工費調書

ニ、説明書には耐震、耐風、防風、保温、通風、採光、臺所、湯殿、屋根、間取り、戸締其の他宅地の利用等に關し改善の工夫を凝らしたる點を簡単に記載すること
ホ、圖面は原圖紙（ドローイングペーパー）一枚に墨汁仕上げのこと
ヘ、平面圖には其の圖中に室等の名稱を

記入すること

二、設計の假想標準

設計は家族六人耕地一町歩畑五反歩を自作し養蠶框製拾枚（春五枚、夏秋五枚）耕牛一頭、鶏拾羽を飼育する者を以て假想標準とし計畫すること

三、應募期限は大正十三年八月末日とす

四、審査の上優異と認めたるものには左の賞金を贈呈す

一等百五十拾圓壹名 二等百圓壹名
三等五十拾圓壹名 選外佳作貳拾圓
審査に關し投稿者は異議を申出づることを得ず

五、投稿は岐阜縣廳社會課内住宅設計懸賞係宛に差出すこと

六、賞金を贈呈したる者の投稿は返付せず著作權その他一切の權利は縣に於て之を有す

前項以外の投稿は其の請求に依り縣より返付することあるべし

七、應募圖案及書類は各々隨意の同一の暗號を記入し別に住所氏名を記入したる綴書を添付すること 以上

一、左記の會員、賛助員諸氏宛の郵便物は所在不明の廉で返戻して來ます爲通信其の他に困つて居ります若し居り御承知ならば電話其他で本協會事務迄御教示を願います
會員 魚住 儀一君 同 西野 利雄君
地方會員内藤益二君 同 金子 巴君

同 村上 新一君 同 松室 成貞君
同 坂本 義信君 同 石田 信夫君
同 井上與左衛門君
特別賛助員今井完造君 同 岩本 勝君
同 仙田 大一君

普通賛助員太田四郎君 同 木越誠二君
同 好岡 享君 同 大森 島藏君
同 藤田隆之助君 同 中山伊勢市君
同 鴻上 佐藏君 同 吉本新之助君
同 野々山政金君 同 藤元 助一君
同 中野 安隆君 同 足立彌一郎君
同 堀本 兵一君 同 若林 季雄君
同 吉松 一君 同 若宮 虎吉君
同 天野 博秀君 同 小西松太郎君
同 谷口 昇君 同 横田 音七君
同 半田 芳男君 同 地福 勇吉君
同 小橋 重作君

一、普通賛助員間猪三郎君は大正十三年六月七日逝去の報に接しました洵に痛悼に堪へません本協會は直に弔狀を送り哀悼の意を表しました

會 合

○理事會

△時 六月九日（月）午後五時三十分—九時
△所 本協會會議室
△出席者 片岡副會頭、池田理事長、中澤理事、中村理事、松本理事、伊藤理事、今林理

事、谷口理事

△議事 一、會則並細則一部變更に付通信決議結果に關する件

會則並細則の一部變更に付通信決議により賛否を照會したる結果別表の通(別表略)にして大多數の賛成者を得たるを以て左記原案可決に實施のことに決す

一、會則一部變更の件

A 第四條第三項中「會員五名以上」を「會員貳名以上」に及「理事會に於て議決す」を「理事會之を議決す」に改むること
B、第六條第四項中「會員の紹介」を「會員壹名以上の紹介」に改むること
C、第二十條第四項中「特別贊助費年額金九圓」を「特別贊助費年額金拾貳圓」に改むること

二、細則一部變更の件

1、第十四條「例會の議決は會員數(地方會員の數を除く)の八分の一以上出席するを要す」の條項中「八分の一」を「十分の一」に改むること

2、第十七條「會則の變更は會員數(地方會員の數を除く)の四分の一以上の出席せる例會に於て議決す」の條項中「四分の一」を「五分の一」に改むること

三、右の通改むることに決議されれば之れを去る五月十九日例會に適用致します

二、六月例會に關する件
本月の例會に於ては會員相互の親睦を一層深厚ならしむるため晚餐を共にし且研

究會を開き經驗談を互に話し合ふの議起り左記の通可決す而して經費は協會の支出とし其の幾分を出席會員より徴することと決す

一、時 六月十七日(火)午後五時集合

二、所 大阪府立商品陳列所内實業會館

一、順序

一、晚 餐 正六時開始

二、研究會

1、鐵筋「コンクリート」の建物に於ける「コンクリート」施工法の經驗談

A、「コンクリート」の運搬に關する「シュートプラン」又は「ホヰーリングプラン」の得失

B、「コンクリート」の表面に俗稱「マメイタ」の發生する原因並之を防止する方法如何

C、「コンクリート」に使用する小砂利及川砂の粗細程度

2、大阪市美術協會主催第一回美術展覽會に關する感想及將來に對する希望

三、會務報告

三、補缺理事に關する件
五月例會に於て補缺選舉により當選したる新理事今林彦太郎、谷口廉兒兩氏の事務分掌に付左の通決定本人の承諾を得

主記 今林彦太郎氏
編輯 谷口 廉兒氏

四、其他左の諸件に付協議決定せり

1、岐阜縣より申越の住宅設計懸賞募集に關する記事會誌に登載の件可決

2、京都帝國大學より申越の夏期講演會に關する記事會誌に登載の件可決

3、名札立購入の件否決

4、職員上半期賞與に關する件

5、博覽會に關する引繼金の件

6 會員銓衡

○臨時理事會

△時 六月十七日(火)午後五時二十分—六時

△所 大阪府立商品陳列所内實業會館

△出席者 中澤理事、今林理事、中村理事、松本理事、本多理事、伊藤理事、谷口理事

△議事 一、震害報告書に關する件

二、物品購入取扱に關する件

右二件は次回理事會に於て協議することに決定

三、會則變更に伴ひ特別贊助員の贊助費増減を通知するの件

今回會則の一部變更に伴ひ特別贊助費増額したるにより其旨並來る七月より實施することを特別贊助員に通知することに決し原案文可決す

四、會員にして贊助員に變更方申出に關する件否決

五、會員銓衡

○教化委員會

△時 六月十七日(火)午後五時三十分—六時

△所 大阪府立商品陳列所内實業會館

△出席者 委員長古宇田實、幹事關部文雄、委員井上新二、小笠原朝、酒井勇三郎、澁谷五郎

△議事 一、小笠原委員其他より報告を聴取し今後の方針に付協議せり

○例會

△時 六月十七日(火)午後六時—九時三十分

△所 大阪府立商品陳列所内實業會館中集會室

△出席者 中澤誠一郎、今林彦太郎、中村琢治郎、松本禹象、本多二郎、伊藤正文、谷口麗兒、古宇田實、關部文雄、井上新二、小笠原朝、酒井勇三郎、澁谷五郎、池田谷久吉、石本喜久治、羽原德衛、橋本舜介、西山良太郎、朝永國次郎、近石利義、小川久太郎、美野時三、神尾秀雄、呼子正、田實、武田五一、高井茂雄、多田七五三、高田利一郎、高岡興三吉、田中寛造、田原政見、坪井誠一、中島智喜、永野房吉、中西六郎、永田三太郎、久保田小三郎、山本久清、八木幸治郎、矢崎高儀、山中茂一、前田清二、松下由藏、古橋剛丸、古谷芳三郎、小寺彌一、江畑幸太郎、青木茂雄、油谷清治、荒川實直、阪井米吉、南孝三、篠原太郎、下

浦光衛、久樹藤一、森本藤吉、須川廉太、澤原舜夫、池田豊三、竹腰健造、波江悌夫、谷民藏、長田岩次郎、高橋謙吉、大丁庄七郎、笠原德太郎、足立圓次郎、池村元之助、森德次郎、増山新平、長島角二、加隈弘人

露することなし先づ中村琢治郎氏の經驗談あり次て下浦光衛氏、松本禹象氏、波江悌夫氏、中島智喜氏其他數氏の經驗談或は熱辯を振るつて論難する等時の移るを知らず中にも某氏の如きは小砂利及川砂の實物を携帶して机上に於て論究せられ熱心家もあり次て第二即ち

一、定刻六時理事者の案内にて一同食堂に入り卓に着き晚餐を開始す宴酣にして中村理事立つて本日は片岡副會頭及池田理事長缺席に付代りて一言する旨を述べ一場の挨拶をなす拍手の内に終り暫時にして晚餐全く了りし場別室に於て休憩をなす

に移り伊藤正文氏、武田五一氏、古宇田實氏其他より感想及來期の希望等累々懇談あり何れも拍手の裡に了り次に中村理事より會務報告ありて閉會を告ぐ

一、再び一同ホールに入り研究會を開く
中村理事座長席に着き開會を宣し松本理事より左の問題に付て詳細の説明あり
「鐵筋コンクリート」の建物に於ける「コンクリート」施工法の經驗談
A、「コンクリート」の運搬に關する「シュートプラン」又は「ホーリリソングプラン」の得失
B、「コンクリート」の表面に俗稱「マメイタ」の發生する原因並之を防止する方法如何
C、「コンクリート」に使用する小砂利及川砂の粗細程度
右問題を逐條的に經驗談或は意見を吐

本夕は近來稀なる大盛會の例會なりしは洵に本會の爲喜欣に堪へざる所なり

○新入會員及贊助員

會員の部

井上 廉吉君 大阪市西區鶴町四丁目一七二地
池田 豐三君 東成郡複雄町野江四四六地
五十嵐 芳雄君 大阪市西區江戶堀上通一丁目日本橋上ビルディング内大林組
服部兼太郎君 中河内郡高井田村宇新喜田三一地
近石 正義君 大阪市北區上福島三丁目八五七佐々木方

奥野 時三君 同南區天王寺大道五丁目三

〇九四番地

恩田 秀君 豊能郡箕面村平尾四三五番

片岡 成男君 神戸市熊内橋通四丁目一八

地の七

梶垣 寛君 西成郡柴島水源地南公舎

金治 盛雄君 南河内郡柏原町字柏原七百

番地

神尾 秀雄君 大阪市西區市岡町六六四ノ

三淺原マツ方

川口 一二君 神戸市上筒井通一丁目二十

八番屋敷若木方

梶山佐一郎君 兵庫縣川邊郡神津村口酒井

神戸 重次君 大阪市西區春日出町四八東

洋紡績社宅

横田清次郎君 兵庫縣川湯郡川西村花屋敷

花屋敷士地株式會社内

田中 寛造君 大阪市西區新池田町四五番

地

武藤其右衛門君 同西區田中町三七番地一

村上 徹一君 同西區六條通一丁目四番地

植實宗三郎君 東成郡天王寺村五九一番地

山本 千吉君 兵庫縣武庫郡大社村香榎園

松野 彦一君 兵庫縣武庫郡西灘村森百十

五番地

丸山 正吉君 西成郡豊崎町南濱一四六番

地

青木 茂雄君 大阪市北區松ヶ枝町三九ノ

二百并好夫方

朝香 茂君 大阪市北區市ノ町一六廣瀬

坂 靜雄君 京都市北白川追分町八九

齋藤 立實君 大阪市西區江戸堀上通一丁

目日本海上ビルヂング内大林組

宮川 密堂君 南河内郡長野町古野六九ノ

一

宮川 豐藏君 大阪市西區土佐堀通五丁目

二九岡方

白木作五郎君 同北區西野田吉野一丁目四

三一

森脇 圭三君 兵庫縣武庫郡本山村字岡本

元 眞 勳君 京都市上京區寺町荒神口上

ル宮垣町上野方

白江四郎三君 大阪市北區北野堂山町五三

二地

大丁七郎君 大阪市東區上本町六丁目大

阪電氣軌道會社工務課

中尾 保君 堺市少林寺町四三丁

野村 敬一君 南河内郡柏原町二五四地

地方會員の部

堀本 義雄君 三重縣四日市市濱一色町東

洋紡績社宅

時岡 好三君 姫路市外野里東洋紡績社宅

渡邊 鏡一君 東京府下中野町字上ノ原八

九九

大坊 榮助君 三重縣津市津與三重町四五

〇地ノ三

無津呂德三君 東京府荏原郡平塚村上蛇窪

五二五

黒澤 研君 宇治山田市船江町東洋紡績

社宅

松本 榮吉君 東京府北豐島郡王子町船方

東洋紡績社宅

松浦 完二君 名古屋市中區西日置町字南

出東洋紡績社宅

昆 眞龜君 三重縣四日市市午起東洋紡

績社宅

酒井藤一郎君 愛知縣知多郡半田町字山方

新田東洋紡績社宅

木田 延衛君 東京市外瀧野川町四ヶ原五

五一

上東 辰澄君 東京市麹町區丸ノ内ビルヂ

ング五階大阪橋本組支店內

重本政次郎君 埼玉縣川口町大林組川口出

張所内

樋口 彦次君 大連市北大山通清明寮

鈴木文治郎君 支那上海揚樹浦路一〇三地

普通贊助員の部

萩原 兼利君 大阪市北區相生町七三地宮

原方

橋本 秀齋君 同西區市岡町七〇〇地伊藤

方

西田 勇君 西營郡神津町野中七地

豐島 芳雄君 中河内郡布施村東足代四八

〇

戸松 貞次君 南河内郡金岡村大字長曾根

太田 信夫君 東成郡鯉江町今福三〇七川

北合宿内

大橋 久市君 中河内郡小阪村中小阪

岡田 豊作君 東成郡中本町中道一二七
小野 五作君 下關西端町電話局構内
神戶 又七君 豊能郡豊中村岡町
金崎 敏夫君 東成郡鯉江町今福
片島 榮一君 兵庫縣川邊郡小田村杭瀬後
野田地
吉田光太郎君 東京市下谷區中根岸町一〇
八
横田 音七君 福井市日ノ出下町五五
吉田安太郎君 東成郡野江字内代二〇古川
方
谷山 恒夫君 大阪府南區天王寺筆ヶ崎町
三六佐藤方
高木 盛三君 同北區上福島二丁目七五五
津田 知一君 中河内郡英田村吉田九八六
地
仲 彦七君 兵庫縣川邊郡小田村杭瀬室
後三四
中村 徹夫君 南河内郡天見村大字岩瀬
上久保九市郎君 奈良市油坂町二〇
久下松太郎君 大阪府西區泉尾町一三八地
倉堀 博君 南河内郡狹山村字池尻
久保田 進君 大阪府北區北野堂山町五九
六藤村音松方
黑明 澄夫君 同東區中道店居殿一三三ノ
二
山本 一已君 西成郡豊崎町南長柄九九地
前田 壽一君 福井市松影町一五加藤方
前田佐太郎君 二島郡千里村字天道二二三七
七地

江崎與太郎君 東成郡天王寺村阿部野六三
有馬 義明君 西成郡玉出町字大江三〇
澤井 市松君 兵庫縣尼崎市中筋宮町一三
三地
佐藤 佐七君 滋賀縣膳所町字別保西森本
タマ方
木下彦太郎君 兵庫縣川邊郡長尾村荒牧
北川 安成君 大阪府西區土佐堀通二丁目
吉村館方
物部 庄平君 西成郡神島新道一〇五〇地
●退會會員及贊助員
會員 池田 惠君
普通贊助員 永江亘君、同三宅保太郎君、同
伊丹一雄君
●死去贊助員
普通贊助員 間猪三郎君 大正十三年六月七
日逝去
●住所勤務先異動
福永 收三君 豊能郡櫻井谷村字内田
坪井 誠一君 神戸鐵道局大阪係線事務所
（轉勤）
淺野 繁君 神戸市西代神戶高等工業學
校建築科
吉田 龍昭君 大阪府南區天王寺烏ヶ辻七
〇地
西岡 眞臣君 同北區澤上江町四丁目三五
地

松本仁重郎君 同東區内本町二丁目有田下
ラック本店建築場
近澤 武男君 中河内郡布施村字足代一二
三番地
小津 利一君 大阪府西區江戶堀上通一丁
目日本海上ビルヂング大林組
松室 成貞君 東京市本郷區曙町十三地に
ノ四號
宇都宮邦士君 都岡市寺町三人一四大林組
出張所内
鈴木 甫君 東京市麴町區永樂町一丁目
大林組東京支店
西山儀太郎君 東京府荏原郡入新井宿山王
二七四四
吉川 勝君 名古屋市中區新柳町六丁目
住友銀行支店建築場大林組出張所内
西脇秀太郎君 東京市外代々幡町代々木初
臺四八七
作山 義彌君 大阪府西區西九條上ノ町二
一〇地東亞鐵工所
古賀 郷實君 大阪府西區江ノ子島大阪府
内務部營繕課
白井 健三君 旅順新市街日進町六ノ二番
地
大野 竹一君 東京市麴町區大手町内務省
神社局内
宮崎 加平君 東成郡天下茶屋相生通三丁
目一四七〇
川久保梅治郎君 東京市麴町區丸ノ内東京
復興局建築技術課

寄贈圖書

遠田 音吉君	和歌山湊金龍寺町一三	遠田 音吉君	和歌山湊金龍寺町一三
佐藤 正樹君	東京市日本橋區本町三丁目	佐藤 正樹君	東京市日本橋區本町三丁目
一竹 中芳	東京市日本橋區本町三丁目	一竹 中芳	東京市日本橋區本町三丁目
染井 武治君	東成郡天王寺村大字天王寺	染井 武治君	東成郡天王寺村大字天王寺
二〇一 地	滋賀縣大津市川口町松坂屋	二〇一 地	滋賀縣大津市川口町松坂屋
德永 義治君	大阪府西區南通一丁目	德永 義治君	大阪府西區南通一丁目
旅館内	大阪府西區南通一丁目	旅館内	大阪府西區南通一丁目
近藤 朝一君	清生館四階安井建築事務所内	近藤 朝一君	清生館四階安井建築事務所内
清水 倉八君	東京市丸之内東京驛前大林	清水 倉八君	東京市丸之内東京驛前大林
細支店內	京都府宇治郡山科村日岡字	細支店內	京都府宇治郡山科村日岡字
小村 清三郎君	坂脇二六	小村 清三郎君	坂脇二六
工藤 覺二君	兵庫縣武庫郡小山村岡本字	工藤 覺二君	兵庫縣武庫郡小山村岡本字
東地 藏七八三ノ一	鹿兒島市外郡元大日本紡績	東地 藏七八三ノ一	鹿兒島市外郡元大日本紡績
浦野 紋次郎君	鹿兒島市外郡元大日本紡績	浦野 紋次郎君	鹿兒島市外郡元大日本紡績
鹿兒島一場	鹿兒島市外郡元大日本紡績	鹿兒島一場	鹿兒島市外郡元大日本紡績
大塚 仁三君	鹿兒島市外郡元大日本紡績	大塚 仁三君	鹿兒島市外郡元大日本紡績
中村 徹夫君	鹿兒島市外郡元大日本紡績	中村 徹夫君	鹿兒島市外郡元大日本紡績
內	鹿兒島市外郡元大日本紡績	內	鹿兒島市外郡元大日本紡績

住宅研究	郊外住宅號文化建築社	住宅研究	郊外住宅號文化建築社
滿洲建築協會雜誌	五號同協社	滿洲建築協會雜誌	五號同協社
工業評論	五號同協社	工業評論	五號同協社
工業ノ大日本	六號同協社	工業ノ大日本	六號同協社
電氣評論	四二七號同協社	電氣評論	四二七號同協社
電氣學會雜誌	四二七號同協社	電氣學會雜誌	四二七號同協社
郊外の大坂	四號同協社	郊外の大坂	四號同協社
大阪工業俱樂部	五號同協社	大阪工業俱樂部	五號同協社
通俗衛生	五號同協社	通俗衛生	五號同協社
人々	六號同協社	人々	六號同協社
都會	第六號同協社	都會	第六號同協社
榮ある生活	第十六號同協社	榮ある生活	第十六號同協社
學士會月報	四三四號同協社	學士會月報	四三四號同協社
建築世界	六號同協社	建築世界	六號同協社
朝鮮鐵道協會報	四月號同協社	朝鮮鐵道協會報	四月號同協社
建築協會月報	六月號同協社	建築協會月報	六月號同協社
郊外生活	十九號同協社	郊外生活	十九號同協社
生活改善	七月號同協社	生活改善	七月號同協社
建築の日本	六月號同協社	建築の日本	六月號同協社
建築の普及	五月號同協社	建築の普及	五月號同協社
商工時報	第五四號同協社	商工時報	第五四號同協社
工業タイムス	五號同協社	工業タイムス	五號同協社
朝鮮と建築	四月號同協社	朝鮮と建築	四月號同協社
工業之友	第一九五號同協社	工業之友	第一九五號同協社
無線電話	創刊號同協社	無線電話	創刊號同協社
帝國の經濟と鐵道の關係	五月號同協社	帝國の經濟と鐵道の關係	五月號同協社
帝都復興委員會議事要錄	五月號同協社	帝都復興委員會議事要錄	五月號同協社
セメント界彙報第九三號	日本ポルトランド	セメント界彙報第九三號	日本ポルトランド



● 第七集第七号 掲載広告一覧 (掲載順)

岩住金庫鉄工所
 日本エレベーター製造
 大野正営業所
 ドーマンロング商会
 ミドリ商会
 飾磨化学工業
 瀧山商店
 金属建材工作所
 東京田村商会
 福田製作所
 原田商会
 ムツ商店
 ポール イー・サンマン事務所
 特許エレベーター製作所
 二和商会
 南満鉱業大阪出張所
 宇野耐火煉瓦

東和商会
 石綿スレート
 吉岡商店
 高谷商店
 山本東作商店
 田村商会
 建築金物商会
 日本洋瓦大阪出張所
 金剛商会
 HANKEN SEISAKUSYO
 横河橋梁製作所
 大平工業所
 井筒政蔵商店
 日本ホロタイル
 鈴木商店
 青木浦石材
 柳生電気製作所

大林組
 湯浅蓄電池製造
 日本ベイント製造
 野沢幸三郎商店
 森川組
 大阪市役所
 大福海上火災保険
 大阪鉄管商会
 浅海商店
 出浦建築事務所
 大阪建築所
 新海建築工務所
 小笠原建築事務所
 渡辺建築事務所
 葛野建築事務所
 片岡建築事務所
 松井建築事務所

横河工務所

横浜建築事務所

竹内建築事務所

宗建築事務所

国枝工務所

安井武雄建築事務所

柳下建築事務所

真水工務所

真水三橋建築事務所

増田清建築事務所

遠藤於菟

木子建築事務所

設楽建築事務所

茂、野村建築事務所

岡部建築事務所

前田松本建築事務所

西原衛生工業所

大阪窯業

池田勘藏

日本土木大阪出張所

大阪橋本組

大林組

竹中工務店

長瀬組

中新

佐伯工務所

野村組

久保田組

熊取谷熊次郎

山本組

松村組

藤木正一

正木工務店

小西組

鴻池組営業所

有山組

駒井喜兵衛

安藤組大阪出張所

辰巳吉之助

森本建築社

清水組大阪支店

銭高組

阿部鉄工所

梅原組

須賀商会

大理石工業

栄進社

松尾

山本窯業商店

萩原煖房工務所

新田ベニヤ製造所

河村青写真調製所

宇野沢組ス테인ント硝子製作所

品川白煉瓦

日本木材工藝

高島屋呉服店

コルク工業

ベニス工房

木下商店

城口汚水処理研究所大阪支店

山田大理石製作所

矢橋大理石商店

東和商会

大阪青写真調製所

浜口商店

西孫南店

岩崎商業

小野田セメント製造

日本建築紙工大阪出張所

高田商会

政正

関西ステインド硝子製作所

セール、フレザー

川崎工場

サカイブシ建築鉄工所

田中タイリング商会

桐田商会

東京建鉄

大阪耐火リノリウム工業

日本工剤

内外土木建築材料

星製薬

日米板硝子

田中源太郎商店

極東板硝子工業